

新しい家庭科

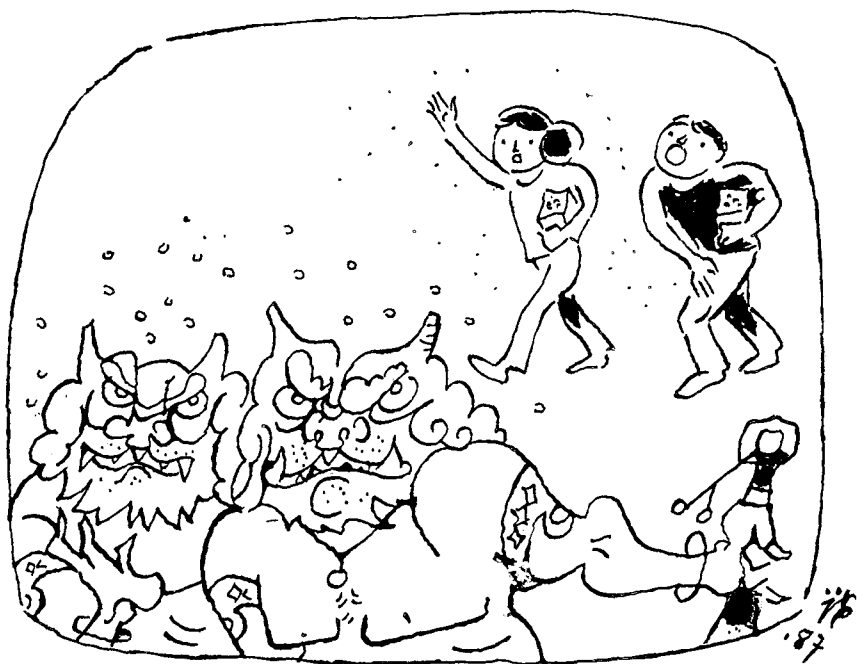
自立した男と女を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

ウイ

明日一人はみな成熟に向かって



1987 2・3



湘南に来てから冬から春の待ち遠しさは忘れてしまった。北国の雪の中での生活はほんのかすかな南風の匂いも感じとつたものだ。労働していた私には冬又は雪は敵のような存在でした。こちらに来てからも雪山にスキーなどで遊びに行く気持は毛頭なかつた。でも何年ぶりかで行つたふるさと冬の山河枯木に積つた雪の美しさにただ圧倒された。世界の政治、状況もいまだ冬であつて雪解けにはなつていない。国内においても失業者が多くなり不況が目に見えている。言論もあぶなくなつて戦中の暗く寒くなる傾向をしめしている。こどもたちのなげる豆で、はだして冷たい鬼どもは逃げ去ってくれるでしょうか？

(田沢 茂)

生きるということ

羽田澄子

自分は二十歳で、まだ嫁入りまえだと思っている八十歳の老女。子供たちの顔を見ても誰だかわからない。妻もわからず、夫の死も記憶にない、御飯を何日も食べていないと言いつづける。映画「痴呆性老人の世界」の撮影のために、このような老人たちに接して、私はなんとも言えないショックを受けた。

人間、こんなにまでなつて生きていることになんの意義があるのだろう。こうなる前に死にたいものだ、というのがそのときの私の正直な気持だった。そう思うと病院のスタッフの手厚い介護も、空しい努力のように見えしてしまう。

しかし、何日も老人たちを見つめて撮影しているうちに、私の考えは変わっていった。老人たちは脳が病気で冒されている人たち

である。残された脳で認識する世界は、健康な人間のものとはよほど違っているにちがいない。それは、歪められ、狭められた非現実的なものだが、老人にしてみれば他に考えようのない現実といえる。そう思ってみると、老人たちは自分が思いこんだ現実に対応して生きようとしていることが見えてくる。それは本当に生真面目に生きようと努力する姿であつて、私はたびたび胸をつまらせることになった。

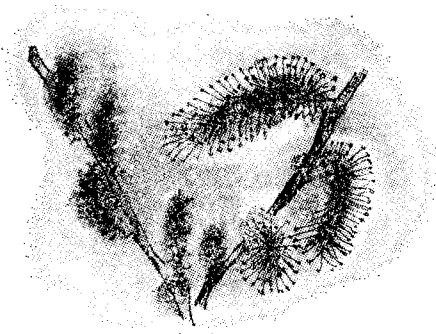
この世に生を受けたものは、その生を全うするのが自然の摂理というものだろう。私はこの人びとを見ていて、その生を全うできるように、健康な人間が力を貸さなければならぬのだと思うようになっていた。

(記録映画作家)



明日一人はみな成熟に向かって

○発 言○		○特 集○	
「We秋のつどい」に心洗われて 「We秋のつどい」に参加された方々から	川崎 絢子	「巻頭言」生きるということ	羽田 澄子
成熟に向かって歩む	日下部禧代子	「老い」とつきあう	敷島 妙子
一世紀を生き抜いた父	秋枝 蕭子	「大人になる」ということ	光元 和憲
学習の主人公たち 大人になりたい・なりたくない			
荒川区立第五峡田小学校五年三組の子どもたち	21		
豊中市立泉丘小学校六年二組・三組の子どもたち	23		
女ひとり生きる明日	26		
明日一人はみな成熟に向かって	28		
地域で老いを支える明日	30		
最後まで人間らしく	32		
老人保健法をめくって	34		
晩年の父を想う	36		
晩年の母を想う	38		
新版「ごろうくは」「ママ進む」が多い	40		
共に考えてください 就学時健康診断	42		
	44		



新しい家
—〇庭科を廻るために—

小学校では 子どもたちやなかまに支えられて……村田 尚子 48
 中学校では 新たな一步を踏み出して……磯部 幸江 53
 高等学校では 大豆……立山ちづ子 57

季節のうた……田沢 茂

研究ノート「性」 √女性のセクシュアリティ(3)……小沢 保子 64

教育のなかの心理学 カウンセリングとは何か(3)……植垣 一彦 70
 教室の窓 教室って、不思議 何かに燃えたい……仲野 暢子 72
 いま中学校で 武芸者のたしなみ!……吉田 和子 76
 読書つれづれ草 解放の熱と光を(3)……秋枝 蕭子 79
 荆冠の中に輝く星 高等教育の灯をかがげて……羽生 模子 80
 ワンポイント 菜の花……小林カツ代 82
 詩 今、凝ってるオムライス弁当……酒井 和子 83
 季節のお弁当 女たちの手で政治のリフレッシュを……鈴木みち子 85
 赤かぶだより 主食を投機に委ねてよいのか 言いわけ……吉田 清彦 85
 経済の目 いろんな十代人 “抗議型”から“提案型”に……

載

運

CMの中の女と男 生きていくための教育——養護学校の家庭科を見て 半田たつ子 86

〇波 〇ひと 鈴木みち子さん 20

表紙デザイン 加藤由美子
 目次イラスト 馬場洋子
 本文イラスト 編集部

〇アンテナ 94 〇十字路 92
 〇泉 89 〇“We” EDITOR'S NOTE 96

成熟に向かつて歩む

日下部 禧代子

迫られる発想の転換

終戦直後（一九四七年）には、男五〇・一歳、女五四・〇歳であった日本人の平均寿命は、男七四・八四歳、女八〇・四六歳にまで伸び、いまや日本は世界一の長寿国となった。一方、出生率の低下も著しく、一九二〇年に五・二四だった合計特殊出生率は、一・八〇にまで下がっている。つまり、大正時代の日本女性 は平均して一生に五人の子どもを出産したのにたいして、今日では二人以下の子どもしかもたないということになる。

平均寿命の伸び、出生率の低下は、女性のライフサイクルを大きく変えた。末子の大学卒からの人生は、大正時代わずか一〇年でしかなかったのに、今日では

三〇年にも長くなった。また、夫の死後のいわゆる寡婦期間は八年に及ぶ。寿命が短いうえに子どもの数が多く、一生の大部分を出産と子育てに費やしていた人生五〇年時代とは違う。子どもと夫を唯一の生きがいとするだけでは、老年期は空しいものとなってしまふ。先進国のなかで六五歳以上の女性の自殺率において日本が、長年トップを占めているという事実は、私たちに多くのことを物語っているとはいえないか。

ライフサイクルが変わったのは女性ばかりではない。男性も同じだ。末子が大学を卒業してからの平均寿命は二三―二五年ある。大正時代の三倍にあたる。定年以後の人生を、いかに過ごすかが問われている。「モーレッツ社員」や「働きバチ」にはつらい時代がやってきた。職を離れてからの人生において肩書きや学歴は、あまり意味をもたないどころか無用の長物ともなりかねない。老人クラブや老人ホームで、学歴



やかつての社会的地位をふりかざす人のそばには、恐らくだれも寄りつかないだらう。個人的な魅力、一人ひとりのパーソナリティ、人間的な豊かさが問われるのである。

「男は仕事、女は家庭」という性別による役割分業の時代は、そろそろ終わりに近づいたようだ。離れすぎてしまった男と女、夫と妻の距離を縮める努力が必要とされる。子どもが独立してからの人生、つまり夫婦だけの期間が二〇年以上も待ちかまえているのだ。もはや「子はかすがい」ではなくなった。この時期を欧米では「第二のハネムーン」と呼んでいる。が、はたして日本の夫婦には、そうしたロマンティックで華やいだ関係が期待できるのだろうか。

老年期は、子育てや職業その他もろもろの義務や拘束から解放されて、人間がもっとも主体的に生きられるはずの時期でもある。それは同時に、肩書きあるいは子どもにも依存しないで、本当の意味で自立することにつながる。平均寿命の伸び、出生率の低下がもたらす高齢化社会では、男女ともに自立した、そして全人的な生き方が求められているといえよう。女性が家事・育児という役割のみに固定されている社会において、男性もまた仕事にのみしぼられているのであり、生き方を選ぶ機会や可能性が閉ざされていることに変わりはない。

子育てや定年後の人生が、「余生」というにはあまりにも

長くなった今日、それにふさわしい新しい生き方が、新しい親と子、夫と妻の関係が問われている。しかしながら、老年期を人生でもっとも主体的に生きられる時期とするためには、一人ひとりが自分の人生観を変えるだけでは不可能だ。それを支える社会のシステムが変わらなければならない。新しい社会の仕組みができるには、社会の価値観が改められる必要がある。高齢化社会への対応とは、こうした三つのレベルにおける発想の転換であり、それは社会のあり方全体にかかわる問題なのである。

自立のための福祉

厚生省の人口問題研究所の推計（八六年八月）によれば、後期老年層（七五歳以上）に属する人々は、現在四六八万人であるが、二〇二五年になると約四倍の一七三四万人に達するという。後期老年層の増加は、なんらかのかたちでより手助けを必要とする人が増えることを意味する。今、ねたきりの老人は約四八万人、そのうち十一万人が特別養護老人ホームに、一〇万人が病院に入っている。痴呆性老人は約六二万人で病院や老人ホームにいる人は七万人足らずである。ねたきりの二七万人、痴呆性老人の五五万人は在宅で介護されている。が、その場合、介護者の八割を女性が占めているのである。

「老いては子に従え」という言いならわしがあるように、日本では四〇年前に廃止されたとはいえ、家族制度の名残りはいまだに根強い。既婚の子ども夫婦とりわけ長男との同居率が依然として高いことは、他の先進国の老人の世帯構造ときわ立って異なる点であるが、そうした社会通念や慣習を前提として、政策においても家庭の老親扶養を強調する「家庭基盤の充実」がはかられるなど、私的扶養への依存性は少しもおとろえてはいない。

しかしながら、出生率の低下により一人っ子同士の結婚が一般的になりつつある今日、他方では平均寿命の伸びによって、老親扶養期間は大正時代の約四倍、十八年にも及ぶ。家族の規模も小さくなった。親が子にもたれかかったのでは、子の方も倒れてしまう時代がやってきた。こうした現代家族のもつ脆弱性、私的扶養の限界という観点ばかりではなく、女性の社会参加の権利、労働権として老人自身の自立と主体性を守るためには、どうしても家族を支える社会の手が必要とされる。地域社会における近隣の人々の連帯による支えの手と国や自治体という行政による社会の支えである。同居にしても別居にしても選ばされるのではなく、選択でき、また別居しても老親と子や孫との交流が絶たれないための条件が整備されねばならない。人はだれでも住みなれた家で、家族や友人と切り離されることなく自立した生活を続けたいと願

う。だが、家族や世話をする人が肉体的・精神的、そして経済的に疲れ切ってしまったのでは、手厚い介護も、老人の間らしい生活も期待できない。社会保障及び福祉施策が整ってはじめて老人の自助・自立が可能となる。老人福祉は、老人と家族、老人と地域社会を結ぶ重要な架け橋なのである。

ことしは在宅福祉サービスマン元年だといわれる。しかし、実態は、たとえばホームヘルパーをみてもわずかに二万三〇〇〇人足らず。イギリスの一三万人、オランダの一一万人などにくらべると文字通りケタ違いである。訪問看護制度にいたっては有名無実といってもよい。なぜ在宅サービスマンの充実がこんなにも遅れているのか。最大の原因は、行政のセクシヨナリズムである。老人ホーム・ホームヘルパー・給食サービスマンなど福祉サービスマンは福祉（民生）部に、病院・医師・看護婦・保健婦は衛生部といったように福祉と医療が分断されているばかりではなく、在宅サービスマンと施設サービスマンもタテ割りである。地域においてだれもが自立した生活ができるには、福祉と医療、施設と在宅サービスマンという二者択一的な発想から脱却して、包括的なサービスマンのネットワークがつくらなければならないまい。

もう一つの豊かさを

分断されているのは在宅サービスマンだけにとどまらない。老

人ホームも、経済的および心身上の条件に従って軽費・特養というように分類されている。こうした「分類収容」は、同じ状態のものだけを集めるのだから、たしかにサービスは単純化され、能率はあがるかもしれない。しかし老人の立場からするとどうだろう。条件によって施設を転々とさせられてうれしいはずはない。タテ割り行政の下における分断されたサービス体系は、まさにサービスを提供する側の発想に立っているのである。有機的に連絡し合った総合的な地域福祉のシステムの実現は、サービスを利用する側の発想と論理に基づかねばならない。それはすなわち経済的効率のみを至上とする価値観にたいする見直しでもある。

明治以来、今日まで、戦前には先進国に追いつくための富国強兵、戦後は経済大国をめざしてわき目もふらず走り続けてきた。強いこと、速いこと、大きいことはよいことだ、という価値観は日本社会に深く根を下ろしている。だが、人間の価値は、効率や数量化されたものだけで判断できるほど単純ではあるまい。生産性の論理からすれば、もはや経済的利潤を生み出さなくなった老人は「社会のお荷物」にすぎない。しかし、だれも早死にしないかぎり老いからのがれることはできない。新しい価値観を見出さなければ、今、若さを誇っている人も、いずれは価値のない存在として選別され、隔離されることになるだろう。

私たちは豊かさを物質的なもの、金で買えるもの、量的なものだけに求めすぎてきたようだ。高齢化社会を生きるにはもうひとつの豊かさに気づかねばなるまい。言いかえるならば、豊かさの基準を問い直すことだ。新しい目、新しいモノサシをもつことだ。それには全体像のなかで、物事をトータルに眺められる客観性・想像力と同時に本質を見ぬくことができる知性が求められる。寿命が長くなればなるほど予期しない不幸に直面することにもなる。そのような時、もう一度人生をやり直すことができる強じんな精神力と創造力、いずれも、これからの高齢化社会に必要とされるものであろう。

高齢化社会が単に老齢社会となってしまうのではなく、成熟した真に大人の社会となるためには、これまでの競争の原理にかわって協調と共存の原理にもとづく社会および社会の仕組みをつくり出していかねばなるまい。それは男性の、しかも働きざかりの健常者によるモノサシでつくられた社会のあり方を女性そして障害者や老人、子どもたちの視点から再構築し直すことでもある。立場の違うもの、異質なものを認め合う多元的社会を実現することでもある。そこでは、一人ひとりの個性が豊かに花開き、多彩な生き方が約束されるばかりではなく、人生の最後にいたるまで人間としてのプライドが保たれるのではあるまいか。

(くさかべ きよこ・評論家)

“老い” とつきあう

敷島 妙子



私に与えられた題に“老い”とつきあうという言葉がつかわれていて、私は万障繰合せて筆をとる気になりました。編集の方は私が“老人呆けの問題”にとり組んでいることを指して軽い意味でおっしゃったのかも知れませんが、私の心構えを理解して下さっているようなうれしさがありました。

ぼけのお年寄りをお世話する場合、この“つきあう”心がとても大切で、老人の状態をどのように捉え、どのようにつきあっていくかということで、介護の良否が決まってしまうように私は思っております。不幸にして老人の状態を正しく把握できなかったために、本当に人間と人間がつきあうという関係ではなく、世話をやかせる側と世話をしてやる側との葛藤で終始なさる場合も多いことを、悲しく思っているのです。

幸いなことにぼけについて御指導下さる先生方も、このことを重視なさって、介護という言葉の中にどのようなおつきあいするかという意味も含めて使われるようになりました。こんなわけで、“老い”とつきあう”とおっしゃっていたことが嬉しく、何か書かせていただこうと思いました。

○ ○ ○ ○ ○

私は自分の人生を顧みても、人間は誰でもやはり日々成熟への道を歩いているのだろうと思います。昨日の私より今日の私の方が何かを積み重ねることが出来たように、明日に向かって又何かを積み重ねていきたいと思っております。それを思えば人間がぼけという病に侵されるということは、何と怖しくまた悲しいことかれないと思います。成熟が止まるだけではなくて、長い年月をかけて蓄積した精神的財産を失っていかねばならないのですから。しかも心ない周囲から

は、過去の歴史も業績も無視されて、能力を失った現在の姿だけを問題にされる場合が多いのですから、それを我が身に当てはめて考えてみても、やり切れない淋しさや哀れを感じます。

ぼけには原因がほぼわかつているもの、わからないもの、従って多少でも予防措置のとれるもの、今後の研究に待つしかないものなどさまざまですが、何らかの病変によって脳の神経細胞が侵され、機能が衰えたり失われたりすることはたしかなようです。

そのために新しく物を覚え込む力は極端に衰え、物事を正しく認識したり把握したり、それにどう対応するか、その成行をどう推し量るかというような、つまり知的論理的に思考する力が失われていきます。

我が家に迎え入れた時の舅も、こうした知的能力を失い、変わり果てた状態になっていて、他の病とは異なった哀れさ悲しさをひしひしと感じました。

しかし看取り終えたのちに、顧みて不思議な感慨を持ちました。私達家族は、この自らは成熟を止め後退の坂を転がり始めた舅から、思いもかけぬ大きな示唆を得たのです。もしこの介護体験がなかったとしたら、人間をこれほど深く見つめることも識ることもなかったらうと思います。

呆けた人は知的能力こそ失っていきませんが、情的なものは

ほとんど損われず、つまり感じたり思ったりする力は私たちと変わりなく働いています。この衰えた知的な部分と、保たれている情的な部分とのからみあい、舅の肉体や行動にどのような現れ方をしたかというのが、私達家族の前に展開された一見神秘的なまでに不可思議な現象でした。

これを不可思議と感じたのは、当初の私たちにあった、呆けに対する無智によるもので、だんだん老人呆けの実態が見えてくるにつれて、それは起こるべくして起こった当然の現象だったとわかって来ました。

人間の心と体・心と行動がどんなに密接につながりかわりあうかということは、書物からは知識として持っていたにしても、それは単なる知識でしかありませんでした。舅は知的なコントロールや見栄による抑圧がないだけに、実に純粹な形で如実に見せてくれました。心からのなまなましい納得がそこにはありました。本人に導こうという意図がなくても、心のままに赤裸々に生きてくれた、ぼけた老人の存在そのものが、大きな導きであったと思います。

このことを考えますと、忌み嫌われる「ぼけ老人の介護」という仕事も、すべてがマイナスの意味しかないとは言いが切れぬ思いがします。ある介護者のこんな訴えがありました。「私は姑のぼけのために、今まで続けていたカルチャーセンターでの勉強さえも断念することになりました。将来のある

子育てのためなら意味がありますが、何の稔りもないほけの介護に骨身を削られ、私の勉学の大切な時間さえも失うことがやり切れません」。

この御婦人は向上心のある、目標を定めて有意義な時間のすごし方をして来られた方で、センター通いを中断しなければならなくなった嘆きや、いつまで続くのか見通せないためのいらだちなど、痛いほどわかるのでした。でもカルチャーセンターでしか物を学ぶことが出来ないと思っておられる考え方の狭さが気になりました。成熟とはそんなものではない気がします。皮肉なことですが、意図的に学んだものよりも、時としては、体ごとぶつからざるを得なかった実体験の中で、かえって本物の成熟を得られるように思うからです。

とにかく「ほけた老人の心のありようと問題行動」というテーマは、世話をさせてもらう者にとって、知的欲求をゆさぶられるように興味深い問題でした。私の介護記録を読んで下さったあるベテランの寮母さんが、「この種の体験記録は、どうしても暗い悲愴感がただよい、読んでいてもつらい気持ちになります、この記録には随所にうれしいうれしいという言葉が出て来て、笑いやユーモアがあり、ついこちらも面白い笑いをしてしまった」と評して下さいました。おそらくあの当時の毎日ドキドキするようなうれしさ、不思議さ、おもしろさを、文中から感じとって下さったものと思います。

実際にはほけの介護というものは、そのようなやさしいものではなく、情なく、つらく、いらいらし疲れ果て、私自身も、もし一方にこの不思議なおもしろさがなかったら耐えられなかったらうと思います。現に義理の姉や妹たちも、このつらさの方だけに参ってしまい、我が家に援助を求めたのでした。

結局どこに差が生まれたかと言えば、最初に書いた、ほけ老人をどのように捉え、どのようなつきあい方をしたかということにつぎると思うのです。

頭の働きが極端に衰えたばかりでなく、だんだん困るような行動が多くなり、被害が及ぶにつれて、ほけると人間の価値の全てを失うように思い、自分たちとは次元の異なった人としてつきあうことになってしまったのは、情報不足の当時としては、いたし方ないことだと思っています。

私は幸いにして、この舅に出会った時、そのしぐさや表情の中に、私の心で充分推察できる心の動きを見てとることが出来ました。同じような感情を持っている人、ということが常に考慮しながら、この舅とおつきあいを続けたことが本当に良かったと私は信じております。

つい最近、ある本によって、ノルウェイの心理学者ハウゼンという方が、はっきりと「ほけ老人は哲学的にはノーマルな人間である」と唱えておられることを知りました。哲学を

学んだことのない私には、真の意味はわかりませんが、私の知的水準による感觸としては、ぼけた老人は知的能力は失っているけれど、心の動きはノーマルな私の心の動きと変わらないのではないか、やっぱり同じ人間として感じたり思ったりする心の働きは健在なのではないかということでした。

ただその思いや感じをどう表すか、それがどんな行動になって現れるかという段階で、論理的に筋道たてて考えることの出来なくなっているために、他から見れば一見狂った異常なものになるのだと思います。

例えば排泄物で汚してしまった下着を簞笥の中にしまいこむ行為も、たしかに異常であり、介護者にとってはとても困ることに違いありません、でも糞尿にまみれてニタニタ笑っているのとどちらが異常でしょうか。この老人の心の中には、一、知らぬ間に洩れてしまったことに対する病人としての悲しみ、二、こんななさけない状況をあの嫁に見られたくないという、恥の心と意地、三、また叱られたくないどこにかくして知らんぷりをしていたい。……というような人間らしい当然の思いがあるからこそ、見つからぬところに隠そうという行動になったと思います。しかしきれいに洗って着がえれば良いとか、異常とは思われない隠し場所を考えると、簞笥に入れば大事な他所ゆきが汚れてかえって叱られるとか、そういう思考が出来ないために、自分の力では精い

っぱいの考えで、対処されるのだと思います。だとしたらこの現れた行動の部分よりも、こんな行動をとるしかなかった思いの部分を重視して、人間的な情の世界の健在を認め喜んであげなければと思います。これはすごく難しいことのように思えますが、でも道徳とか倫理とかの問題であるよりも、心理学的にみた合理精神で対処できるような気がします。

舅だけではなく、多くの呆けのお年寄に接してみても、悲しみ、苦しみ、怒り、不安、などにさいなまれながら、残された力で精いっぱい生きておられる姿に、人間の哀れと愛しさを感じ、せめてこの情の世界を温かくうれしい思い、でいっばいにしてあげるようなつきあい方をしたいと思うのです。

ぼけ老人を初め弱い立場の人たちの上に起こる様々な社会問題も、根本のところでは同じなのではないでしょうか、物質的な欲望から、形あるものの生産的なものしか大切にされない社会の在り方に対して、心がどんなに大切なものであるかを気づかせるための一つの警鐘として、ぼけの問題が浮かび上がって来たのではないかと思います。ぼけた老人の生きる姿から、私が沢山のことを学んだように、政治を司る人たちもこの問題を警鐘として捉え、真の意味で成熟した社会を作りあげてほしいものだと切に願わずにはいられません。

(しきしま たえこ・「呆け老人を支える岐阜家族の会」世話人代表)

一世紀を生き抜いた父

秋 枝 蕭 子



父百歳息絶えんとし梅雨の入

梅雨^{しと}褥父一世紀生き抜けり

父逝けり梅雨の褥に香を残し

反骨の百寿を生きて梅雨の星

父逝きて広くなりたる夏座敷

右は、昨年六月下旬、いよいよ死期の近づいた父を看護りつつ、さらに満百歳一ヶ月半の天寿を全うした父が、六月二十六日早朝永眠した直後に、作った私の拙句である。

父は、五月十三日の満百歳の誕生日を子や孫や曾孫等に囲まれて賑やかに過ごした後、急に食欲を失い、ほとんど流動食の完全寝たきりの状態になった。もともと三年半余り前の昭和五十七年秋初から、長年患っ

ていた慢性緑内障が悪化して、両眼共に完全失明した後は、食事時以外は大体ベッドに臥床してラジオなどを聴いて過ごす生活となっていて、食事量も次第に細くなり、ことに昨年初頃から急激に少量となり、私は父の栄養バランスを保つために食欲増進策に苦慮していたのである。したがって流動食しか受付けなくなつてからは、ホーム・ドクターに相談して、ブドウ糖やビタミン剤等の静脈注射で多少の栄養補給を毎日行つたが、一度試みた点滴注射は、父の強い拒絶意志によつて途中で中止せざるを得なくなり、以後点滴拒否の態度は最後まで貫かれた。父は急速に衰弱してゆき、一時は五月末まで保たないのではないかと心配されたほどであった。

その後幸いにも、高蛋白の流動食餌を入手することが出来て、父の容態は好転し、五月下旬の句会（数年前から、父を

中心に、近隣の高齢者十名余りで月一回の俳句会が開催されていた)にも、今月の投句は無理だろうとの、私どもの懸念を吹きとばして、

天翔けるハレー慧星初夏の詩^あ

青海にヨット・レースの白帆の舞^あ

など、若々しく明るい俳句を作り、私どもを喜ばせた。

しかし六月に入つてのある日、「もう一度起きたい」との父の強い要望で、抱えて数歩歩かせたが、そのまま崩れ落ち、その後の父は観念したのか、再び食欲を失い、また時々幻覚症状を呈した。その様な中で父は死期の近いのを悟つてか、

この世をば望月などと思はねど吾が身に幸を恵み給ひしと辞世めいた歌をつくり、自らこれに解説して「これは藤原道長の有名な望月の歌をもじつたものだが、道長の驕慢とは違つて、皆への感謝の気持を表したものだよ」と述懐した。

昔から「真実一路」をモットーに、心にあることのみを吐露して来た父の言葉だけに、上手とはいえないこの歌から、死に臨んだ父の真情が切々とひびいて来て、胸のつまる思いであった。実際、完全寝たきりになってからの父は、世話する私どもや、往診に来られたお医者様や看護婦さんたちに、その都度感謝の言葉を述べるのが常だったが、さらに痰で湯茶の嚥下さえ不可能になって緊急入院してからも、回診のお医者様や看護婦さんたち、また下の世話などをする私どもに、

既に脱水症状で出難くなつていた声をふり絞るように、一語一語切りながら、「あ・り・が・と・う」を繰返し、それは一週間後の死去の直前まで続いた。

既に述べたように、父は入院後も、自らの意志で点滴注射を拒否し、「余計なことをしないで、静かに冥途へ旅立たせてくれ」と言い、私も担当医師に「一世紀生き抜いた父の最後の意志を尊重して下さい」とお願いした。心臓は日毎に弱り血圧も計れなくなつていたが、父の意識と気力は最後までしっかりし、酸素マスクを拒否しながらも、日課としてベッドの中で行つていた腕の体操を、死去日の未明まで行つた上で、静かに百歳の天寿を終えて、大自然に還つていった。「百歳の老人で、こんなに気力のあつた人ははじめてです、脳細胞がどうなつてゐるか調べさせてほしい」との担当医師等の要望で、かねて父も「自分の死体が医学に役立つなら、献体でも何でもするように」と言つていたので、病理解剖をしていただいた。その結果は、普通老人に見られる脳細胞の萎縮が、父の場合は全く見られず、脳の重量ともども若い人なみであつたと、お医者様方を驚かせたとのことであつた。「無限前進」の言葉が好きで、自然や人生に対して飽くなき好奇心を持ち続けた父、死の直前まで若々しい感覚で俳句や歌の創作活動を続けて来た父なればこそと、今さらながら父の生きざまに脱帽する思いであつた。

父の百歳に亘る生の軌跡や私とのかかわりについては、一昨年、本誌六月号の「家族、その人間関係」特集の中で、「百歳になる父とともに」の題で若干紹介させていただいたので、本稿では出来るだけ重複をさけて、主として父の晩年の姿勢と、とくに父が「熟年」乃至「老年」をどのように観じていたかを、父自身の言葉で紹介したいと思う。

玄海灘に臨む北九州の小村に医者の子に生まれながら、田舎に定着することを嫌って、単身上京して苦学の末、「最も自由な職業」として新聞記者になった父は、生来の一徹・短気・仁侠の性格から、しばしば上司と衝突して浪人生活を繰返しながら、波瀾に富む青壮年期を過ごした。そして約三十年前の大病の後、福岡の私のところに同居するようになった。

東南に立花三山をはじめとする山脈を眺望し、北西に博多湾を眼下に見ることの出来る丘陵に建つ我が家は、また野鳥や虫の宝庫でもあり、自然愛好心のひと倍強い父は、朝夕眺め飽きないといった満足で、詩作・句作を楽しんだが、一方父の好奇心は社会問題にも広く及び、政治問題・社会問題・国際問題、中でも平和問題に、多大の関心を示した。ベトナム戦争の折には「殺すまじ一兵をも!」と題する詩を作り、私に英訳させて、当時の国連総長やロバート・ケネディ、フルブライト上院議員等へ送り、反戦平和を訴えたりした。ま

た人権問題、同和問題、婦人問題等へも深い関心を持ち、私の婦人問題へのかかわりを、常に側面から支持し励ましてくれた。ことに十年前に母が癌で逝ってから、仕事を待つ私に対し、家事を手伝って協力を惜しまなかった。低血圧で「宵ばりの朝寝坊」の私のため、しばしば朝食の用意までしてくれた。九十代の父が精神的にも生活的にも自立し進歩的姿勢を有していたからこそ、私が安心して、定年退職までの勤務や、他の社会的活動を行うことが出来たのであり、私が最後まで父を看取ったのも、父への深い感謝からでもある。

さて、前述したように、生前の父を中心とした近隣の高齢者たちの俳句会が開かれていたが、父は折にふれて、彼等の句に短評を書いて回覧に供していた。茲に転載するものは、父が完全失明する直前の昭和五十七年夏頃(満九十六歳余)に書かれたもので、既に視力はほとんど衰弱していて、カンを頼りに、時には字の上に字を、行の上に行を重ねたりしながらも、意欲だけは旺盛に、また「老年」についての父の日頃の考を如実に示したものであり、敢えて原文のまま紹介する。

『老懶^{ちうらん}や拾着のまま初夏の入り(T・T生)』

(短評) 老来、坐作進退が不自由になるにつれ、おのずから物事が投げやりがちになる。この句は、その実相を、見事に

捉えて、俳句の、芸術上の座を高めている。換言すれば、剣道は、一刀兩斷、その切れ味を示すが、俳道は、縦横無礙、神出鬼没の妙味がある。この句も、「老懶」の実相を、「冬着のまま夏に入る」と、如何なく傍証している。

ところで、この「老懶」であるが、これはやがて「老臭」に通じ、さらに「老人呆け」や「老醜」ともなる。「老いては子に教えられ」は是非ないが、「長生きは恥多し」は哀れである。運が悪ければ、恐しい「恍惚の人」となる。これは、まさに「生ける屍」であり、なんとも無惨な話である。

以上は「老」についてのマイナス側面の検討であるが、喜ぶべし、プラスの側面も豊穡である。まず、手近のところでは「老練」があり、「老熟」がある。さらに「家伝」の伝承者であり、社会的な持ち場は、廣大無辺といつてよい。

第一に、文明・文化の伝承者は老人である。

第二に、政治・経済の指導者の多数は老人である。

第三に、芸術面での大家の多数は老人である。

また声を大にして言えるのは、人間国宝はほとんど皆老人といつてよい。このように世を動かしているのは老人である。ここで一言して置きたいことがある。前述のように、第一線、第二線で積極的に活動している老人達の他に、「余生は庭いじりでも」と、消極的に生きている人々も多い。これは、もつての外で、「余生」など考え違いである。老境に入ってから、

一生の磨きをかける。いわば、「琢生」の貴い年代である。

さらに、最も大事なことは、個我的に小さく生きないで、社会と共に大きく生きることである。どんな仕事でもよいが、自他を益する仕事で、真に生き甲斐ある仕事である。社会奉仕、ボランティアの仕事は、自利を求めないでも、「徳孤ならず必ず隣あり」で、他に尽すことにより、己れ自身もおのずから心境を高められているのである。

銘記すべきは、その人の仕事が本物になるかどうかは、その人が真にボランティアの精神で、自分の仕事をしているか、どうかである。真に生き甲斐ある一生を欣求するならば、ボランティアの精神で、自分の仕事を貫くことである。「老懶」の句から延長して、日頃「老」問題について考えていたことの一端を述べさせてもらった次第である。

（秋枝原児白寿記念句文集「句縁曼陀羅」より転載）

以上、句友の「老懶」の句によせて述べられた父の感懐は、まさに「老年の成熟」への希求と自負を示したものである。世俗的には出世や名声、特に富とは無縁であった。市井の無名な一老人に過ぎない父であったが、その一世に亘る生涯を、常に反骨の気概と前進意欲、さらにボランティア精神をもつて貫き通した父は、反面、単純短気、独断専行などの欠点も有しながらも、美事な生きざまを示しつつ、天寿を全うしたと、私には教えられることが多かったのである。

“大人になる”ということ

——自分の都合・他人の都合——

光 元 和 憲



出合いのグループ

「出合いのグループ」と名づけられた自己発見のためのトレーニング・グループがある。これは最近あちこちで催されているが、見知らぬ者が寄り集まって話し合いを進めていくものである。私の参加したグループでこんな場面があった。

メンバーの一人、二十代初めの女性Aさんがこう語った。「私は昼間は学校に行っていて皆といっしょにいるからいいけど、夜はアパートでひとり暮しなので寂しい」と。すると別の一人、二十代後半の女性Bさんが顔を輝かせて答えた。「そう、私も昔はアパートでひとり暮らししていたので、あなたの寂しさがよく

わかるわ」。二人の会話はそれきりとぎれてしまい、話題は別に移ってしまったが、その何でもない話のやりとりを聞いていて、私の中にぼんやりとひとつの疑問がわいてきた。それは、「あなたの寂しさがよくわかるわ」というBさんの共感のことばはたしてAさんに届いたのだろうかという疑問である。

Aさんの寂しさとBさんの寂しさはたしかに似たところはあるだろうが、しかし厳密な意味では別のものではないのだろうか。Bさんが「よくわかるわ」と語っているのはあくまでもBさんの（過去の）寂しさであって、Aさんの（今の）寂しさではないのではないか。

たしかにこんな論法でいくと、私がだれか他人の体験を理解したり共感することは厳密な意味ではありえないというこ

とになりそうである。かりにそうだとしたら、私たちは他人にたいしどうかかわることができるのだろうか。そもそも他人にかかわる余地は残されているのだろうか。この小論で考えてみたいのは、こうした疑問についてである。

先に述べたAさんとBさんの寂しさの話にもどそう。そこからすぐに見えてくるのは、私の寂しさの、いわば一歩むこうに、他人の寂しさ、つまり私の寂しさでなく、彼の寂しさというものが、厳然として存在しているらしいということである。総じて、私の体験でなく、私とは別個の他人の体験というものが、そこに、つまり私とは別のところに確固として存在しているということではないのだろうか。ここにはいわば「他人の発見」がある。それは「他人との出会い」の第一歩といえよう。こうした他人の発見を介した他人との出会いこそが、根本的な意味で他人の理解・共感に通じるものなのではなからうか。

自分の都合・他人の都合

私は精神科でカウンセラーをしているのだが、そこで出会ったSさんのことを少し話してみたい。Sさんは男性で当時四十代に入ったばかりだった。七年近い入院生活の末、ようやく退院を決意し、アパートで単身生活を始めた。

Sさんは外来へ来ると、いつも決まったようにこんな内容

の報告をする。「電車を降りて病院にむけて歩いてみると、むこうから農作業姿の男の人が来るんです。それで私とすれ違うとき、エヘンと咳払いするんです。あれは「なんでお前のような人間がこんな所を歩いてるんだ」という意味の咳払いなんです。夜アパートにいてもそうです。アパートのとなりが駐車場になっていて、夜中にバタンって車のドアを閉める音がするんですが、あれも同じで「なんでお前のような奴がこんな所で暮らしてるんだ」というあてつけなんです。本当につらいです。苦しくて苦しくて夜も安心して寝てられないんですよ」。

この手の報告を毎回のようにするSさんに、いつも私は「咳払いした人はそのときたまたまそうしたわけで、まったくその人の都合でしょう？ 車のドアだって、たまたまだれかがその時刻に駐車場に車を入れドアを閉めただけのこと、それもまったくその人の都合でしょう？」と言いつ返しなくなり、現にそう言ってみたこともある。が、Sさんはガンとして譲らない。「いいえ、あれはみんな私へのあてつけなんです」。

Sさんの住む世界には「他人の都合」というものがみじんも存在していないかのようなのである。他人の都合で咳払いしたり、他人の都合で車のドアを閉めたりということが起こりえない世界。いっさいは自分へのあてつけである。これはいわ

ば「自分の都合」だけの世界である。

私は思う。Sさんが他人と出会うことはあるのだろうか。〈自分の都合〉をこえたそのむこうに厳然として存在する「他人の都合」と出会うことがあるのだろうか。

読者は、「Sさんは私とはまったく違う人だ」と感じられるかもしれないが、そんなにあわててSさんの世界を切り捨てないでいただきたい。たしかにSさんの場合は特殊で少々極端な例かもしれない。が、「アパートのひとり暮らしの寂しさはわかる」と言ったBさんの中にも、つまりは私たちひとりひとりの中にも、実はSさんと同質のものが存在してはいないだろうか。

「傷」

最近ある会合で次の詩と出会った。「傷」という題で、山本みちさんの作とのことである。

「幼い娘をひどくしかった／つまらぬことで小さな手まで打った／まっげはふるえ／土よこれのひざこぞうはぬれていた／うつむいている首すじは／私にいつはいの抵抗をしている／長く長く小言を言い／みじめになっていく心にたえられず／又声を荒くした／その夜あとかたづけの時／深くふかく指を切った／流れる血をみながら／むしろ快いたみに／私は涙を流した」

必要以上にわが娘を叱りすぎてしまったことを悔いて、自分の切った指の痛みにかいた涙を流したという作者の意図はたしかに伝わってくる。が、この詩を耳にして、私は不満を覚えた。私の指の傷の痛みはあくまでも私の痛みでしかない。私の痛みにくら涙しても、その涙は娘に届かない。私の痛みは娘の痛みと重なり合わない。娘の痛みは私の痛みをこえた、そのむこうに厳然として存在しているはずである。〈私の都合〉をこえた、娘という一個の他人、その「他人の都合」との出会いのチャンスはまさにこのときにこそあるのではないか。

ことは単純である。もし「私」が娘と出会うことを望むのなら、このとき「私」のすべきことは、「きょう昼間、母さん悪かったね。あんなに叱ってごめんね」と娘に謝まること以外には考えられない。謝って何が起るか。娘はどうするか。それは私にもわからない。でもまず、謝りたいという気持をはつきりことばにして伝えてみることはないだろうか。いくら心の中で思っているだけでもである。ことばにすること、相手にきちんと伝えることが大事である。

親が謝まったのに娘が許してくれないなどと言わないでいただきたい。親が謝まれば子は許すべきものというのは、親の側の勝手な「自分の都合」でしかない。それではふたたび出会いの機会は失われてしまうだろうから。

「大人になる」こと——二つの道

私は看護学校や保育学校で授業をする機会があるので、二十歳前後の若い学生たちに「出会いのグループ」を試みてもらっているが、そこでいつも感じるのは、ほとんどの学生が、他人（級友）にかかわることにひどく臆病だということである。せっかく相手を思いやる気持を持ちながらも、それをことばにして伝えることを躊躇してしまうのである。ある学生はこう書いている。

「自分の感じていることをことばに表現することはたしかにむずかしい。Aさんのことばをきいて、それは自分がことばを選んでいるからだと思った。まわりへの影響、自分へのはね返り、そういったものが歯止めをしていて、本当に言いたいことを言わずにいる自分に気がついたような気がする」。

ここで「まわりへの影響」「自分へのはね返り」と書いているのは、心を受ける傷のことであろう。たとえば、先の母親が娘に謝まるといった場面、つまり相手にたいし率直になり、自分を相手の意の前にさらすといった場面で、いつも傷を受けやすいのは率直になった方の側である。私の謝罪を相手は無視するかもしれないし、非難するかもしれない。これは私には手ひどい痛手である。さほどに危険な道ではある。

だが、その危険な道を選ばないとしたら、どんな道が残る

であろうか。そのひとつはこんなふうではないかと思う。たとえば、そもそも他人を信じられないため、他人の率直さにたいしあからさまに足をひっぱったり、陰口をきく。さもなくば、まわりにたいして無関心をよそおう。何をきかれてもはっきりと答えることを避け、「どちらでも……」「別に……」という答え方を選ぶ。これは、もしかしたら大人たちの身勝手な都合にふりまわされ、傷ついてきた者たちが、仕方なく選びとり身につけてきた悲しい適応の道かもしれない。「大人になる」ひとつの安全な道ではあるうが……。

しかし、少なくとも人にかかわる仕事、それもとリわけ病人や幼い子どもといった弱い立場の者にかかわる仕事につく人には、こんな悲しい大人への道を選ぶのはぜひともやめてほしい。弱い者の発するメッセージをきちんとキャッチできる人間であってほしい。こちらが強い立場にいと、えてして弱い者の発するメッセージは見えて来ない。強い者の都合が優先してしまいがちで、弱い者の都合と出会えないでしまう。

悲しい大人への道を知らずしらずに選びとっていた者の心の底に、他人を信じてみたい、他人の前に率直な自分をさらす危険を犯してみたいというひそかな願いが時に横たわっている。他人との出会いに賭ける道である。大人になるもうひとつの道といえようか。「出会いのグループ」の何回目かの

話しあいした後、ある学生はこう書いている。

「最近少しずつ自分の中で見えはじめたことがある。それが確実に自分のものになったら、もう少しみんなと理解しあえるような気がしている。今回傷ついた人も多かったかもしれない。でもその発言をしてくれた人に少し感謝している。自分のほかにやはり他人がいることを思い知らされた。みんなで少し傷つけあっても、一日も早くお互いに成長していきたく

と

思っ

て看板をあげた。

相談は週に五件ぐらい。実におもしろい、

と鈴木さん。子供を見ていると親が見え、そ

して母親が見え、女が見えてくる。婚姻制度

によってがんにがらめにされていく女の歴史

が見えてきた。共有した部分で、おこがまし

いけれど母親を変えていきたい。そんな思い

が、天皇制を考える女の会「天女くらぶ」を作

り、五人の女たちが平場で天皇制を語る本

『天皇踊り、天女舞う。』を出してしまふ。

職業の一つに自ら「性教育の出前」をあげる

鈴木さん。高三の時、妊娠した。相手の男に

も、友達にも、ましてや教師にも言えずにいた時、母親が浮かぶ。「いやな存在だったのに、なぜか素直に話ができた。「産みたいの、産みたくないの、どっちにしたいの。あなたが選んだ方につき合う」の一言が鈴木さんを変

いと思う」(傍点筆者)。

「自分のほかにやはり他人がいる」という発見から始めるかなさそうである。大人になるこの第二の道は、実は親や教師やその他もろもろの人、人間にかかわるすべての人に少しは選びとってほしいと私の願っている道でもあることを書きそえて、ペンを置きたいと思う。

(みつもと かずのり・精神科カウンセラー)

ひと

鈴木みち子さん



京王線下高井戸駅から歩いて10分だけ、駅から真赤なジープに乗ってお住まいまで。三十数年間ずっと住み続けているこの地では顔見知りが大勢。駅から歩いていると10分ではたりつかないからだ。

MIKE相談室を始めたのは二年前。

地域の子供たちは、前から鈴木さんちへ相談によく来ていたが、体のことをきちゃんと伝えたくて、地域から日本全国に広がりた

えた。結局は中絶したけれど、自分の体のことをきちんと知らなければならぬと痛切に思う。体のこと避妊のことを自分なりに考えるようになった。鈴木さんも、母親も変わった。ちいさな子供でも選ぶ権利はある。そこを認めることで、子供、大人のかかわりが変わってくる。今、大人が選びすぎる、と。鈴木さんちへ子供がかけ込んでくると、親に連絡し、親とも話す。子供にとって家庭は最後の砦。だったら当時者同士がどれだけ居心地のよいものにつくっていくかが課題。子供が変わろうとしても親が変わらなければヒサンだからだ。その子の生活丸ごとかかえこみ、真赤なジープで走り回る鈴木さん。金色とライトブルーで染めた髪の毛は、大人の目、子供の目、いつも二面性で物事を考える鈴木さんのシンボル!

(馬場)

そぶじかんがみじかくなるしはたらいてばかりでつかれる。

でもおとなになりたい、だってパチンコもできるし、おさけものめるからなりたい。

あと一ちどでいいからおこつてみたい。

渡辺 恵美

◆私は、はやくおとなになりたいのは、私よりよりや、自分でようふくをきめたりするのがすきです。

おとなになれば、りょうりが子どものころよりいっぱいできるようになるし、ようふくも自分でかえるようになる。

それだし、自分のへやもひろくなるし自分でへやのようがいや、きつてんでともだちとおちやをのんだり、あみものをならつたりして自分のセーターもつくりたい。

だから私は、はやくおとなになりたい。

高木 登

◆ぼくはおとなになりたくない。

なぜというのは、しごとばかりであそぶじかんがない。あるというのはよるだけだから。よるはこわいからあそばないでうちにかいれあそぶじかんがなくなる。じゅみようがへっていくから。

◆私は、おとなにはやくなりたいたいです。

桜田 真知子

なぜなら、おとなになったら会社にいけるしかんごふとか保母さんになれる学校にいけばなれるからはやくおとなになり、お金をかせいで、すこしでもお母さんのことおろくらせるようにしてあげたいと思います。

だからはやくおとなになり、はやくはたらいてお金もちになりお母さんをらくにしてあげたいです。

腰越 規隆

◆ぼくは、おとなになったら野球の選手になりたい。練習がきつてもいい、なればいい。でも子どものうちにできる事はたくさんやりたい、ラジコン、ファミコンなどを多さんやりたい。おとなだつたののしい事はあるので、おとなだつたなりたいたいと思う。

でもおとなになつたら力をはつきして、野球選手になりたいです。

飯村 享子

◆私は、大人になりたいわけは1人暮らしができて働けるし犬といっしょにすめるしほしい物もかえていまの子供のままでとてもふきげんでいやです。

それから大人になると大都会に出て遊べる

し教室でべんきようするよりビルの中とかでべんきようができて大人には恋もできるからとにかく大人になりたい。

関口 秀孝

◆大人になると、仕事をするのが、つらい。それに、ファミコンをやるじかんが短くなるので大人になりたくない。

おじいさんになると、耳がとおくなったりボケたり、わすれっぽくなったり、体がよくなつたりするので、大人には、ぜつたいになりたくない。

北原 由紀子

◆私は、大人になりたい。それはなぜかというと、社会に出て、小さいころとちがう勉強ができる。それにおさけが飲めるし、顔、形も多少ちがつてくる。でも、一番いいのはお金も好きかつてできるし、いろんな所に出かけられる。

でも、大人になつてやなことがある。

それは、子供みたく、自由に遊べない、お金は働かなくちやもらえない。電車でラッシュにあう。

だけど、それ以上に、大人は、いいことがあるから、大人はいいと思う。

学習の主人公たち

大人になりたい・なりたくない

豊中市立泉丘小学校六年二組・三組の子どもたち



今井 佐和子

打出 有樹子

◆私は、早く成人したい。選挙権や被選挙権が与えられるからだ。社会で国民が国を治める、と習った。今は、平等、平和と言われているが、中曽根総理大臣がうっかり知識水準のことで問題発言をしたようにまだまだ差別のことなどは、人々の心の中に残っているとと思う。私は早く大人になって、世界を本当に平等で平和だと言いつけるようにしたい。

清水 明

◆ぼくは大人と言うより青年の16才か18才かに早くになりたいなぜかという16才でバイクのめんきよをとってバイクの運転が出来るし18才では車の運転が出来るからです。

よくよく考えると大人になったら映画も作れるから大人にも早くになりたいです。

でも大人になると40か30才ぐらいでふけていくのがいやです。

◆私は、早く、おとなになりたいです。どうしてかと言うと、私は、子供が好きだから、早く子供をうんで、いっしょにくらしてみたいからです。

おとなになったら、明るい家庭で、くらしたいです。おとなになったら、いろいろだろうけど、早くおとなになって、いろいろな苦労をしたいです。

橋本 純

◆ぼくは大人になりたい。

中には勉強しなくちゃならない会社もあるけど、子供よりは勉強しなくていいから、はつきりいって、勉強しなくていいものになりたい。でもちよつと大人になりたいくない気持ちもある。それは、あまり遊んでいられないからです。

宮本 弥生

◆私は、小さなころ、大人にすぐあこがれたことがあります。それは、子供にえらそうに言える。いばれる。それが目的だったのです。今は、大人になりたい気持となりたくない気持があります。大人には、なってみたいのですが、なったら、おばあさんになってしまふから……。でも、やっぱり大人になるんなら、おもしろい大人や、しっかりした大人、それから、もつとやさしい人になってみたい。

野村 健司

◆ぼくは、おとなになりたくなくてなりたいです。おとなになったらほうりつかをおぼえなければならぬからです。お父さんが消防士です。だからぼくも消防士になりたいです。だけど会社とかに入ったらまたその会社のことが山ほどありそうです。お父さんの消防士を見たら六さつにわけてあるけれどすぐぶあついです。だからなりたくないです。

永田 ゆう子

◆私は、大人って自分かってだと思ふ。だって、しょうもない事ですぐおこるもん。

でも、バイクや、車にのれる。だから大人になるのは、自由になれる。

私は、料理が好きだから、レストランの、

コック？ 米来になれば女のコックサンもいるかもね。だから早くおとなになりたい。

仕事と仕事をつみかさねたい。

木曾田 智弘

◆大人になりたい、なりたくないと言っても絶対にぼくたちは大人になるから、今から、どうこう言ってもしかたがない。

でも、ぼくはどっかと言うと、はやく大人になって給料をかせいで、独立したい。

学歴としては高卒で行きたい。理由は大学に行こうとしても落ちるかもしれないし、中卒でも一発勝負で大金持ちになるかもしれない。結局は、ぼくは立派な大人になりたい。

大西 恵

◆私は、好きなことができるから大人になりたい。車に乗れるし、遠くに遊びに行けるから。でも、大人になったらたぶん結婚する。その時、お父さんの泣く顔をみたくない。それに会社でいろいろ大変なこともあるだろうから、大人になりたくない。

だから私は「おとなになりたい。なりたくない」といわれても、いろいろ考えちゃうからわからない。

大野 潤

◆ぼくは、なにになりたいのか、わからない。

でもいい高校、大学を出ていいしよくきょうにつきたい。

そして社長になって大金持ちになりたい。

でもとうさんしたら社長のせきにんになるからいやだ。

だからごくふつうのしよくきょうにつきたい。

宮西 由貴

◆人は、おとなになりたくないと思っても、生きていくうちに、おとなになっていくと思う。

私は、早くおとなになりたいです。なりたない理由は、子供だったら、勉強ばかりしていいといけないからです。そして、スチュワードスになっていろんな国に早く行って、お父さんや、お母さんも外国の旅につれて行ってあげたいからです。

井上 弘樹

◆ぼくは、大人になりたくない。それはどうしてかと言うと、いつも、仕事をしていてぜんぜん遊べないからだ。仕事を持つと言う事は、とてもすばらしい事と思うが、大人の世の中は、ぼくたち子供が思っているほどなまやさしいものではない。今の時代（むかしは別）大学を卒業していいいと、ろくな、会

社に入れない。ろくな会社は、たいしよく金をくれないので労働のくらしが苦しくなる。

とにかく大人には、なりたくない。

南 ひとみ

◆私はおとなになりたい。どうしてかと言うと、大人になれば、はたらいで、そのお金で家を買ってそして私が、おとなになったらゆめがかなえられると思うからです。私の夢はデザイナーになることです。これからいっしょうけんめいようさいの勉強をして、だから私は、早く大人になってデザイナーの先生になりたいなあ。早く大人になりたいなあ。

青名畑 大輔

◆ぼくは、リポーターになりたい。なぜかと言うと、外国とか、いろいろな所に行けるから。でも、いっぱいあそぶ方が、いいから子供の方が、いいと思う。

田中 みのり

◆わたしはおとなになったら学校の先生になりたい。でも、高校生ぐらいで生長が止まってしまえばいいと両方の気持ちがある。

高校生ぐらいだと、友達といろんな所へ行って遊んだりできるし、クラブがある。

学校の先生になったらテレビが見れなくないっちゃうし、また勉強をしなくちゃいけない

しなあ。やっぱり高校生ぐらいがいちばん楽しいんじゃないかなあ。

三田 真司郎

◆ぼくは早く大人になりたいと思います。仕事ができるから。

大人になったらバスの運転しゅになりたいです。

休は日曜日がいいと思います。

古島 朋美

◆私は、20才でとまりたい
若わかしい年だし
いい思い出があると思うから。

柚木 貴則

◆ぼくは、大人になりたくありません。大人になれば、仕事をしなければならぬ。それに、食事は自分でつくり、買い物なども自分で行かなくてはならない。子どもは、いい。おもいつきり遊べる、なんでも、お母さんがしてくれる。大人は一人で生きているので、たのしくなさそうだ。だから、大人はいやだ。

山下 知佐

◆私は大人になってもならなくてもどっちでもいいのです。だって子供のころは、遊べるしテレビを見たりできる。大人になったら選挙にも出れるし、どこへでも、行ける。お金

も自由にもてる。夢は、弁護士か葉ざいしです。結婚は、お金持ちで、やさしくて、気がなくて、両親思いで、かつよくて、ハンサムな男性です。そしておばあちゃんになったら、ハワイでくらしたいという夢です。

鈴木 修司

◆ぼくは、はっきり言つて、大人にはなりたくない。大人になれば、仕事とかで遊べないし、かつこ悪いこともできない。今のよう毎日遊んでいるのがぼくは一番いい。朝早く家を出て夜おそく帰ってくるお父さんを見ていてかわいそうと思う。ぼくは、朝から夜までぜったいに働きたくない。

景山 佳恵

◆私は、おとなになつてみたい。だって、おとなになれば、小供たちを早くねせたら、好きなだけ、好きな事できるから。いつねてもおこられないし。でも、でも、もしおとなになって、いいおとなになつていなかったら、その時はやっぱり、考えなおすと思う。だけど今は、このままでいい。すてきなおとなになれる時をゆめみて大きな未来へジャンプ。

神原 慎一

◆ぼくは、大人になりたい。大人になったら算数とか、国語の勉強をやらなくてよくなつ

て何か、一つの事をずっと続けてできるようになり、天才とかの差がなくなるからです。

篠原 洋子

◆大人になったら、家族のためや、自分のために、働かないといけないけれども、大人になつてやりたい事がいっぱいあるからです。わたしのゆめはたくさんあります。和がしのしよく人さん、デパートの店員、幼稚園の先生、この中の、どれかの仕事につきたいです。どれをとつても、しんどいけれどどれかの仕事につきたいです。

柴田 周平

◆大人になつて何になるかとぼくは思うので大人になりたいと言うことはない。

ただお酒が飲めて、たばこを吸えて、車に乗れるだけであとと学校と仕事が変わっているだけではないかと思う。ぼくが一年生のときはよかった、六年生にあこがれていたころはよかった、六年生になればついにどうしてともなかつたから大人になりたくはない。

大西 頼子

◆私は大人になりたい。

どんな人かと言うと、やさしくて、楽しい人になりたい。大人になりたくないと言つて、どうせみんな大人になるのだから…。

発言 女ひとり生きる明日

谷 嘉代子



京都の嵯峨野に「女ひとり生き ここに平和を希う」ときざんだ碑がある。これは第二次世界大戦で、多くの若者が戦没したために、結婚相手にめぐりあえなかった女たちが、自分達の独身人生を戦争と関連づけて、戦争をくり返すなど建てた碑である。春は桜、秋はもえる紅葉に色どられるこの碑のもとに毎年十二月の最初の日曜日に、戦争独身の女たちが全国各地から集まってくる。その会員は、現在二百五十数名で、平均年齢は六十歳位である。年齢の分布は三十代から七十代までに広がっているが、五十五歳から六十五歳までが七割を占めている。したがって老後の問題にも無関心でいられなくなっており、折りにふれては、老人マンションを見学にく話がでたり、老人ホームの値段が話題になったりしている。私はこの碑の会の世話人で、年齢も今年六十歳になった。まだ現職にあるものの老後はまさしく私自身の問題である。私はいつも思うことなのだが、老後問題を云々する時には、「女ひとり」を原点として考えるというのはどうだろうか。女ひとりで老後を過ごすのに必要な条件を基準として、家族

をもつ人も考えの基本とするという提案である。たとえば娘さんや息子さんがある人でも、独身者と同じ老後の心準備をしておき、子どもさんたちの心くばりは、ポーンナスぐらいに考えるというのはどうだろうか。ポーンナスならば、それが少なくとも、または当たらない時があっても、基本的には何とかやってゆけるのだから、あわてなくてすむことになる。もちろん、基本給もポーンナスも多いに越したことはないのだけれども、気持の中でこの二つをきちんと区分けしておく、多い時にも上手に喜べることになるのではないだろうか。実際、女のライフサイクルには、老後「ひとり」になる年月が平均八、九年あることになっている。「女ひとりの明日」というこの題も、「明日は女ひとり」といいかえてもよいようなものである。

ところで、ひとりで淋しいでしようとは私はよく人にいわれる。しかし、ひとりの熟年を生きている私の周りの人たちをみて、淋しさを訴えている人に出あっていない。「ひとり

は淋しい」のこのフレーズは、今ひとりでない人が、ひとりを予想して感じている観念論であらうと私は思う。もちろん私も寂寞の淵をふとのぞき見る思いにとらわれることはある。肉親の葬儀のあとや友人の重い病気の知らせをうけた時などは、そばに誰かいてほしいと思う。しかし、人との別れや病いの心配などは、誰といても淋しい。人間本来のもつ寂しきであり、ある意味では哲学的な感慨である。それをひとり静かに見つめ、耐えることは生きとし生けるものの当然のありようといえるかもしれない。それ程の深刻なことではなくて、日常の生活の中で、夕食を一人では淋しいとか、まっ暗な部屋へ帰るのがわびしいとかは、観念論であると思う。まっ暗な部屋は、スイッチ一つで明るくなるし、夕食の一人ぼっちは、育ちざかりの子どもではないのだから、一人で夕食することが精神的に障害になるとは思えない。

テレビを見ながらのひとりの食事が不幸のシンボルとは思わないが、何日も誰とも口をきかないというのは、不健康である。ひとりを生きるためには、気のおけない友人や親戚がせひとも必要と思う。「別に用はないんだけど、急に寒くなったもの、元気にしてる？」と電話口でおしゃべりのできる友は、生涯の心の財産だといえよう。気分の沈む時、思いがけぬ喜びに出会った時、判断に迷う時、友は何をしてくれるものであ

心理的に友に支えられ、生活面では自立していたというのが私の最後の願ひである。老年期の自立とは、それまでの自分の人生で身につけてきた自立能力をできるだけ失わないように、錆びつかせないようにすることだと思う。もちろん今まで経験したこともない新しい趣味に挑戦することができれば幸せなことだが、もうすでに持っているものも捨ててはならない。とくに生活に根ざした調理、洗濯、掃除なども、一度手放してしまうと、気持の上でも、もう再びやりたくないなってしまふものらしい。もし部分的に不自由になり、買物ができないとなると、その部分だけは助けを求めてでも、とにかく自分の生活を放棄せず、常に自分の生活のマネージヤーとしての立場を守りつづけることが大切と思っている。

私は「女ひとり」の生活は、自作自演のドラマづくりだと考えてきた。自分で生活を設計し、段取りをして、自分でそれを演ずる。よく出来たら喜び、できが悪ければ、励ますのも自分である。人生の幕がおきるまで、シナリオライター・ディレクター・アクターでありつづけたいたいと思っている。

(たに かよこ・「生と死を考える会」理事)

発言 明日―人はみな成熟に向かって

前田 紀道



『We』には、確かに一人の人間の精神的なそして人間的な成熟を求めて、すばらしい内容が、毎号に登場している。

読んでいると、関心をもって読まれるし、胸迫る思いや教えられることが多い。

『We』六月号の「いじめ」―その根っこには何が―もそうだ。

その一つに十一年間しか生きなかった隣人の少年Oの十歳の時の「重荷」という詩がある。

十歳のOの詩は、20代にも、30代にも、そして50代にも、70代にも共通するものであろう。

私たちは、明日のために「重い重い荷物みな持っている」、過去からの重い荷物である。ホントに今日も「重い重い荷物休みたい」ホントに今日は「重い重い荷物おろしたい」しかし、明日があるから、「重い重い荷物おろせない」

私は、「明日―人はみな成熟に向かって」というテーマで発言を求められていることに気がついた時、一度読み、そしてくりかえして読んだ「重荷」のことが頭に浮かんだ。

私の発言は、明日のために、今日背負っている「重荷」の事が分かっているのかということである。今日の人間の「重荷」が、明日の人間の「成熟」へどうしたら変わることができるといふことである。

私が、いま、背負っている「重荷」は、「人間尊厳」「人権尊重」「自他の連帯」「自立自治」が、どうしてホンモノになつていかなのかという問題である。

「人間尊厳」などというこれらのことは、誰でも知識としては分かっている。でもこれらのことが、態度までに成熟したものになりえていない。

例えば、私は毎日バスで通勤している。バスの中には、二席のシルバースhirtがある。その使い方、その使い方に協力のしかたについては、車内放送もある。

私は、その使われ方を二三日にわたって調査したことがある。延べ八九二席の使われ方は、多い順にあげると、◆中年女性三三五席37%、◆高齢者二四九席27%、◆壮年男子一七席13%、◆青年女子一一五席12%、◆青年男子二六席

0.02%、以下高校生六席、小学生六席、障害者三席、幼稚園児二席、空席三三席であった。

もともとシルバーシートが、バスや電車などにつけられているということは、お年よりや障害者が車の中で大切にされていないからであろう。それは単に車の中ということだけでは、ない。毎日の生活の中で大切にされていないという証拠でもある。

私が参加している同和問題の共同学習では、よく「ホンネとタテマエ」のことが論議される。そこでは胸中深く秘められたものは、そうたやすくは登場してこない。出しにくい、出したくないということでもある。

何のための討議かということである。人間の成熟のための生産性が奪われた討議でしかない。

一昨年の10月24日「女は世界をどう変えるか」朝日シンポジウムの内容が新聞で紹介された。『We』でも紹介された。

その記事を読んで、とくに印象に残っていることは、

1 法律が変わっても態度はなかなか変わらない

2 法律があっても因習は根強い

3 男性の自立がない

4 男女とも精神構造を変えなければならない

ということである。

そこいらのことが、一人ひとりのものになるということ

が、明日への成熟のもの、さしをつくるということではないだろうか。

そのもの、さしがないということが、人間のもつ重荷となつて、明日への成熟を阻んでいると考えている。

バスの中のシルバーシートの出来ごとも、その「重荷」と深くかかわっている。日本人のもつ精神構造をこそ深くほり下げ、きびしくつつこんで考えてみる必要がある。そこから人間としてのほんものの成熟への道がはじまるのではないかと考えている。

(まえだ のりみち)



編集室からあなたに

♥'87年5月号にぜひご投稿を

テーマ・情報化社会の光と影

教課審の中間まとめでは家庭科に「情報基礎」「情報処理」がはいっている。それは一体何？ あらためて情報化社会とは何かをWeで問うてみたい。今回は特にコンピューターに視点をあててみる。あなたのコンピューターとの出会い、体験、学校現場での導入状況など教えてください。一緒に考えてみませんか。

▶原稿字数 「発言」欄には2000字前後

・メ切り 2月10日

・新設「誌上相談室」にご投稿を

解答者は児玉澄子さんです。住所氏名明記の上、はがきでお寄せ下さい。

発言 地域で老いを支える明日

二瓶 万代子



——老後は夫と二人きりで——子の仕送り期待しない——という見出しで経企庁の主婦の生活設計アンケート調査の結果が、新聞に載っていた(61・1・16朝日) 解答者は三十歳から五十九歳の主婦が八割ということなので、これからの自分の老後生活の願望と受けとれる。その中で、老後に対する生活設計では、一緒に住みたい人は「夫だけ」と答えた主婦が六七%で、「息子家族」が二七%、「娘家族」二一%となっている。では老後の収入源は、とみると「公的年金」の八一%をはじめ、「夫の収入、預貯金の利子」というように、年金と自己資産などを挙げていて、子どもからの仕送りを期待している人はわずか一%と少なく、ほとんどが経済的自立を言っているのであった。それは何より、年金もアテにできることになってきたのだと思う。

しかし老後を「夫と二人だけ」の暮らしになって、もし寝込むことになったとき介護を誰にしてほしいか——と問えば、「夫」七〇%、「娘」四九%で、次が「訪問看護婦」一三%、「息子の嫁」九・五%、「息子」五%である。このアンケートでは、

自分が老いても夫婦二人暮らしで共に趣味を持ちながら助けあう、という夫婦単位の考え方が定着してきたようである。ところが同じ経企庁調査で、「長寿社会へ向けての生活選択」のテーマで全国二十五歳以上男女三千人の調査では、同居について子どもの側で、自分の親と同居している人は全体の五二・四%と過半数で、現在別居している人でも、夫婦のどちらかの親と同居する積り、の人が三六・八%と高いのである。ことに若年世代では四割以上が将来親と暮らす考えである——というから前に掲げた主婦調査とはちがった結果が出たようだ。この報告記事(61・3・21朝日)には、現在持ち家以外に住んでいる人では、「いずれ親の土地を引き継ぐ」や「親の援助で家を持つ」つもりの人ほど同居希望が高く、家は親頼みのちゃっかり組も多い——と書いてあった。若い世代が世帯を持っても、土地も住居も買おうと思えば高く、一生ローンではかなわないと、持ち家で年金で暮らしている親を当てにせざるを得ない、という若者の計算なのかもしれない。

しかし親側にしてみれば、「若い世帯と一緒にあって気をつかうのはごめんだ」「もし一緒に同居するなら親の面倒を最後まで看る家族と」という希望は、年老いているほど当たり前な望みだと思う。私も地域で老後の幸せのために諸活動をしている『小金井老後問題研究会』（46・9発足）でも、よくアンケート調査をする。会員百八十名の明治・大正・昭和の三世代の老後に関する希望でも、経企庁が何千人を対象としたアンケートの結果と大たい傾向は同じようになる。パーセンテージというのはあまり当てにはならないとも思うが、ある一面を表していることは否定できない。老親側も年金だけでは足りない面を、預貯金の利子を見込んでの経済自立がほとんどであるから、最近のような低金利、物価高、診療費入院費値上等福祉後退は、老親の生活をおびやかし、「不安」が増す。その上、病気がちが寝たきりやぼけに移行してゆくことも多くなることを考えると、「誰に面倒をみてもらいたいのか」どころか、「誰が介護をするのか」が問題なのである。三世代同居志向だというが、主婦は子育てが終わると働きに出る人も多く、三人に一人は仕事についているという。こんな状態なのに政府は財政負担の削減で、これからの老人対策は在宅ケアを中心にする方針だというのである。

私たちの老後問題研究会では、「寝たきりにならない、寝たきりにしない」運動を地域で十年以上もしている。ともか

く寝たきりになったら介護する家族が大変だし、見てくれる人もいないのである。研究会では、自治体行政に何度か要望陳情をくり返して、リハビリ相談事業として予算がついて専門医や療法士に来ていたいて、月一回の相談窓口もできた。会員の中からボランティアの係が当たっている。家庭訪問のリハビリ、入浴と必要が生じる度に市長交渉と請願をくり返して、それなりの人手と予算をつけてもらう。在宅ケア結構である。しかしそのためには地域に必要な諸施設がなければならぬ。介護する家族も年老いていたり病気になるたりする。主婦アンケートでは「訪問看護婦」に介護してほしい人が多いのだが、各自自治体で希望通りの対応ができるかどうか、各自が自分の地域にどんな施設や人手がそろっているか検討してみたらどうだろう。かかりつけの医者、どんな病院があるか、ホームヘルパー等行政の制度、ショートステイやデイホームなどの施設はどうかなど、在宅にあってもしっかりに諸施設や人手などのネットワークを充実させていかなくてはならない。これで安心——という所はまだないのである。

（にへい まよこ・小金井老後問題研究会代表）

発言 最後まで人間らしく

水島 照子



人が生まれる時の状態は、場所、かわる人の多少、自然分娩か人工分娩（手術も含む）かの違いで、時期も予測出来、大した違いはない。

しかし、どういう死に方をするかということは千差万別で、自殺しない限り、何時死ぬか、長い目で見て予測することは難しい。自然死、病死、事故死、自殺、他殺、……と様々である。

「ポックリと死にたい」という人もあれば、「一週間位患って、会いたい人に会い、言い残したいことを言って、畳の上で死にたい……」という人もある。

病院に老人介護に行つて、あんな人になりたくないといくら思つても、「自分はあのようにならない……」といいきれ人は一人もいないはずである。「ボケ老人にだけはなりたくない……」と思つても、自分はボケないという確信をもっている人は、むしろ例外といわなければならない。

出来るだけ、人の世話にならずに死にたいと願うのは、すべての人の願望で、ポックリ寺の繁昌はそれを如実に物語つ

ている。

最後まで人間らしく生きようとすれば、「死」に対する心構えを精神的な面と、肉体的な面と、経済的な面から準備することが大切で、遅くとも四十代に始めなくてはならないと思う。

私は昨年、ある雑誌の『十年先の日本はどうなるか』という特集に老後の問題を受け持ち、十年後には介護ロボットが出来るだろうが、そうなれば、人恋しさ、スキンシップの不足から、新しい精神的な病気が出来るであろうと書いた。

人間らしく死ぬためには、人間らしい介護が必要で、その介護の手は・二人の親が一・八人の子供を生んでいる現状では、家族のみに頼ることは物理的に不可能である。

一方経済的に考えてみると、国内の戦後のインフレの他に、戦前の一ドル二円だった時代から一ドル百六十円台の現代まで、外貨とのかかわりで生活が急変することは、恒心・恒産とも持ちにくいものとなったことを示している。政権交替ならいざ知らず、同じ党で、健康保険・老人医療の問題が、十年余りで変更しなくてはならないという読みの浅さ、先見の

明のなさは、政府を頼りにすることの限界を教えてください。

私は今年の九月で、評論家生活三十年、子供を育て終えてから始めたライフワーク、ボランティア労力銀行が、創立十五周年を迎える。自分の言ってきたこと、おこなってきたことの延長として、老後のことは心配なく、最後まで人間らしく生きられると思っている。それは一つは第三の経済の確立と、今一つは、協合家族の理念である。

第三の経済は、物物交換を第一の経済、貨幣経済を第二の経済とすると、時間を単位とした経済である。『労力にインフレはない。労力を新しい愛の通貨にしましょう。労力銀行の利息は友情です』のキャッチフレーズのように、自分の生命を時間に換算し、その中の何時間を人のために使ったかという事でこの世に生きる証しをたてると同時に、先に、人に尽すことによって精神的に安定した老後を迎えられると思っている。『協合家族』は、血縁に関係なく、生き方に共感した者が、協力し助け合って、家族としての機能を果たすもので、第三の経済を活用して、既に何人もの会員の最後を看とってきた。

人が生まれ、愛育されて成長し、やがて独立し、恋をし、結婚し、子供を産み育て、やがて老いて死んで行く、そのどの時代にもかかわり「困った時はお互いさま」という精神で協力し助け合った仲間が四千三百余人、北海道から沖縄まで

三百三十余支部、アメリカにも二支部出来て、海外出向の人達と日本に残された親との問題にも寄与している。

昨年の九月、オーストラリアのシドニーで開かれた第九回世界ボランティア会議の時に配ったパンフレットが読まれたためか、海外での支部作りの話も起こり始めている。

核家族が大家族になることは先ずないし、三世代同居といっても、働く婦人が急増している現代、孫の面倒をみながらといって、自分の老後をみてもらえる保証はない。

円高を利用して、老後を外国でという試みも、人によりけりで、利己的な考え方は、うまく行くことは難しいと思われる。

精神的なものと、経済的なものの他に、何でも食べられる、どこでも寝られる訓練を自分自身にし、出来るだけ肉体的に自立出来る方法を考え、介護する人の身になって、される心構えをすることが大切である。それには、現在老人である人の介護をしながら学ぶのが一番近道だと思う。どの角度からみても、月二時間以上のボランティア活動と、月一食分の会費を納めることを会員資格とし、第三の経済を活用し、協合家族の実をあげているボランティア労力銀行のシステムこそ、最後まで人間らしく生き、人間らしく死ぬる方法だと私は信じている。

(みずしま てるこ・生活評論家、ボランティア労力銀行主宰)

発言 老人健康法をめぐる

藤原 久子



一九八六年十一月、国会会の最重要法案の一つ、老人保健法改正案は、衆院本会議で自民党の賛成多数で可決、参院へ送られたが、そこでも審議促進のために、一部修正する方針を固めている。朝日新聞（十二・三付）によれば、日本大学人口研究所は、将来の人口構造の変化や国民の医療費、保健負担の動向などを予測して、人口の高齢化に伴い、四十年後の国民の医療費負担は現在の六、七倍、寝たきり老人の数は三倍に達すると指摘している。それ故、社会保障全般のシステム自体が問われるのは当然と思うが、その意図するところを、その制定経過をふりかえりながら考えてみたい。

改正の主なところは、(1)老人医療費の一部負担の値上げ(表参照)。

(2)老人医療費拠出金の負担割合を改める加入者案分率の改正。
(3)老人保健施設の制度化である。

一九八三年二月より施行された老人保健法の目的と基本理念は、「自助と連帯の精神に基づき、常に健康保持増進に努めるとともに、老人の医療に要する費用を公平に負担するも

の」とうたっている。すなわち、医療と医療以外の保健事業並びに費用負担の三つの柱がそれである。

一九六一年四月、国民皆保険体制が成立したが、三割の自己負担のため、誰もがいつでも医者にかかることができない状態とは程遠かった。地域住民のくらしと健康を守るには老人医療の経済的負担を軽減することが必要と考え、無料化へとすすんでいった。一九六九年、都は老人医療費の無料化

		現 行	改正 (案)
外来 1ヶ月	1科	400円	1科 800円
	2ヶ月限度	300円	限度なし
	1日	9000円 (300円×30日)	15,000円 (500円×30日)
	1ヶ月	18,000円 (300円×60日)	180,000円 (500円×360日)
入 院	1日		
	1ヶ月		

制度を発足させた。一九七三年には、国の制度として70歳以上のすべてに、老人の医療費の無料化が実現した。ところが発足後、老人医療費は当初の予想をはるかにこえる著しい伸びを示した。健保財政・国保財政は大幅な赤字をもち、さらに「無料化」とほぼ時を同じくして、オイルショックがおき、日本の経済は高度経済成

長から一転して低成長時代に入った。

このような事情を背景にして、政府は「国民の自立・自助、自己責任」をモットーに、社会保障の抑制・削減を財政再建の目標におき、なかでも老人医療費の抑制と老人医療への国の財政支出の削減を考えて制度の変更を次々に行った。老人医療無料化制度は発足以来十年を待たずに有料化へと逆もどりした。

ところで、今回の老人診療報酬の基本的考え方は、(1)できるだけ入院医療から地域及び家庭における医療への転換を促進する (2)投薬・注射・点滴などよりも日常生活についての指導を重視した医療を確立する (3)老人病院にふさわしい診療報酬を設定し、医療の適正化を図る、とされている。つまり従来の老人医療費の無料化が廃止されて有料になったばかりでなく、診療方針及び報酬そのものが従来とは全く異なる体系となったことである。ちなみに老人保健法施行後、社会問題となった老人の病院からの「追い出し」や老人の診療報酬の問題は、これら医療内容（高齢者のみを対象とする医療給付・検査・治療などの制限）、医療水準（医師・看護婦の配置基準の低下）などを根拠としている。

(1)については、入院日数が長びくにつれて、保険からの病院への支払い額は減少する方式になっているため、老人の入院を拒んだり、退院を強いたりする実態が問題となっている。

本法律は、予防的側面の保健と治療的側面の医療とを総合的形態の制度として打ち出しているが、主なものには財政問題である。病院医療から家庭療養に切りかえる方策がとられているが、家庭看護を行うための保健婦の訪問や家族の存在などについて具体的かつ綿密な施策をねった上で、社会的基盤を整備していかなければならないと思う。

在宅看護の担い手がほとんど女性（統計では約90%）であること、介護者自身高齢化し、介護が困難な状況にあることも問題である。介護のために、仕事をやめたり、精神的経済的負担が大きいと訴えているものも多い。以上のように老人介護の第一次的責任を家庭にあることは、現状からみて不可能だと考えたい。老人保健施設（中間施設）の構想は、その内容・費用を含めてまだ明らかでないが、介護及び機能訓練など、老人の病気の特性を考えた上で、医師を含む専門スタッフの充実が望まれる。

以上のように、公的な養護から私的な扶養への強引なきりかえ、在宅看護の押しつけは、高齢者の基本的人権にかかわるものであって、老人福祉法に規定された「健全で安らかな生活の保障」とは全く別世界のことのようである。

（一九八六・十二・五記）

（ふじわら ひさこ・「高齢化社会をよくする女性の会」事務局）

発言 晩年の父を想う

竹内 希衣子



この頃、電車の中や街で男性の高齢者が目について仕方がない。今までは「すてきな紳士」ふうの男性に目がいったのに、いつきに二十歳くらい年が上になってしまった。

「父くらいのお年かしら」「ちよっとハゲ具合が似ている」「お元氣そうでいいな」と、その時々で思うことは違うのだが、どうしても父と重ねて考えてしまう。

父くらいの年の方が、かばいあうようにして夫婦で楽しげに歩いていると、目が放せなくなってしまう。

一昨年、春に父を失ってから、折々に父を思い出しながら心の隅で父に似たひとを求めているのではないかと思う。

七十九歳だった。ブラジルの知人からいただいたコーヒーを、「もっと濃く、ブラジルふうにな」と毎朝母に注文をつけては飲んでいたのが、胃壁に穴をあけるきつかけになったらしい。吐血のため入院してから二十日ほどで肺炎を併発して亡くなった。家族の誰もが死につながるとは考えていなかったのに、呆気ない終わりだった。

それまでの二、三年の間に三度の入院をくり返し、もっと深刻な状況から立ち直った父の意志的な生命力を信じていたところがある。それなのに、まるで「今度はもういい」と自分で決めたようにして逝ってしまった。最後まで意志的に自分の人生を閉じたのではなかったか、私にはそう思える。

父を失った淋しさと同時に、私の中には不思議な安堵感がある。最後まで頭は冴えていたし、判断力・思考力も衰えを見せなかった。入院する前日まで書斎の机に坐って原稿を書くことが出来た。もしこれがすべて逆の状況だったら、父はほとんど耐えきれない思いをしただけに違いない。そして私の中にも、いたましい姿が残ったことだろう。

家族たちに対してとてもダンディであった父は、見せたくない姿を見せなくてすんだことにほっとしているはずだ。

意識がなくなる前の日まで、病院のベッドの上で口をゆずぎ、顔をふき、ヒゲをそり、髪にブラシをかけることをやめ

なかった。車椅子に乗ることを嫌い、看護婦さんになれなれしく扱われると怒った。自分自身について「美的」であることに自己主張の強い病人だった。

臨終の時にも、うろたえたり、迷ったりしている感じではなくて、見苦しからず、誇りたかく、自分に結着をつけた、という感じだった。

寒中の日の出前の一刻、私は病室で父の終わりの姿をひたすら「見て」いた。

立派な終わりだった。そのことが残された者たちの中に、安堵感として、大きな贈りものをもらったような感じで残った。

女性は大切に扱われるべきだ、と

父は美しい母を九歳で失い、終生その母への憧憬を、女性への期待感としてもち続けた。いかつい外見に似ずフェミニストであった。

女性は大切にされるべきだ、美しくあってほしい、幸福に生きていることを望むべきだ……と多くの期待をもっていた。

私の歩き方がお腹をつき出していておかしいといって、わざわざその格好をデッサンして、私の机の前に貼りつけたりした。スカートが長い、髪が長い、といったことから、原稿用紙は四百字詰を使った方がいい、とか、私の子どもの進学に

についての意見等々、なんと多くの注文をつけられたことか。

そのたびに私は理屈をこね、逆らい、時には育児書をもち出して「母親が仕事を続けることについて」やりあったこともある。「お前のやっていることは、育児も仕事も両方とも中途半端だ」と主張する父に、「仕事は続けていないと出来なくなる……」と、ほとんど平行線のやりとりをくり返した。

男女平等の考え方が社会的に認知されるにつれて、父が考え描く「女の幸福」は少しずつ押しやられていった。

父の考えていることが女性差別ではなく、女性保護、期待感といったものに根ざしていたとしても、時代的なずれとして受けとめられるのは仕方ないことだったろう。父なりに発言したいことがあり、その場が与えられる立場にあれば、結果として受けとるのは疎外感・無力感であったはずだ。

身びいきかもしれないが、そういう状況をあまり見なくてすんだことにも、やはり安堵感がある。

でも多分、いちばんほっとしているのは父だろう。長年の間考えていた「いかに死ぬか」を意志的にやりとげたのだ。

(たけうち きえこ)

(竹内さんのお父様は、石川達三氏です。編集部)

発言 晩年の母を想う

黒 岩 秩 子



明治三十五年生まれの黒岩たかは、一九六二年に私達の住む船橋の団地にとびこんできて以来、八十二歳で亡くなるまで二十二年間、私達と生活を共にしてきた。彼女は、夫の暴力によって、体中あざだらけになって逃げてきたのだが、私の夫は彼女にとって次男である。なぜ長男のところへいかなかったかという点について、後に彼女はこう語った。「長男の嫁さんは利口な人だけど、口数が少ないから、ああいうところでは、自分も言いたいことが言えない。秩子さんとなら、言いたいことを言い合って、ケンカすることができると思っ」この言葉は、大変うれしかった。言いたいことを言う方がいいんだな。そう思えた私は、何でも言おうとつとめた。ささいなことでもよくケンカした。しかし子供ができるまではそのケンカも、お互いにそう頑張らなくてもすむ問題がほとんどだった。ところが、子供ができるとそうはいかない。私にとっては子供のこと、彼女にとっては孫のことになると、両方とも必死になる。

その上又、こんなこともケンカになる一因だった。私が夫

をこき使うのが彼女には面白くない。ある時、双子の赤ん坊を夫と二人で一人ずつオンブしていた。それを見た彼女は夫の背中にいる子供をとって行ってしまった。「どうして？」ときく私に、彼女は答えた。「私は、こんなことをさせようと思っこの子を育ててきたわけじゃない」「そんなこといっただって、二人で作った子供ですもの、二人で育てるのはあたりまえでしょ」「そんなことないよ。あんただって、宇洋（長男）が嫁をもらえば、私の気持ちがよくわかるよ。それは母親として自然な感情なんだからね」「そんな自然だって作られた自然よ。大昔、女性には太陽だったといわれる時代は女の方がいばっていたわけだけど、その後、男権社会になったから男がいばっているだけであって、家事なんて男も女もみんなで協力し合っするものでしょ。男にできない家事は、出産と授乳だけだと思っけど」。

こんなケンカのあと、私の言うことに納得がいくと、彼女はとても陽気になり、口数が多くなる。だが納得がいかない時は黙りこんでしまう。そんな時は、私の方がよく考えてみ

れば、おかしいことを言っていることが多く、「ごめんね」と謝らねばならないことになる。

私達は、このようなケンカを通してお互いを理解し合ってきた。国際婦人年のあたりから、テレビでも「男も家事を」という論調が登場してきた。テレビ党の彼女はすぐにそれに反応した。「秩子さんの言う通りだよ。今日もテレビで言ってたよ。男が家事をしないでいれば、自分が一番損をするんだよね。私はどうせもうすぐ死ぬんだし、秩子さんだっていつ何時、どんなことがあるかわからないんだからね。そんな時、卓夫自身が困るだけなんだからね。こうなるともう、夫が家事をすることに、何の抵抗もなくなってしまう。

この転身の早さは見事なものだった。彼女は、年をとるにつれ、一枚一枚衣をぬいでいった。そして一枚衣をぬぎ捨てると、それ以前の自分の姿をジョークにして笑い飛ばしてしまうことができる人だった。

彼女は、私達二人で作っていた新婚家庭にとびこんできて、いつの間にかこの家の大黒柱としての地位を築き上げてしまった。八十二歳で彼女が亡くなった時、家族全員虚脱状態になり、我が家の子供達七人全部が一ヵ月以内に熱を出して寝込んでしまった。普段はどの子も丈夫な部に属するはずなの

に、彼らをそんなに落胆させたのは何故だったのだろうか。まず、家事の中の一番中心である食事を彼女がほぼきりまわしていたということ。六十一歳で入院するまで、十人家族の夕食を作っていた。テレビの料理番組はすべてノートにとつて、次々に新しいメニューを食卓にのせてくれた。入院してからも、テレビの料理のメモを私に渡して、「これおいしそうだから作ってごらん」というのだった。

「何事も愛情だね」が彼女の口癖だった。その愛情によって家族の中の自分の地位をしっかりと築いてしまったといつてよいだろう。病気になるのでさえ、土・日、正月など、私の勤めにひびかないようにしてくれていた。

といっても、彼女は自分を犠牲にして家族に尽くしていたというのではない。相撲好きの彼女は、そのために夕食が遅れることがある。そんな時、子供が「今日は遅いなあ」と言えば、「機械じゃないんだからね。毎日毎日同じ時間になんかできないよ。今日は相撲なんだからね!!」と言つてのける。自分も楽しみ、人にも楽しんでもらうという彼女のさわやかな生き方が家の中を明るくしてくれていたように思えてならない。

(くろいわ ちづこ・保母)

発言 新版すごろくは「五コマ進む」が多い

齊 藤 裕



世の中を未熟から成熟へのすごろくにたとえるなら、人間は目印のコマであり、努力というサイコロをふって進んでいくことになる。

このすごろくには、旧版と新版の二種類があり、いわゆる旧人類は旧版によって成長し、新人類は新版のお世話になっている。

ちなみに現在では、ごく一部を除いて新版すごろくが使われており、旧版はほとんど姿を消した。

両者の違いは、その難度で、新版に比べると旧版は何倍も難しい。

人生は、努力がすべてではない。

幸運によって、努力した以上のものをつかみうることもあるし、不幸によってすべてが水のアワとなることもある。

すごろくも同様である。

旧版すごろくは、なかなか前に進めない。

たとえサイコロをふって、大きな目が出て、たいいてい厳しい指示のあるま、すに止まってしまふからだ。

「落第。ふりだしにもどる」

「家運傾く。奉公に出て二回休み」

「赤紙が来た。五回休み」と、いうように。

中には、「親孝行の徳で、五コマ進む」のような指示のますもあるが、極めて少ない。

しかし、難しいがゆえにあきらめたり、くじけたりせず努力を重ねることの大切さを旧人類は学んだ。

これに対して、新版すごろくはまことに簡単である。

たとえサイコロをふって、小さな目が出てもサービスピ精神あふれる指示のますが多いため、簡単に前進できるのだ。

「お年玉をもらった。五コマ進む」

「大学の入学祝いで買ってもらった自動車で五コマ進む」

「親のコネで就職。お祝いに五コマ進む」

と、いった具合だ。

中には「試験で赤点」のような指示のますもあるが、「もう一度サイコロをふって、一、二、三、四、五が出たら追試合格でセーフ。六が出た場合のみ留年で一回休み」と、なっ

ている。旧版すごろくなら、ふりだしにもどされたところだ。

ただ、旧版と新版で共通していることが一つある。

いずれも、あがり近くに近づくこと難しくなるとのことだ。旧版は、ただでさえ難しいものが一層その度合いを増して、あがりの近くでは、ひとまずおきに「空襲。五コマもどる」

「食糧難。買い出しに行つて二回休み」のような指示が待ちかまえている。新版も、あがりになると「社員研修で五コマもどる」「子どもが生まれて、責任が重くなる。二回休み」のような指示が多くなる。

あと、もう一息というところで難しさが増し、足ぶみ状態になるのが新旧両すごろく共通の特徴である。

かつて、旧版すごろくの旧人類は何度逆もどりさせられても、あきらめず努力を続け、ついにあがりの大きなますへ到達した。

努力してつかんだ勝利の喜びは大きい。

また、教訓として得る部分も多い。

しかし、新版すごろくの新人類は、あがりの近くまで来てピタリと止まってしまふ。

前進すると、困難にぶつかることがわかっているからだ。止まってしまったら、それまでだ。

もう「五コマ進む」の指示によって救われはしない。



編集室からあなたに

◆公開ゼミ—3月29日(日)東京
夏季フォーラム—8月初旬山形
計画進行中!

実行委員になって下さい
ご意見をお寄せ下さい。

みんなで意見を出し合つて、共に創り上げるのがWeのやり方。
近い方、実行委になって下さい。
遠い方、ご意見をお寄せ下さい。

語ろう、書こう、行動しよう。
巨大な黒い雲に封じこめられないために、自分を育て、仲間を育て、Weを育てる以外に「道」はないのだから!

公開ゼミの詳細は次号で、決まる前にご意見をどうぞ。今すぐ

自分を五コマ進めてくれたのが、実は世の中の大勢の人であつて、自分の努力でないことを知らない者は、永久にあがりの大きなますへは到達できない。
たいてい、あと一步のところに引かかっている。
人はみな成熟に向かつているか?
向かつてはいるだろう。
ただ、最後の「責任」「困難」という関所を突破できないでストップしてしまふ者が多い。関所の前は、たくさんの人間であふれ、交通マヒ状態になっている。
「努力」「勇氣」といった手形をみんななくしてしまつたらしい……。

発言 共に考えてください 就学時健康診断

神矢千鶴



85年の暮れから、86年春にかけて、私も家族には色々な事が起こり、その内の一つに小学校入学の就学時健康診断を拒否するという事がありました。次の文章は、私達夫婦で話し合い、考え、印刷をして、就学時健康診断当日に小学校前で、父母に手渡したものです。ぜひ読んでいただきたいと思います。

私たちの長女佳奈子（79年12月3日生）、次女優（双生児につき同年同月同日生）は来年四月に平塚小学校に入学します。先日、品川区教育委員会より「就学時健康診断」（11月21日実施）の通知書が届きましたが、二人の娘も納得のうえ、この就学時健康診断（以下「就健」と略す）を受けません。さらに、就健の中止および廃止を強く求めます。

それは、就健の目的が、「普通」児か、「障害」児かの品定めをし、ふるい分け、親の希望・子のねがいを無視し、排除し、特殊学級・養護学校などに隔離しようとするものであり、「誰もが一緒に学びあえる学校」を根本的に否定する第一歩であるからです。

誰に子どもをふるい分ける権利があるのですか。

それは、「障害児保育」制度の中にも見られると思うのですが、「重度の障害」児を集団保育からしめ出す、「軽度の」子は「障害児加算」として都と区から予算化され保育される。その基準は、「将来にわたって生産能力のない」子どもは切りすて、「役に立ちそうな」子どもは、集団保育の中で「普通」に近づけていく、という国の能力主義の政策にもとづくものと言われています。

「いつも熱を出しているから」「極度の近視だから」「小児マヒ」「歩行できない」「集団生活ができない」「手がかかる」。それはその子にとって「障害」なのでしょうか。その子は保育園に入る前も、そして今、小学校に入る前も、その姿として生きてきたのです。親類や地域の中で、そのありのままの姿として関わりを持ち、また持とうとしているのです。その子が、この品川の地で生きていくのだとしたら、生涯ここで生きていくのだとしたら、地域のお年寄りや、肉屋さん、八百屋さん、お風呂屋さん、そして何よりも同い年の子どもたちと共に生きていく、関わりを持ちつつ生きていく以外にどう

考えられるでしょう。今、学校も、私たちも、その子らの姿、その子の生きざま、その子のいのちの丸ごとを認め、関わりを持つ、持ちたい。

それが、「国の役に立つ労働力」という立場に立つ時、「あの子はおかしい」「おくられている」と選別し、特別視していくようになるのではないのでしょうか。

「障害」は、その子の生き方にとっての障害ではなく、そうした政策や、その立場に立つ人にとって、その子が「障害」なのでしょう。その子を「障害」児としてくることに納得できません。

「あの子はしゃべれないからイヤ」「鼻をたらしていつも汚ない」「かけっこが遅いからリレーにあの子を入れたくない」、子どもどうしのかかわりの中で、いろいろな拒絶のしかたやとまどいもあるでしょう。しかし、子どもたちは、その子のそのままの姿から出発し、排除や拒絶を固定するのではなく、迷惑をかけたりかけられたりしながら、存在を認めあい、育ってきているのです。手助けしたり、励ましたりすることが義務感や、「かわいそうだから」ということではない、人と人とのあたり前のつながり（互いに認めあい、共に生きるという）として、生まれてきているのです。

子どもばかりではなく、私たちはどうでしょう。そうした子どもどうしの関わり、地域との関わりにクサビを打ち、子

どもを体力・知能、はては体型・個性にいたるまで分類し、隔離するのが就健だと思ふのです。その隔離とは「普通」といわれる子どもたちにとっても隔離なのだと痛切に思ひます。「普通学級」そのものが、出会いと関わりを拒絶した、密室培養の隔離学級なのではないのでしょうか。

就健にひっかかった子どもを区に報告するか否かという二次検査は（ここでもひっかかると普通学級に入れない）、次のようでした（品川区山中小）。カボチャとナスとボールときゅうりの絵があつて、『この中でちがうもの一つに○をつけなさい』という問題があつて、まよっている子どもがいたそうです。担当の人は、四つとも全部ちがうものだから、一つだけえらぶなんてコケだと思ひながら「食べられないもの、どれ？」と言つてやつたら、その子は「全部食べられないよ。だつて紙に書いてあるんだもの」。

私たちの娘たちは、その子たちと出会いたい、その子たちとずっと関わりを持ちつづけていきたい、と願っています。そして私たちは、差別することも、されることも許さない子に育ってほしいと願っています。

教育委員会、校長先生、そして検査をする教職員の皆さんに、私たちの気持ちを察し、差別・選別の就学時健診を中止されるよう、心から願ひするものです。

（神矢 努・千鶴・佳奈子・優）

「We 秋のつどい」に心洗われて

川崎 絢子

十一月二十九日（土）雨雲が低くたれこめた寒い午後。会場の神楽坂エミールは、なかなかゴージャスで、司会の石川由紀さんがいつもより（？）ずーっとしとやかで美しく見えました。正面の横断幕には「We 秋のつどい」と書かれ、いつものことながら加藤由美子さんのセンスがとてもステキです。遠く山口県から山名さん、岩手県から押切郁さんもおいで下さって九十名近い参加者になりました。初めて参加して下さった方が大半のようで、『若いいのちの像』が朝日新聞に大きく報道された偉力をうかがわせました。

― 児玉さんの話 ―

「若いいのちの像」の中には書ききれなかったことがたくさんあります。あの本の中のSが謹慎させられている部屋に、私が自分から入っていった時、Sが最初に言ったことは「先生、ずっとイヴォンナのことを考えていたの」でした。

イヴォンナはユーゴスラビア人、私がアメリカ留学で共に学んだ親友です。彼女はどんな場でも堂々としていて、自分の考えをきちんと主張する人です。留学生仲間七人でアメリカ

カを旅行したとき、どのタクシーをつかまえても乗車を拒否されました。私達一行の中に膚の黒い人がいたからです。ついにイヴォンナはタクシーの運転手に大演説をふるい、や々と乗せてもらうことができました。何と言ったのか尋ねると「私達は七カ国から来てるのよ。それぞれが帰国してアメリカ人からこんなひどい扱いを受けたという話を話すでしょう。それでもよいのですかって、アメリカ人のプライドに訴えたの」と言うのです。

また、メキシコとの国境近くまで旅行をした時、一行の一人が泥酔して道路を隔てたメキシコの警察に留置されてしまいました。この人はつねにトラブルをひき起こしていたので、真夜中に身柄を引き取りに行くことを、みんなでブウブウ文句を言い合いました。その時イヴォンナは、「Listen! (ねえみんな!) メキシコの警察を見学できるなんて良いチャンスじゃない。めったにあることではないよ!」。そこでみんなうって変わった気分になり、全員で彼を引き取りに行きました。彼女の行動にはいつも感心させられてきたけれど、政治的にもさまざまな苦難の歴史を持つユーゴスラビア人としての彼女の信条は、「人間は負けることがあっても、決して破壊されることはない」でした。

この話をSを担任した時、何気なくしたことがあったのです。私は忘れてしまっていたのですが、Sは憶えていてくれ

たのです。競争には負けても生きていける、生きていくかぎり生き直ることも、立ち直ることもできるのだということがSの中にも刻まれていたことを知りました。Sは大丈夫、立ち直れると確信できたのです。……

熱っぽく、力強く話される児玉さんの姿に、会場はシンとして、ひとことも聞きもらすまいという面持ち。話しが終わった途端に思わず溜息が洩れました。

第二部として、小沢牧子・越村佳代子両氏からコメントをいただきました。

―小沢さんのコメント―

この本は「カウンセリング」という言葉で括ってしまえるようなものではない。児玉さんの生き方が子ども達をひきつけるのではないだろうか。子どもたちをわかりたい、愛したいというメッセージを子どもたちが見ぬいているから、心開いてゆくのだろう。いま、いわゆるカウンセリングは、現在の社会に適応させる人間をつくるソフトな管理技術にもなっている。この本の95ページで、T君はK先生を怒っているが簡単に許してしまっている。それでいいのだろうか。許すというのは上下の関係で、私たちは同じ立場に立って怒りを伝えていかなければならないのではないか。

―越村さんのコメント―

この本の紹介記事を書く前にカウンセリングについて知識

を得たいと都立教育研究所に行ってみた。暗くてうす汚れた部屋、こんなところでカウンセリングしてもハッピーになるわけがないと思った。記事にしてからの反響が大きかったのは、親も教師も今と一緒に生きてるということ子どもと共感したいのに、その方法が見つけられないでいたからなのではないだろうか。私にとって児玉さんは「中年の星」だ。常に物ごとに関心を持ち続け、そして発見していく生き方をしたい。

第三部の討論は、まず児玉さんからの意見から始まりました。私はカウンセリングの素人だ。いつも人を評価し、批判するタイプの人間だったからこそ、カウンセリングにおける「受容」にひきつけられた。K先生に対する批判を、社会的行動にまで持っていくことは今の学校現場ではとても無理で、そこまでは子ども達も生きていけなくなるという現状がある。人を批判したり、あげ足を取ったりすることより、まず自分は何ができるかという姿をみせるのが大人だと思うと述べられました。

会場からは「教師は労働者か聖職者か」「学校荒廃の根本的な原因は何か」といった質問も出ました。児玉さんは「自分は、強いて言えば労働者かもしれないが、時間で働く労働者とは思っていない。もちろん聖職だとは思わない。荒廃の原因は数え切れないほどあげられるが、根本的には貧しさを知らないところにあるのではないか」と答えられました。

「We 秋のつどい」に参加された 方々から」

大勢の方が心のこもる感想を寄せて下さいました。その一部をご紹介します。書いていただいたのは、以下の三点です。

- (1)『若いいのちの像』を読んで
- (2)このつどいに参加して
- (3)今日の話題と関連する悩みは心あたたまるつどいの喜びを、参加できなかった方たちにもお分けしたくて――

◆(1)この本に出てくる高校生がともうらやましいと思います。話をきいてももうというのは、自分をつめるうえでもとても大切なことだと思えます。自己表現って難しいということには全く同感です。

(2)イヴォンナさんの話がとても印象深かったです。一つ一つその行動の例に、生きていくこととて気のもちようでどうにでもなるものだと感じた。いつも前向きに生きていきたいと痛感した。生きていくつておもしろい!

(3)中学時代の私なら、きっと児玉さんのような人に会いに行ったかもしれない。私の場合は、時が解決したという感じである。二度

目の大きな挫折では、周りに聞いてくれる人がいて、自分の存在価値を見出した。

(東京・横山純子)

◆(1)自分の高校時代の不安定な気持ち、将来に対する希望とともに不安感を懐く思い出しました。と同時に、いろいろな経験(本を読んだり、人に励まされたり、人の話を聞いたりから、何とか明るい光を見出して、新しく出発できた喜びも思い出しました。「一生懸命生きていくこう」という気持ちになりました。

(2)イヴォンナの話に感銘を受けました。人とのめぐり合いを大切にしていきたいな、と感じました。また、児玉さんや越村さんが、お子さんを育てながら仕事を続けていることを聞き、励まされる思いがしました。「仕事を続けたいな」でも「家庭も大事にしたいな」といつも悩んでいるのです。でも「仕事を続けても家庭を大切にできるんだ」という意識がもて、うれしく思いました。

(3)幼稚園の教諭です。私は「四、五歳ぐらいの子どもをとててもかわいい」と思っています。そして何より人間が大好きです。たくさんふれあいたいと思いがながら、クラス37名というの「ああ、ちょっと多いな」って思っています。でも子どもの立場からすると十人でも五人でも一人でも多くの友達の中にいたって感じているのでしょうか。いろんな人の意見を聞きながら、子どもを見ながら感じました。

(草加・杉山恭子)

◆(2)大変感銘を受けました。イヴォンナのような得がたい人に出逢われた児玉先生、児玉先生のようなあたたかい方に出逢った生徒たち。人間って、人生ってすばらしいんだと改めて感じさせられました。これからの人生を生きていく上で、心の糧にしたいと思います。

(3)教師を目指す私にとっては、教師としての悩みは、現在の悩みではなく、近い将来の悩みです。私のような欠点だらけの人間に、教師になる資格はあるのだろうかと自問する日々です。とはいっても、B合格で、まだ採用の見通しもありませんが……。もし教師になることができたなら、私もカウンセリングの勉強をして、若いいのちと共に生きていきたいと思っております。

(昭島・野田薫)

(1)とても筆舌にあらわせないほど感動いたしました。私自身、子どもの登校拒否で、数年児童相談所に通い、カウンセリングを受け自分が開かれていくのを経験していますので一字一字が、体にしみこむようでした。

(3)来てよかったと思えました。児玉先生に

はぜひお会いしたいと思っていました。越村さんの、松本キミ子さんの親子の話は、とても共感を覚え、また勇気が湧いてきました。

私は子どもが学校は行っていないけれど、希望は絶対持っています。信じて待つて、見守っていてよいんだ、と改めて思いました。

(8) 子どもが登校拒否になった時から、私は本当の人生を学んでいるという気がします。

さまざまな思いを経て、悩みでなくなっています。むしろ、あつてよかったことだとさえ思います。『生きていけるじゃないか』が、私を支える聞き直りの思いだったので、この集いのハガキをいただいた時、うれしい驚きでした。

(厚木・島内知子)

◆(2)すばらしいと思いました。ウソのない生き方に心うたれました。私はどういう生き方をしていたらいいかを考えながら、何度も読み返しています。児玉先生のますますのご活躍を祈ります。

(3)仕事の都合で、途中からでしたが、熱のこもったお話で参加したかがありました。小沢牧子先生のコメントにもうなづきました。目がとても魅力的に感じました。案内のはがきがありがとうございました。一冊の本からこういうつながりが持てたことをうれしく

思いました。

(千葉・山本栄子)

◆(2)児玉先生の生き方がにじみ出たすばらしい本だと思います。今日の話にもありましたように、「生徒が笑ってもいい。私は感動したい。その感動を生徒に伝えていきたい」という情熱が、読者に伝わってくる本だと思います。

(3)イヴォンナの話“Man can be defeated but not destroyed”ひとつひとつの例が、感動を伝えてくれました。そういうえば、やなせたかしの『でかたん、みみたん、ぼんたん』という童話を私は好きですが、それと同じような『自然』の感動を、英語の授業で生徒たちに伝えることができるのは、すばらしいことだと思いました。(東京・藤田英典)

◆(1)感激です。

言葉にならない気持がいっぱい、ここへまいりました。先生、お体に気をつけて、素敵なご体験をまたお知らせ下さい。

(2)来てよかったです!!

実際に先生のお言葉をお聞きするというのは、やはり一人でご本を拝読する以上に、ストレートに響いてくるものですね。そして、小沢先生からの疑問点というものも、こうした折、なくてはという感じで、楽しく過

ごさせていただきました。質問もさせていただいて、興奮です!(父ともう一度話し合えそうです)

(3)私は十七歳のころから情緒不安定となり(遅い自我の目覚めだったのですが)、それに関する様々な状況を抜け出すため、本当にシンドイ思いをしました。(その頃は、カウンセラーという存在も知りませんでした。教師である両親もそうでした)

その今でも汚点的に残っている時期をプラスにもつてゆきたく、カウンセラーになるための勉強を始めています。ただその資質があるのかどうか……不安ですが、がんばってます。イヴォンナさん、素敵な方なんです。(東京・長島ひとみ)

◆(1)よかった。自分の出会っている子供たちの顔を思い浮かべながら何回も読んでいます。

(2)児玉さんが自分の生き方のお手本になると言われた越村さんの言葉、地球上ならどこでも生きていけるじゃないかという大西さんの言葉、元気が出ました。

(3)やはりクラスの子供たちのこと。子供たちを信じきれなくて、高圧的な指導をしてしまふこと。(大宮・磯部幸江)

新しい家庭科を創るために

——小学校では——

村田 尚子

子ども達やなかま に支えられて

「先生今日も病院？」

「おばあちゃんの具合はどうですか」

「気をつけてね。自転車で事故起こさないようにね！」

早退しようと自転車にまたがる私をとり囲んだ六年生の子達が、口々にことばをかけてくれます。早退するのは、私の母の入院先にかけてつるためです。

これまでの話でふれたこともあ

る私の母が倒れたのは、満84歳の誕生日から二週間目、遊びにいった私の姉（母の長女）の家での入浴中。浴槽のふちにもたれて意識を失っていたのを姉が見つけ、救急車で近くの病院へ。病院で意識を回復し、一時的貧血とのことで薬だけもらって帰されたのですが、それから足腰が立たなくなり、排泄の意識が全く失われてしまいました。姉は乳ガン手術後の身の上ですから、私が姉の家に泊りこんで添い寝の看護。その間にわが家ではともかくも在宅介護の準備。あちこち入院療養の情報を求めることもしたのですが思わしくなく、三日後の日曜日に寝台自動車でわが家にひきとりました。

いつまでも勤めを休むわけにもいかず、倒れて六日目から出勤、午前中の授業を終わるととんで帰りました。在宅のつれあいは、その日初めてひとりで病人の食事や排泄の世話をしたのでしたが、見るからに疲れきった様子で私の帰宅を待ちうけ、オバアチャンの様子がおかしいといいます。確かに容態は一日一日悪化の傾向ではありましたが、この日はさらにいちだんと進んで、表情はなくなり、水を飲む力もありません。容易ではない事態だということは素人目にもあきらかで、何度かお世話になった近所の医者からはともかくも大病院へと往診を断われ、夕方からは熱も出てきて——やつぱりもういちど救急車の世話になろうかという話をしていた矢先、思いもかけぬ電話をいただきました。

「A老人医療センターのBと申しますが——」というご挨拶に続いて、「今、娘が先生のお母さまのことで病院に電話をしてきたのですが……」

私はハッと思いました。その日の一時間目、「さしこ」実習中の五年生の授業で、「どうしても話しておきたいことがあるのよ。聞いてくれる？」といって作業の手をやめさせ、母の話をしたのでした。子ども達はずぐに内容の重大さをさとって、それこそ水をうったように、シーンと静まりかえって、話を聞いてくれたのでした。

家族や家庭のありかたについて、あるべき姿やねばならぬ式のお説教をしている時は、つまらなそうにアクビをこらえていることもある子ども達が、この五日間、母のオムツをとりにかえ、抱きかかえてトイレに腰かけさせてお尻を洗って、ベッドに起こして後ろから支えながらひと口の水を飲ませるのに十分もかかって、というような話を、まばたきもせず聞いてくれました。「私もかつてはこの母にオムツの世話をしてもらったのだと思うと、人間は、順番に世話したり、してもらったりしていくものなのだ、ということがよくわかった。将来、あなたたちにもそういう日が来るんだよ」という話。そんな話のあとで、そういう老人をみてくれるお医者さんや病院などの話が家庭で話題になることでもあれば、ぜひ教えてねと結んだのです。

授業中もさまざまな反応がありましたが、休み時間になつてから、おとなしそうな女の子が遠慮がちにそばに寄って、「私のお父さん、病院で医長をしているんですけど、お父さんに聞いてみてもいいですか」と言ったのです。

「あ、あなたBさんね。そうお、お父さんはお医者さんなの。そりや聞いてくれたらうれしいし、ありがたいわ。お父さんの病院でなくなつて、お知りあいのお医者さんでも、よろしくお願いね」

そんな受け答えをしながら、まさかその時の話が、すぐにその日のうちに、こんなふうにして現実のものになろうとは、思ってもいませんでした。

驚きとうれしさで胸がいっぱいになりながら、先生の問いに答えて容態を話しますと、急を要するようなのでベッドの手配をしてみましようとお話。約三〇分後、ベッドを確保したのですぐ救急車で連れて来るようにとのお電話で、夜八時ごろ、病院に連れて行くことができたのです。

A老人医療センターは都内でも施設の充実で知られた病院で、それから深夜に及ぶ三時間余りの診療検査の後、脳血栓という診断が出て、そのまま入院ということになりました。

86年11月末現在、母は点滴だけで生命をつないでいます。日によって容態に波がありますが、嚥下の機能や排泄の感覚

は全く回復していません。そんな病人を文字通り完全看護の行き届いたお世話をして下さる病院には、頭が下がります。

でも、緊急入院ということで、長期的にお願いするわけにはいかないとのこと。この稿が皆様の目にふれるころ、母の容態がどうなっているか、私の生活がどうなっているか、見当もつきません。それでも、ほんの短期間とはいえ在宅介護の日々の悩みを思うと、地獄に仏という気持ちで、Bさん、Bさんのお父さんに手を合わせています。

Weに、「新米家庭科教師の話」を一年間連載する話をお引き受けしたあと、大それた約束をしてしまったなア、体力気が十回分も続くかしらと不安だったのですが、おかげ様で何とか九回目までこぎつけ、いよいよ最終回、どうにかバテずにやってこられたなと思った矢先の母の急変でした。

当初、連載内容のあらましを構想したとき、最終回の内容だけは決めていました。家庭科教師として最初に出会った子達が卒業するときに残していった作文、その文章をそのまま紹介すればそれで決まり、などと思っておりました。その時は、こんなことになろうとは思いませんでしたから。

思いもかけず予定を変更して、母の病氣の話を書く気になりました。考えてみれば、家庭科という教科の内容として、あるいは最も重要な問題を、提起してくれたようにも思われ

てならないのです。

料理・裁縫の家庭科をイメチェンするなどと、内心大いに意気軒昂だったにもかかわらず、終わろうとしてみれば、これまでの連載でごらんの通り、おもな内容は作りたいものを気ままに作る「縫いもの手芸実習」と、食べたいものを勝手に作る「食べる調理実習」としかなかったみたいで、家庭科イコール料理・裁縫のイメージ（ダメージ？）をますます強めることになりはしなかったかなあと反省しています。

そんな中で、唯一、料理・裁縫でないことといったら、折りにふれては、私自身の家庭生活を多少フィクションも、まじえながら、時にはオモシロオカシク、時には改まって深刻に、生活を考える教材として話してきたことでした。とくに老いた母のことはよく話題にしました。人間が老いていく姿を現実に見る機会の少ない子ども達ですから、少しでもわかかってほしいと願って。私やつれあいの夫婦の話も、どちらかといえば年寄りの話として受けとられたでしょう。子ども達の両親のほとんどは、私よりも十歳近く若いのです。でも、男が家にいて老人を気づかい、女が外に出て働いているという私たち夫婦のくらしは、「ヘエーツ、ふつうと反対なんだね」と珍しがられ、そんな「ふつうと反対」のくらしのあれこれのエピソードは、けっこうおもしろがられ、子ども達の心をかきたてるのにも役立ちました。

家庭科教師二年目の今年もこのパターンは変わらず、五年生にも六年生にも、よく私の家のことを話しました。子ども達からも、ウチのオバアチャンはとか、ウチのオジイチャンなどと。祖父母の話がよくでるようになりました。「家族」ってどんなものか、という現代的課題に迫るというほどではなくても、意識のはしにうかびあがらせることはできたようにも思います。老人問題を見る目を通じて、その他の社会的少数者のそれぞれの問題を考える心が育ってくれたらなあ、という願いもあります。

そんな下地があったせいかもしれません、今回の母の話は、私が思った以上に子ども達の心にしみ通っていったようでした。「ねたきり老人」という言葉を知らない子はひとりもいませんでした。「〇〇病院はどうかなあ」「ぼくのオジイチャンは湯河原の〇〇病院に入院してたよ」などと親身に心配してくれる声を数々聞きました。学校の近くにある老人ホームのことを進んで話題にする子もいました。Bさんの話は、そんななかで出てきた話のひとつでした。

私は、子ども達に心からお礼を言いました。

「あなた達の元気な顔を見ているだけでもずいぶん心が安まるのに、心配してくれてほんとにありがとう。うれしいわ」

これまででも、落ちこんだり滅入ったりすることがあるた

びに、何よりも励まされたのは子ども達の笑顔でした。不安いっぱい授業も、子ども達のすばらしい行動力で、終わってみれば大成功、ということが少なくありませんでした。失敗したり、ウマクイカナカッタリした時は、全くもって私の責任。ヤッタネ！ という結果になった時は、もう百パーセント子ども達のおかげ。ブリッコでも何でもなく、心からそう思わずにはいられない今の私です。

今年は春先に体調を崩して一週間も休みましたが、その時も、「家庭科つぶれちゃってつまんない、でも、ムリしないでね」なんて声をかけてくれる子がいて、一瞬耳を疑ったほどです。今までの私の印象では、家庭科なし！ なんてことになるかと歓声をあげる子が多かったように思っておりません。

この度も、五年生には十二月に調理実習という約束をしていたのですが、母の状態に見通しがつくまで延期させてもらうことにしました。調理実習だけが楽しみで、現在の「さしこ」の作業に黙々と取り組んでいた男の子が、「ツマンナイヨー」と言いかけて、「そうだね、実習やってる最中に先生呼び出されたりしたら困るもんね」と。「そのかわり、できるようにになったら何回でも調理実習をやるうね」というと、素直にうなずいて笑顔を見せてくれました。

子ども達だけではありません。職場の同僚にもほんとうに助けてもらっています。このところ時間割の授業以外の仕事

は放ったらかしで、毎日学校からトンボ返りという状態が続いています。慰められ励まされこそすれ、イヤな顔をされることなど全くありません。

つれあいの奮闘ぶりも、当たり前とはいえ大変なものです。一時は在宅介護の覚悟を決めましたから、母の部屋の家具やベッドを動かして模様変えをしたり、ポータブルトイレや新規の暖房具を購入したり、民生委員や福祉事務所を訪ねてあれこれ相談をしてきたり。誰もがすることなのでしょうけれども、本気で立ち向かう姿勢で問題に取り組んでいるのは、私にとっても励みになります。

「ひとりしんぶんGH」(We 86年12月号参照)のなかまからも、たくさんの方の励みがありました。老人雑誌のバックナンバーから役立ちそうなものを選んで送って下さったご自身も84歳のNさん、ご自分の入院予定の老人病院のことを知らせて下さった大先輩のUさん。ご両親の在宅介護のご苦労を教えて下さったYさん。ご夫婦それぞれの母上の二つの老人ホームについてMさん。病院から職場に通勤を続けた経験についてHさん。——そのほか多くの方々から、実にさまざまなお便りをいただいています。お便りは何よりの頼りです。それにしても、日ごろは黙っておられるにしても、老人の介護に精魂を傾ける経験をもつ方々がどんなに多いことか。私の事例など苦労としては序の口にすぎないこともわかりまし

た。相談の電話をかけた老人病院はみな半年も一年も前から予約がいっぱい、それだけ多くの入院準備軍がいるなかで、行政側では、ねたきり状態が三ヶ月継続しないと「ねたきり」との認定をしない、という実態も知らされました。そうしたなかで、私は、多くの励ましを心の支えとして、何としても、自分の仕事も母の看病もがんばっていきたくと願っています。

この二年間、家庭科教師として私がしてきたことのとりえといったら、子ども達が家庭科を好きになってくれた、楽しんできた、ということだけです。思いはありながらできなかった、人間そのものに迫っていくような授業。生まれて、生きて、喜び、悩み、病み、そして死んでいく、人間。その真実。そんなことがらを少しでもとりあげていたら。そして、生まれてから死ぬまで、やっぱり人間は、たがいに支えあいながら、ひとりひとり独立自活の喜びを求めていくものなのだということを、実感こめて語りあえるような、そんな授業をしていきたいなあと思います。

母の病気は、遅ればせながら、私にそうした授業ができるようにと、教えてくれたのだらうなと考えています。

(東京都杉並区立高井戸小学校)
村田さんのお母様は、十二月二十四日逝去されました。ご冥福を祈ります。

編集部

新しい家庭科を創るために

——中学校では——

磯部 幸江

新たな一步を 踏み出して

一、はじめに

「これから、技術家庭科は大きく変わりますねえ」

「そうですよ。これからは、磯部先生が木工をやるようになったりして。オレなんか、食物などできないし、困ってしまうなあ」

「そんなそんな、家じやとてもよくやっているじゃありませんか。

何でもできますよ」

技術科を担当する若い先生との雑談。

「六十八年度から家庭科も今までとは全然違ってしまいうねえ」

本年度、本校へ来られた家庭科の先生。

「そうですよ。六十八年度からじゃなく、来年度だってどうするか検討したいですね。家庭科も今まで通りにやれないから」

「私なんて、男女一緒にの授業の経験がないからさっぱり見当つかないわ」

「やっている時は、がちゃがちゃうるさいとか、どうすれば男女共に興味をひくかなんて悩みが多いけど、やってしまおうとおもしろかったなあと思いますよ」と私。

教課審の答申が発表されてから、職員室や家庭科準備室でこのような会話をかわすことが多くなった。内容が大きく変わることは予想されるのだが、どのようなことから手をつければよいのかわからない。周囲を見渡せば、でき上がった形にそってまじめに努力している大勢の教師たちがいる。私は、でき上がるのを待っているのではなく、自らで新しい家庭科への第一歩を踏み出したい。やれることからやってみようというのが私の精神。今回は、前任校で実施した技術分野の報告をしたい。

二、新しい分野に挑戦

技術科担当二名、家庭科担当一名という教員配当であったため、専門分野を交替で担当することに無理があった事や、担任するクラスの授業は一年間持ちたいという要望で、一人が一年間同じクラスを家庭分野も技術分野も受け持つことでスタートした。二年生で、学習内容は、食物（二十五時間）、機械（二十五時間）、被服整理（二十時間）、年間を通して男女共修の授業である。

機械を教えるのは初体験である。生徒に教える前に、自分だったら何を知りたいか、何に興味を持つか、そこから出発した。相棒の手ほどきを受け、入門書を片手に技術室に足しげく通った。授業の内容は次のようである。

(1) 機械のしくみを知ろう

人間の力には限りがあるし、やれることも決まっている。昔の人たちは、肉体労働を軽くするために、あるいは生活を豊かにするために、いろいろな道具や機械を発明したねと、問いかけ、生活の中で使われている機械を考えさせる。うちわから扇風機・クーラーへ、かごから自転車や自動車へ、針から裁縫ミシンへなど便利になったいろいろな機械の例を出し合う。そして、教科書にある図などを見ながら、そのしくみを

知る。教科書には、自転車と裁縫ミシンの例があるのでそれらを使う。自転車は、中学生がよく使うもので男女共に取っ付きやすいし、ミシンは私にもよくわかるので話しやすい。

ミシンは、古い足踏みものを分解させてみる。踏み板を踏む運動によって力が伝わり、上糸と下糸とからませて縫っていくミシンの複雑な動力伝達のしくみを、実物から観察するのはとてもおもしろい。分解などの作業は、男子の方が先に手を出すことが多いが、男女共に額を寄せてあって、カメラや軸の動きを見ている。

「中を見るのは初めて、おもしろいね」と生徒たち。回転運動や上下運動、人間ってすごいねと私も感心してしまう。

(2) ドラエモンみたいに

「ドラエモン、助けてよ」とあの男の子が言えば、ドラエモンは何でもポケットから出してくれる。みんなも、ドラエモンのポケットから、どんな機械を出してほしいか想像してみようよ。こんなのがあれば便利だなとか、役に立つ物を出してみよう」

生活の中で機械は欠くことのできない物であることを考えてみたいので、遊びながら生徒たちとやりとりする。頭のよくなる機械とか、美人になる機械とか、趣味を広げたり、時間を節約したり、彼らの夢が出される。

(3) VTR「ロケット」を見て

機械の発達の例として、ロケットがどのように発達したかというVTRを見る。やがては、私たちも自由に宇宙旅行のできる時代が来るのだろうか。将来はともすばらしく開けているように結ばれているのだが、でも考えてもらって、私のこだわりを問いかける。

T「今のビデオにもあったけど、そもそもロケットは、戦争に使う武器として作られたのだね。戦争が機械を発展させる元にもなっていることどう思う？」

S「むしろかしいけど、それによっていろんな物を発明してきたのだから、悪いとは言えない」

S「今は、ボタン一つで人類全滅だからとてもこわい」

T「それから、いろいろな機械が発明されると便利にはなるけれど、それとひきかえに機械にこきつかわれるとか、人間がいらなくなることとかがおきてくるね。たとえば、ロボットが仕事をして、人間の働き口がなくなるとか……。もっと身近なことでは、電動の鉛筆削りがあるので、ナイフが使えないとか……。人間が退化してしまうんじゃないかなあ」

S「楽でいいよ」

S「でも、何もすることがないなんていやだなあ」

S「人間でなくてはできないこともある」

S「機械ばかりたよっていいはダメだよ」

T「機械と人間というと、私はいつもチャップリンの『モダンタイムス』を思い出すのだけど……」

映画の話しながら、機械を作るのも人間だし、使うのも人間、私たちであるといついつい熱弁をふるってしまう。

(4) 動くおもちゃを作ろう

最後は製作である。モーターやギアボックスを使って、運動の伝達のしくみを考えながら、動くおもちゃを作る。設計からの指導は私の力不足もあり、既製の部品を使わせた。けがき、電動糸のこを使っての切断、ハンドドリルや万力を使って部品加工、そして組立て仕上げまでは十時間以上かかった。

と書いてみると、スムーズな授業のようであるが、内実はたいへんだった。その第一は私の知らないことがたくさんあったこと。事前に用具や機械の使い方を練習し、生徒にもポイントをおさえて指導しているつもりでも、いろいろな質問が出る。私の考えていないやり方もある。それらを技術の先生や生徒たちに教わりながらやっていくとおもしろくなっていく。完成したおもちゃを喜々として動かす時は、生徒と同じようにうれしくなる。途中で部品をなくしたり、失敗の連

続でやる気をなくす生徒もいるのだけれど、どうにかみんなが完成させる頃には、私のおもちゃ作りも板についてくる。

三、一歩踏み出して

技術分野の内容を長々と書いてしまったが、私は、このことによって、違った世界に一歩踏み出すとそこからまた道が開けるという体験を得た。自分が知りたい、やりたい、子供たちに知らせたいと思うことをどんどんやってみることだとなつてく感じた。まさに案ずるより産むがやすしである。

先日、NHKテレビ「おかあさんの勉強室」に「いま家庭科が変わる」と題し、家庭科について放映された。その三回目、「新しい家庭科の試み」では、いち早く男女共学をすすめて来た学校として森陽子さんが紹介されていた。森さんは、技術は男の先生、家庭は女の先生という固定した考えを取り払うためにも、技術の授業をしているということで、電気（ラジオ作り）の授業を見ることができた。話を聞き、体をはって実践しているという意気込みが感じられて、胸が熱くなってきた。

私も機械の学習をして、学ぶことはたくさんあった。指導法では似かよった点が多くあるとしても、やはり、技術科と家庭科は違うという想いをさらに強くした。免許法ではそれぞれに分かれているように、両方共に独立した教科として確

立すべきである。もちろん、家庭も技術も男女の教師が担当するのがよい。家庭科が技術的内容で再編成される懸念もあるという。私たち家庭科教師は、もう一度技術科教師とじっくり話し合う必要性を痛感する。子供たちに、人間らしい生活を創り出す力をつけていく家庭科の内容を、変えてはいけないのである。

四、おわりに

私は、前任校に十年間勤め、技術科の教師と話し合いながら、三年生の一部のみ別学で、あとは必修の授業を組み立てることができた。現在の学校に変わって三年目、一年生のみ、乗り入れて必修という形でやっているが、全校生徒一六〇〇人というマンモス校で、被服室と調理室がフル回転の毎日である。家庭科教師が三人で、時間数の関係で私は、他教科（国語）も教えているが、あくまでも家庭科が主。男女共学の枠組みができた今、来年度は、新しい一歩が踏み出せるよう、校内での話し合いを続けていきたい。新しい家庭科を創り出し、そのゆくえをしつかりと見守っていこうという決意を新たにしている。

読者の皆様、編集部の皆様、一年間ありがとうございました。春のゼミナールや夏のフォーラム、誌上でまたお会いできることを楽しみにしております。（大宮市立大砂土中学校）

新しい家庭科を創るために

——高等学校では——

立山ちづ子

大豆

はじめに

今から十年前、小学校初任教師のみそ作りの実践についてのコメントを、半田先生から依頼された。教師五年めの私には荷の重すぎる課題であったが、食物領域で何をこそ教えるべきなのかを模索中だったので、考えを整理する機会にと引き受けた。当時は、食品公害

問題がにぎやかで、一部に日本型食生活の見直しが始まっていた。私は、いろいろな資料を学びながら、食物学習のなかで、微生物の働きによっておいしい食品が生み出されてくることを把握させることがぜひ必要だと考えるようになった。そのうち「同和」教育専任の仕事に三年間携わって現任校へ赴任。早速、男女共学選択履修「食物Ⅰ」の授業で、みそ作りを教材に入れた。私自身、母などの力を借りずに作ったのは初めてであった。十月に仕込み、できているかどうか不安なのでその後時々容器をあけてみる。二週間もすればみその香りが出始めた。うれしくなって、準備室に遊びにきた男生徒に「見てごらん」といえば、「今度の実習まで楽しみにとっとく」という。長い時間をかけて食べ物を作ることは一つの楽しみなのだった。

ところで、わが町の農協は、古い家屋で醤油の醸造を行い、県内の生活協同組合にも販売している。かつては、農家が収穫した大豆を買い取る、その代金を醤油で納めるという方式をとっていた。その後、大豆は政府買い上げとなり、買い上げ価格が高く、払い下げ価格は安いというしくみに変わって、組み合わせ販売はやめた。それ以前、各農家はわが家でみそはもちろん醤油も造った。学校近くの生徒の祖父母を訪ねて、一番醤油が最もおいしくて、三番醤油になると煮物用に使ったという話をきいた。めんどうなので、65年より自家製

を止めて、農協醬油にきりかえたそうだ。醬油造りの仕込みの大瓶と大きな籠（かご）（しりしり）は納屋の隅に放置されていた。醬油入れの大きな陶器も庭木のなかに埋まっていた。

町中にある「岡部」豆腐店を訪ねたことがある。古びた看板に「慶応三年創業」とあったからだ。三〇代の元気のよい若夫婦が中心に営んでいた。説明によれば、この屋号そのものが、江戸時代に豆腐の意味で使われていたという。「やっぱり国産大豆がよか豆腐のでくつごたっです。ばってんなかなか手に入らんけん、アメリカ大豆ば使いよっです。あのA.F.ていうとは白か粉だったですもんね、業者が持ってきて、豆腐がくさらんてよかけん使いなっせと勧めたもんで。便利ではあったですな」「子どもには三人ともこの豆乳ばミルク代わりに飲ませてきたですたい。おかげで病氣もせんで育ちました」と次々に大切なお話がでてきた。ここで、油揚げ用の原料が、脱脂大豆であること、二度揚げをして完成まで約40分も低温で揚げ続けることを学んだ。

伝統的な食品を教材に取り上げると、身近な所に学習資料が豊富にあることを改めて教えられた。

大豆の性質、大豆製品の原材料調べ

乾燥大豆を一晩水に漬けておくと約二・三倍に膨らむ。小豆と比較して実験。生徒「からからの豆が水を吸って重さが

ふえていくなんてすごい」「同じ豆でも水分を吸う量は違う。小豆は加熱するとき、また水を吸い大きくなることがわかった」このように簡単な内容でも、生徒の感想をみると、時間がかかる作業の料理は家庭生活のなかで消えかかっていることがうかがえる。

大豆加工品のみそ、醬油、豆腐の見本を、市販品、生協品で準備して、その原材料調べを行う。生徒「いろんな種類の材料でできているなあ（男）」「今まで食べてきているけどどうやって作ってあるか知らなかった（男）」と無関心であったことを述べる。見本品に共通する原材料が不可欠なものであること、そして他のものは食品添加物であり、その使用目的について簡単に説明する。生徒「みそ、醬油、豆腐ときくといかにも手作りらしい発想にきこえるが、やはりこういうのにも添加物が入っていると知った。にがり（海の水からとれる）とは初めて知った（女）」「カビはきかないだけでなく、みそや醬油に利用され、私たちの暮らしに役立っていることに驚いた（男）」品質表示を見ていない生徒が多く、また見てもその意味がわかっていない。解説する力をつけたい。

大豆の加工・調理（生徒の感想を中心に）

②きな粉 「いつも売ってあるのしか食べたことがなかったのでできるか心配だった（男）」「きな粉は家でも作られるの

がわかった(男)」「少し焦っていたが市販のものよりもおい
いがよかった(女)」「真黒になって苦かった(男)」

豆を炒ることも初めてである。炒り加減と色や香りが結び
ついてることを作る過程でわかっていく。

⑤豆腐 「意外と簡単にできることがわかった。豆腐は身体
にいいと聞いたが豆しか使わないからだ(男)」作ること
で何が不可欠な原材料かがわかる。ただ昨今の添加物の安全性
の問題は、食品そのものの栄養価の判断と混同させているよ
うだ。「形がくずれていてみかけはよくなかったけど一応豆
腐ができたのでうれしかった(女)」「思ったよりよくでき
てあまりうまくいとは思わなかった(男)」型箱ではなくザル
で代用しているので四角の豆腐はできない。また、時間が不
足なため、作るのに精一杯で、あくぬきが不十分となり、な
めらかな豆腐に慣れた生徒の味覚にはもう一息である。

⑥みそ 煮豆は圧力鍋を使い、加熱時間を短縮化する。生徒
「大豆をつぶして、こうじを入れて、あんなにちゃんとでき
るとは。思ったより簡単にできた(女)」ほぼ同じ感想であ
る。田舎である私たちの地域でも自家製みそを食べる家は約
一割にすぎなくなった。

⑦揚げ豆腐 「揚げ豆腐なんて全然食べたことがなかったけ
ど、簡単でとてもおいしかった(女)」家庭では水分をさら
に蒸発させた油揚げを、みそ汁の具や煮物料理によく使う。

その作り方を理解させることと、豆腐の食べ方の工夫の一つ
として、実習に取り上げた。

大豆とその加工品の栄養価、たんぱく質の算出

大豆が畑の肉といわれ、栄養価の高い食品であるというこ
とは男女ともに知っている。その内容を食品成分表の数値で
魚(まぐろ)、牛肉、米と比較して確かめる。たんぱく質だ
けでなく、繊維、カルシウム、ビタミンB₁やB₂などの成分
も、それらの生理作用を説明しながら、大豆は豊富に含ん
でいることを整理する。たんぱく質を算出すると、米と大豆と
いう食品の組み合わせが相互の少ないアミノ酸を補給して、
よりすぐれた価値になることがわかる。日本人の生み出した
食慣行がすばらしいものであることを科学的に裏付ける。

世界の食事傾向(VTR「飢えか戦争か」'84年NHK)

国の経済が豊かになるにつれ、人間は穀物中心の食事から
動物性たんぱく質の獣肉食に移っていく。そのために家畜化さ
れた動物たちは肉をより増産するために品種改良されてい
く。飼料はかつて人間の穀物であったものを与えられる。そ
して今、飼料にされすぎて立てなくなった豚、原因不明の病
気で子豚が死んでいくといった問題が出てきた。一方で人間
の食べる穀物もないアフリカ、先進諸国向輸出、飼料用キャ

ツバの連作障害（表土流出）に泣くタイがある。生徒「豚とイノシシは似ていると思っていたが豚の元の姿だと知らなかった。それに今の豚は前から今の形だと思っていたがだいぶ変わっていることに驚いた。ある所では肥満が増え、ある所では飢えている人が同じ地球上に住んでいるのはおかしいと思う。ぜいたくをしたいという気持ちをおさえ、飢えている国の人に分けてあげればいいと思う」。

食べ物の問題を農業を結びつけて考えさせたい。

わが国の食事傾向と疾病

55年と83年について、日本人の栄養素と食品群別の摂取量を比較し、最近の傾向をつかむ。総エネルギーはほぼ同じであるが、植物性食品特に穀類（米）が減少し、肉、卵、乳・乳製品が大幅に増加している。したがって、動物性のたんぱく脂肪の摂取量がふえている。日本人の死因順位の年次推移をみれば、栄養不足で罹患しやすかった結核等から、悪性新生物や脳血管疾患・心疾患など、化学物質と動物性脂肪の過多による疾病が急増してきたことを把握する。

肉食傾向が強い生徒たちに――↓これらの資料は衝撃的に受けとめられる。

みそを使った調理

県内の生活改善普及員たちが伝統的な料理、郷土の産物を活かした料理を集めて一冊に編んでおられる（「手づくり食品集」）。このなかからみそを使ったものを選んだ。

食品の塩分の算出と摂取量

みそを使った料理ばかりの試食で、「からかった」という感想が多い。そこで、手作りみその塩分を、使った材料の重さから算出する。作ったみそ全部を料理に使った。含まれていた塩は一人当たり10g相当になる。それでは一日の塩分摂取量のめやすはどのくらいか。T男の一日の食事内容を取り上げて各食品の塩分含有量を分担して算出し、一日の合計を出す。昼食べんとうの冷凍食品の揚げ物には醤油をかけたという。醤油の塩分は？ みそとどちらがからいかな？ 計算の結果、一日13gの塩分摂取となった。そこで、一日のめやす量は10g以内であることを説明する。生徒たちはT男の食事が決して塩を多量に摂る食事とは思えないので、日常の自分の食事でも塩分を摂りすぎていると反省していく。

みそ・醤油のできる過程

わが家で栽培した大豆の枝豆、そして82年、84年、86年の各10月に授業で手作りしたみそ、比較用に市販みそ、これらを少しずつ小皿にのせて、各班で観察と試食を行う（結果は

別表)。塩の量は、年々減らしてきたが、生徒はそのことを舌ではっきり感じとる。発酵とは、長い時間をかけて、微生物の働きで物質がしだいに変化し、新しい食品ができていくこと、これがこの教材の主なねらいであった。生徒はこのことを身体ごとにわかっていくように思う。しかし、市販みそは変化していない。なぜか、合成の保存料や殺菌料の添加の意味が身体で確かめられる。「死んだ食品である」と私がいえば、眼をこらす生徒が何名かいる。手作りみそは擦⁺って使うもの、市販みそはそのまま使うという区別を理解している生徒が多かった。祖父母と同居の家庭が約六割という地域性からであろう。

大豆食の歴史

わが国では古代から大豆を五穀の一つとして食べてきた。荒地でもよく育ち、農民の糧となった。みそ汁が武士の戦時食として始まり、庶民の日常食となったのは江戸時代から。豆腐も大豆の生産量が高まって普及、しかしぜいたく品であった。欧米の大豆とのめぐり逢いは近代。今、世界でも最大生産国のアメリカでは、日本からペルーが持ち帰って栽培化されたわずかな歴史でしかないことを説明する。

日本の大豆の需給事情と用途

みその仕込み期間による変化

仕込み期間 項目	枝 豆	'86年 9 月末 (1ヶ月前)	'84年10月 (2年前)	'82年10月 (4年前)	市 販 (1年前購入)
味	・甘味がある	・こうじの味が強い ・水っぽい	・みそ味が一番おいしいの時 ・少ししょっぱい	・しょう油っぽい ・酸味がくさった ・酒が感じ	・うすい
舌ざわり	・歯でかんでもざら残る	・ちょっとかすが残る	・とろけやすい	・だまがある ※	・きめが細かい
香り	・豆のにおい	・あまりにおわない ・豆っぽい香り	・においが強い ・あまい香り	・しょう油のきつい香り ・しょう油っぽい	・あまりしない
色	緑	黄土色	茶 色	黒褐色	黄土色

※ 加熱不十分で、煮豆が少し固かった。

日本の大豆の総需要量は戦後急上昇した。が、国内生産量は減少。近年ようやく自給率向上政策のもとで、低下をくい止めている。とはいえ約95%は輸入。それもアメリカ一国に依存している。いきなりだご汁の小麦粉が地粉であつたことを取り上げ、小麦とともに大豆の国内生産量が急減し、輸入依存型に陥ってしまった経緯を、日米貿易摩擦の問題と重ねて考えた。また、'73年と'83年にアメリカ大豆が急騰し日本の加工業界は大混乱、結局大豆製品の価格が上昇したままで落ち着いた。大量の原料を一国に依存すると、価格決定権はその生産国が持つことになり、わが国の主体性は全く失われてしまう。食糧の安定供給の点から問題が残る。さらに、アメリカの農業は土壌浸食、塩類集積、地下水位の低下、砂漠化の進行、労働者の賃金アップの要求などの課題を抱えている。将来の日本の食糧を依存し続けられるかどうか危ぶまれている（『西暦二〇〇〇年の日本の農業』日本経済評論社、'83年）。今後、どうしたらよいのか。

日本の大豆需要量の食用は横ばいであるが、家畜の飼料用が急増している。この内容を、家畜1kg太らせるのに大豆やとうもろこしなどの穀物を、牛は8kg、豚は4kg、卵は3kg、ブロイラー鶏2kgを必要とするしくみがあることを知って理解させる。

一方、世界の人口はどんどん増加している。それに肉食傾

向が進む。世界の食糧生産は、人口をまかないきれいかどうかの不安がある。

これからの展望

何を資料に取り上げようかと探しているとき、『かがやけ、野のいのち』（星寛治著、ちくま少年図書館99）をみつけた。有吉佐和子著『複合汚染』でも紹介される山形県高畠町の実践である。この「あつたかい土」と「共につくりあげる関係」から抜粋してプリントした。生徒に感動した部分を挙げさせると、冷害の年に化学農法の田より有機田の地温が3度も高くて稲が健在であつたこと、その肥えた土の中に、「数億から一〇億をこえる小動物、微生物、酵素、菌類などが生息し、生まれては死に、生きては死にして、一つの自然界を形成して」おり、「その目に見えない生命活動のエネルギー」によって地温が押し上げられていたこと、「生きている土の勝利なのであつた」という内容に集中。そして「本物の食べ物を得るためには、都会で手をこまねいていてもいっこうに前進しない。村のふところにとびこむ勇気があつてこそ、はじめて打開の糸口は見えてきた」「その底には、あらたな人間観・生命観が生まれつつある」というしめくりに共鳴する生徒たちがあつた。

最後に大豆学習を終わつての感想を課した。J男「食べ物

を作るのはたいへんだなあ」T男「みそは何百年前からある、大変重要な食べ物だと思う。今も昔も変わりなくみそを使っていることはとてもいいことだと思う。今からも歴史的

食物を大切に保存しながら食べていきたい」M男「市場において有利で利益の大きな農産物を作りすぎたために、アメリカの土壌がだんだんと栄養分を失いつつあり、だんだんと砂漠化していつてるといふ事実をきかされた時、自分はそんなことが自分達の食生活のすぐ近くにある重要な問題であることを知って、自分がいかにそういう問題に目を向けていなかったかがわかった。今からはニュースにもきちんと目を向けて、これらの問題について自分なりの考えを持ち続けたい」N子「日本人の大豆の摂取量は肉食が増加しているのに対して減少している。私達は好んで大豆を食べようとは思いませんが、実習でもやったようにいろいろな料理の仕方、どれだけでも食べれると思った。みそ作りは初めてだったのでもっとも楽しかったし、昔はこうやって作っていたのかと思うと大変そうな感じである。普段何げなく残している食べ物はアメリカで飢えている人々のことを考えると……大切にしなければならぬ」K子「日本が豊かだといえるのはほんの一部の上流階級の人たちです。アメリカでも黒人は胸をはって豊かだとはいえません。ほんの一部の、世界中でひとにぎりの人だけが満たされているのかもしれない。これから世界は、食

糧危機はどうなっていくのだろうか」など、自分の食生活をふり返ることと、これからの自分のくらし方、課題を考えた内容でいっぱいであった。

この直後、「牛も驚く謎のステーキ」が放映された(NHK、'86年11月)。大豆や魚を現代の科学技術で、「牛肉」に変身させるのである。中国ではすでに精進料理に植物性たんぱくが肉の代用として使われてきた。これを応用して、大量生産、大量販売をしようというのである。生徒の反応は「大豆は大豆の味、魚は魚の味をだせばいいと思う。そんなにしないで肉を食べたいとは思わない」と「本当の肉ではないけれど安い値段で買えるのは消費者にとっていいと思う」「肉ばかり食べると体に悪いので魚で作ったステーキを食べるといいんではないか」と二つに分かれた。

過去の食品加工は化学物質の添加が中心であったが、新しい技術は高温・高圧など物理的加工が主になりつつある。それでも本物に似たものを安価に、大量に作るという点では同じである。原料が自然の、今までの食品であるという理由で、新しい加工品の安全性がおそろかにされていないかという不安が残る。新たな大量実験にやらなければいけない。

何を食べていくのか、その選択の判断が、人間観・生命観ときっちり結びついていることを理解させたいと思う。

(熊本県立甲佐高等学校)

(3) 産む産まないは誰が決める？

女と男の関係を考える会

はじめに

最近の生殖技術の進歩は驚嘆に値する。オーストラリアでの冷凍卵子による世界初の出産。排卵誘発剤を使って妊娠した四つ子のうち、二児を中絶して二児を出産させた長野県の例。従来の羊水診断よりも三ヵ月も早く胎児の先天異常が発見できる絨毛診断。それはすでに臨床応用されているという。

生殖行為なしに試験管の中で受精が行われ、子供を誕生させることが可能になった現在、科学技術によって生命が自由に操作される危険性が高まってきている。これらの生殖技術の進歩は、私達にいったい何をもたらすのであろうか。また、これまでの歴史の中で避妊や中絶の技術は、女のために使われてきたであろうか。

女性が性交によって身体に受けるリスク

人間は他の動物とは違って発情期がなく、生殖につながらない性交も可能である。ところが生殖を目的としない性交でも、女性の身体は妊娠する機能をもっている（この不都合を解消するために、人類は古くから避妊や中絶の方法を考えてきた）。

このような本人の意図とは別に、性交と生殖は密接に結びついているので、肉体的に成熟した女性が性交する場合は、完璧に避妊をするか、あるいは妊娠の可能性をかせこむかわからない。後者の場合のうち妊娠が成立すれば、流産・人工妊娠中絶・分娩のいずれかで終わる。私たちが意図的に選択できるものとして避妊・中絶・分娩の三とおりがある。しかしどの選択においても、女性の身体はある確率でリスクを負っている。

第一の避妊について、現在のところ確実性・安全性を100%備え、かつ安価で誰にも簡単にこなせるような方法はない。したがって各種避妊方法による副作用の心配や、避妊の失敗による妊娠の可能性などのリスクがある。

第二の中絶の場合、子宮の損傷、麻酔のショック、骨盤内の感染やその後遺症などのリスクが知られている。

第三の分娩の場合はどうか。医療技術の進歩や施設内分娩

の普及で、以前ほどの危険性はなくなつたとはいえ、妊娠・分娩が原因で生命が失われたり、後遺症が残ることもある。

また、分娩後、全身の倦怠感、腰痛、筋肉痛、精神の抑うつなどの症状がみられ、それらが長びく場合もある。しかし「出産は自然の出来事なのだ」と考えられ、これらはあまり一般には知られていない。実際には、分娩までの危険率や死亡率は、妊娠初期の中絶やピルの副作用よりもはるかに高いといわれている（丸本「女性の身体と心」）。

一方男性が性交する場合、身体に負うリスクは何か。ただか性病の罹患ぐらいであろう。これほど、性交に際して女と男が負うリスクにはひらきがある。だからこそ、女性のセクシュアリティを考える時には、こうした様々なリスクを充分に考慮し、女性のそれぞれの生き方を認めた上で、医療保障が実施されるべきである。

二つの主張

このように女性は、産むことによって様々なリスクを負っている。子供を産みたくない女性に、産むことを強要することはできない。つまり、産むこと産まないことは、職業選択や思想信条の自由と同様に、本人の意志以外の所で決められてはならない。ましてや国家が管理して良いはずはない。

もうひとつは、女性の健康保障は現行のように妊娠・出産に対してのみ行うのではなく、産まない場合にも広げて考え

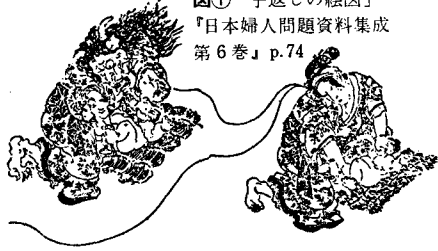
られる必要がある。つまり避妊、中絶、月経時も含めた医療保障がなされるべきである。もちろん産まない方法の第一選択は中絶ではなく避妊であるが、現在でも避妊方法は完全ではない。だから、中絶は女性の身体にとって決して良いことではないが、最後の選択肢として残しておく必要がある。すなわち、本人が希望する場合は、安全な中絶が受けられるように保障することが大切である。ところが、中絶をめぐる最近の日本の動きは、これらの主張とは逆の方向がみられる。

一九七二年と八二年に出された「優生保護法改正案」に伴う動きである。「歴史はくり返す」というが、これまでの歴史がみごとにそれを物語っているもので、それをみてみよう。

「墮胎罪」制定以前——間引き、子おろし

日本では平安時代から間引き（嬰兒殺し）や子おろし（中絶）が行われていた記録があり、江戸中期以降に至ってはかなり頻繁に行われていた。一般には都市では子おろしが農村では間引きが多くあり、危険を伴う実に様々な手段が用いられていた。十八世紀の日本は人口がほとんど増加していないが、その原因として当時の世界的な寒冷気候や都市の劣悪な環境とならび、この間引き・子おろしの存在が考えられている。そして一般に間引き・子おろしは罪悪視されてはいなかった。「生かさぬよう、殺さぬよう」という幕府の農政下で、苦しい生活をしいられてきた農民にとって、新たな子の出生が、

図①「子返しの絵図」
『日本婦人問題資料集成
第6巻』p.74



親や先に生まれた子の生存をおびやかす場合は、新生の子を排除したのである。それは家や共同体から要求され黙認されていたのであった。

しかし江戸中期以降、貨幣経済の進展により幕藩体制の根幹をなす家父長制と財政基盤がくずれだした。これを再強化するために行った施策の一つが間引き・子おろしに対する規制である。すなわち年貢米の減少を防

ぐため、それまで黙認していた間引き・子おろしを一転して罪悪とする教化策をとり始めるのである。上図は「子返しの絵図」であるが、子殺しをするのは鬼のような母親として描かれている。実際には夫や産婆が間引きに手を下していたのであるが、母親だけに責任をおしつけようとした。

国家政策としての「墮胎罪」

明治に入って政府は産婆の墮胎取扱い禁止や墮胎薬の販売禁止をし、さらに明治末には現行刑法墮胎罪を制定し、墮胎行為そのものを禁止する。それまで貧しい農民にとってやむをえない人口調節手段であった墮胎が罪となった。以後、女

性は妊娠したすべての子を産むことが強制され、しかも「家の子」「天皇の子」として育てねばならなくなった。

しかし、貧困にあえぐ女達にとって次々と生まれてくる子を育て、食べさせていくのは並み大抵のことではなかった。重労働の上に多産で、しかも乳児の死亡率が高く、農村女性には二重に苦しんでいた。どうしようもなくなつて自分で墮胎を試みて失敗し、命を落としていく例があつたと絶たなかった。

産児制限運動

こういう社会情勢の中で、一九二二年アメリカの産児制限運動家サンガーが来日し避妊の必要性を説いた。これを契機に石本静枝・山本宣治らを中心として産児制限運動が全国的に広まっていく。また、一九三二年には市川房枝らが墮胎法改正期成同盟を結成し、「女には望まぬ子を産まなくてもよい権利」があると主張した。当時とはび重なる戦争と不況により民衆の生活は非常に厳しく、子供を多く産んで育てられる状況ではなかった。にもかかわらず政府は、不況を脱するためには人口増加政策を強化し、墮胎を厳しく取り締まるという逆の方策をとり、やがて国家権力の前に民衆は沈黙させられていった。産児制限運動によって全国各地で開設された産児制限相談所に、閉鎖命令が次々と出され、一九三六年には太田リングも有害避妊器具とされたのであった。

国民優生法と優生保護法

たび重なる戦争により、人口増加策が急務となり、政府は一九四〇年ナチスの断種法にならって国民優生法を制定した。この内容は悪質な遺伝的疾患をもつとされる者からは産む自由を奪い、他の大多数には中絶はもとより避妊さえ許さないものであった（この考え方は現行の優生保護法に受け継がれており、早期に是正される必要がある）。さらに政府は優良多子家庭の表彰をしたり、人口増加政策として早婚・多産を奨励し、結婚しない人には独身税を課した。ここには、国家にとって必要な兵力となる人間は何が何でも確保するが、足手まといとなる人間は切り捨てるといふ露骨な人口管理思想が読みとれる。

一九四五年敗戦。焼土と化した国内に大量の国民がもどってきた。住宅難・食糧難の上にベビーブームが訪れた。一方で強姦による妊娠、栄養失調による母体障害、生活苦の中の妊娠等のためヤミ堕胎をする女性が少ないからずあり、その弊害が多発した。この様な状況の下で今度は人口抑制の必要が生じた。そして一九四八年政府は優生保護法を成立させた、翌年には「経済的理由」もつけ加え、堕胎罪を温存したまま、中絶を合法化させて人口抑制の効果を發揮させたのであった。

そして現在、再び人口増加の必要に迫られ、「経済的理由」を削除し、中絶ができないようにする方向の検討がなされた

りしているのである。

おわりに

このような歴史と現状をみると、国家によって産む・産まないの自由が剝奪されてきたことがよくわかる。それは個人が決めることであつて国家が介入すべきではない。したがって現在なお存在する「堕胎罪」、そして様々な問題をもつ「優生保護法」は撤廃されるべきである。その上で女性の健康を保障する新たな法律が制定される必要がある。そして避妊・人工妊娠中絶、分娩が安全な医療のもとで選択でき、産む立場も産まない立場をも認めた医療保障がなされるべきであろう。

しかし今私達は、驚異的な生殖技術の発達により、重大な岐路に立たされている。治療行為の名のもとに、女性の身体が実験材料とされてきている。医療技術の発達が女性に何をもたらすかを、真剣に問ひなおさなければならぬ。

また女性自身が、日常生活の中で自分の身体をよく知り、自分の感性を大切にして、それが伝えられる女と男の関係をうち立てていく努力が必要であらう。（長沢保子）

参考文献○丸本百合子「女性の身体と心」『女性の現在と

未来』ジュリスト 39、有斐閣（85年）、

○女性学年報第四号（83年）、

○『試験管の中の女』リタ・アルディッティ他、共同通信社（86年）

教育のなかの

心理学



小沢 牧子

カウンセリングとは何か (3)

カウンセリングといえば、悩みをもつ人や環境にうまく適応できない人のための技法と考えられている。しかし最近、カウンセリングの思想や技法を拡大した、「よりよく生きるための人格変容講座」というべきものが急速に世の中に浸透し、静かなブームを呼んでいる。これは「成長心理学」とよばれるものを背景にしており、人間の成長と変化の能力をひきだす技法のもとに、「不適応者」ではなく「正常者」のより高い正常性（超正常性）の実現をめざしている。

D・シュルツは言う。「人間の能力を開発しようとする運動の推進者は、『正常性』^{ノーマリティ}を越えた望ましい水準の成長や発達があり、人間はその可能性のすべてを認識し、実現するため、この高水準の成長を追求することが必要であると主張している。換言すれば、たんに情緒的な病気がないというだけ

では不十分である。神経症的、精神病的行動がないというだけでは人を健康な人格とみなすことはできない。情緒的疾患をもたないことは、成長や成就に必要な最初の一步でしかない。個人はそれ以上のところに到達しなければならない。」

『健康な人格』川島書店

「もっと正常になりたい」という欲望とは

果てしない競争ということばがあるが、人は「果てしない正常性」を求めてゆくべきなのだろうか？　そして「正常性」とはいったい何をさすのだろう。それは世の中でより効率的のたかい人間になり、より強者となる能力を身につけることと大きく重なっているような気がしてならない。しかもさきののべた、それを実現するための講座は、ときに十万円を越える受講料を求めながら、「あなたの人格を成長させ、可能性をひきだします」という唱い文句で、多くの受講者を集めて大きな利益をあげているのである。

臨床心理学のゼミ員のUさんが、この成長心理学に基づいた技法を批判的にとらえるというテーマで卒業論文を書くこととし、まずは自分で体験することから始めようと、二日間の講座を受けた。ところがUさんはみごとにミイラ取りがミイラになるという形で、この技法に深く心酔してしまったのである。Uさんをからかって、私は「恋に落ちた乙女」と評したが、彼女は自由になり成長したという感じにみたまされて生

き生きと輝き、ゼミのメンバー達にその体験のすばらしさを繰り返し語った。しかしほとんどのゼミ員たちは、口々に疑問をのべた。私自身もUさんの憑かれたような心理学的技法への心酔ぶりに、驚きを覚え恐ろしさを感じた。わずか二日や三日でそんなに自分が「成長した」という実感に充たされる技法とは何なのだろうか。ゼミナールでの熱い議論は、夕闇に包まれる教室から学生食堂へと移り、コーヒーを飲みながら続けられてゆく。

効率的な「成長」をもたらす技法

Sくんは言う。

「Uさんはこれまでこだわってきた親とのかかわりから解放されて自由になったって言うけど、親との現実の関係を抜いたところで、ひとりであなさがさっさと変わっちゃうなんて、不自然じゃないのかな。そういうのって、相手にむしろ失礼なんじゃない？」

Kさんはいつもの熱っぽい早口で問いかける。

「私だって親との葛藤とか人との関係の悩みとかはたくさんある。でも、まわりの人に支えられたり自分も支えたりっていう関係のなかで、そういうものを抱えつづけて、日常生活の中で自然に変わっていききたいの。あなたみたいにお金で成長を買っちゃったら、お互いが日常のつき合いの中で変わらあうっていうすてきさは、どうなっちゃうの？」

いつもとどめの一言が得意のO君。

「あなたは自分の成長とか可能性の増大とか言ってるけど、結局、社会で求められている人間関係により近くなっただっていう満足感なんだよ、それは」

Uさんは、反論する。

「日常生活の中でゆっくり変わり成長するのは確かだけど、でも早く変われるならその方がいいじゃない？」

私はあつ、と思う。ここに私の、そして他の学生のひとびとのこだわりへの答があると。

私は連想する。温室での促成栽培で急いで作られる野菜のこと。ゆっくりした体験の時間を与えられず、「知の高み」へとレールに乗せられる子どもたちのこと。効率主義に深く蝕まれ、偽の豊かさにとりこまれた私たちの暮らしのこと。生きものにとつての時間の意味、ゆっくり重ねられる時間のもつ大きな意味を、近代の思想と科学は奪った。生きものが時間をかけて熟してゆくということのたしかさを根こそぎにした。人が人や自然とかかわる中で変化してゆく手ごたえを風化させた。人間が人間を効率的に手軽に、望ましい方向へと変えるという操作的技法を、心理学は提供しつづけて、人々をひきつけてきたのではなかったか。これは、心理学の世界に身を置いてきた私が抱え続けなければならない深い問いなのである。

窓

植垣一彦

教室

(20) 教室って、不思議

「センセー、やめてよオ、スーぐそれなんだからア——このところ明石家さんまの「ボン酢しようゆ」CMパフオーマンスが気に入って、〃〃しあわせって、なんだっけ、なんだっけ——」をやり出したら、またまた世良くんにたしなめられてしまった。

「先生がまん中に出てきたらナニか始まるんだよなア——まったくどうしようもねエ、と言いたげ。「悪い、悪い……」。そそくさと頭をかきかき引つ込んで、授業続行——「デアルカラシテ、〃四捨五入して十分の一の位まで求めよ」ということのウラの意味は……」。

わがクラスの「円形劇場」は、何か

とベンリ。子ども達の机を、どうして「円形」にするようになったのか。詳しいことは忘れてしまったが、きつと、子ども達相互の〈関係〉がとりやすい座席に、という単純な発想だったのだと思う。以来十数年、一貫して私は「円形」を旨としてきた。

「円形の座席」など、ほんの些細な思い付きに過ぎないけれど、それでも実にベンリなことがたくさん。

たとえば、「これはきちんと聞いて欲しい」と思う時には、まず「まん中」に出てしゃべり始める。子ども達が身を乗り出してきたころ、それとなく私が移動していけば、子ども達の目は自

ずと黒板へ向く。「静かにしなさい」と怒鳴らなくともよい。

声の小さな子が発表する時でも、(大きな発声はそれはそれとして大切なことだが)、「まん中」に私が出ていけば、それで事足りる。「もっと大きな声で！」なんぞと畏縮させる必要もない。

本など読んであげる場合も、「まん中」にみんなが集まって腰を下ろすと、私の声も通りやすいし、子ども達もぐっと集中してくる。

子ども達に「円形」のよさを聞いてみると、「目をキョロキョロ動かすだけでみんなの顔が見えて安心」との声。これは私にも身に憶えがあつて、まったく同感。先生の指図がうまくつかめずして何をすればいいのだろう、といった取り残されたような一瞬の不安。とつさに人の所作を盗み見て、なんとかその場をつないでいったものである。「一斉に黒板の方を向く」例のスタイルは、友だちの後ろ姿か先生の顔しか

見えず、孤独の緊張に陥れるだけ、と言えど大げさ過ぎるだろうか？ 私には、子ども達にとって「みんなの表情や動きが前から見える」というのは、だからどんなに気を落ち着かせることだろう、と思えてくる。

ある年、こんなこともあった。音楽の時間、障害児のAちゃんがどうもモゾモゾしている。いつもどこかしら動作が違う。「おシッコしたいのかな？」——向かいに座っていたマキちゃんがいち早く、そんなAちゃんの様子に気付いた。音楽専科の先生に断って、トイレに連れていった。ウンチだった。「トイレ行って来るジョー！」と私に遠慮なく言うようには、専科の先生にはまだ言い出せなかったらしい。マキちゃんはその足でちゃんと保健室に行き、職員室で空き時間を過ごしていた私を呼びに来た。——Aちゃんのパンツをゴシゴシ洗いながら、私はマキちゃんからそんな一部始終を教えてもら

ったのだった。

マキちゃんの個人的なやさしさにはむろん頭の下がる思いだったが、同時に、お友だちの表情の見てとれる「円形座席」の思いがけないやささも知らされたのだった。

さて、こうした、教室での〈関係〉や〈雰囲気〉を自然と変えるようなちよつとした工夫は、何も教師の専売特許ではない。子ども達も、実にしたたかで、ズルツチイ工夫を編み出してくる。

その日、予定外の「ドロケイ」遊びに汗を流して教室にもどる途中、木村くんと中谷くんが何やらコソコソ話。

「思い切って言つてよかったな」「うん！」「フフフ……」——連中にいっぱい食わされたのである。

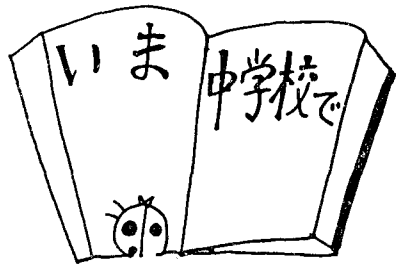
「先生、勉強ばっかしじゃ疲れちゃうよ」「たまにはみんなを外で遊ぼうよ！」「ウーン、そうだなあ……」と私がまだ思案しているのに、「ヤッター!! ワーイ、パチパチパチ！」てなふうに、

みんなして先に喜んでしまったのである。そんなに喜ばれたんじゃ私も後には引けず、「しようがないなあ……ヨシ、わかった！」と外へ。

作戦成功！の連中は、その後も、「先生、このころ本読んでくれないよオ、たまには読んでよ！」「ワーイ!! パチパチパチ」とばかりセンサー攻撃。二度三度とノツてあげたが、いつもいつもじゃ世良くんじゃないけど「やめてよオ」とも言いたくなる。先日はヒョイと次の手でかわしてしまった。ひとしきりの歓声の後、「その手は桑名の焼きばまぐり！」「ナニ、ソレ？」と連中の関心をズラして私のペース。〈関係〉の機微が行き交い、〈雰囲気〉の対流が感じられて初めて、教室は教室の意味を帯びてくる。そのしなやかさやふくよかさを願って、担任に用意ができるものは何か——。

教室って、不思議なところではある。

(完)



仲野 暢子

何かに

燃えたい



そこちのヒンシユクもなんのその、学年中の子どもたちが熱病にかかったように沸いていたソフトボール大会も終わった。またもや七クラス中のどんじりを受けもってしまったわがクラスだけれど、「オレたち勝てるはずだったんだよナア」「あんなに練習したのに……」と言いながらも楽しげな口調にホッとする。

町なかの学校だから、生徒が千人近くいるのに、校庭は野球のグラウンドなら一面がやっとだし、バレーコートだって三面しかとれない。運動部が屋上まで含めて、朝晩曜日を分けてひしめいて使っている。その中でクラス対抗試合とその練

習をやるとなると、かなりムリな相談だ。まず時間の確保――実はこれも教育委員会と管理職からの制限を、学年教師が一致してなんとか潜り抜ける――近くにたった一つある区営グラウンドを半日借りる（これが大変な競争率だ）。そしてキャッチボール程度の練習をするにも、あちこちの公園で叱られ苦情を受け、他の人の来ない早朝なら……と安心しておにぎり持って集まったのも束の間、ゲートボールの大人ともめたり、とにかく外から見たら何であんな思いついてまで……と疑われる騒ぎに生徒も教師も血道をあげている。

実を言うと、文部省から押し付けられた「必修クラブ」なるものがご存じの通り、とても現実には合わない。苦肉の策として去年編み出したのが、学年として「クラス全員が参加し、協力できるイベントを一年中打ちまくる」ことだった。合唱コンクール、計算・英単語・漢字コンクールにかかる大会、バレー・バスケット・ソフトボール大会、そして文化祭、三年生を送る会、飯ごう炊さんetc……。ときにはクラスを解体したり。だいたいクラスが主体となって「共同作業を計画実行して、誰もがなんらかの進歩や、成就感を持てるように」と目論みではいるけど、さて実際は？……たまには「塾に行く時間も忘れて」とか、「浮わつて……」と家庭から苦情もあるが、大抵は子どもたちのあまりの一途さに呆れて、「今でなければできない経験だから……」と協力しても

らえるのは、幸運だと思う。

今年のソフトボールは、一クラスに男女混合の四チームを作
って、クラス対抗のトーナメントということになった。うち
のクラスは全員揃って徹底的に練習するなんてとても……だ
けれど、でも朝の五時から隣の公園へ越境練習に集まっ
ているチームがあったり、女子は男女混合で練習する前に少し
特訓しておかなければ迷惑かけるからと、毎朝自転車であち
と離れた公園まで遠征して走り回ったりしていた。

運動の不得手な子だっているのだから、一人残らず……と
いうのは難しい。ホームルームの時間にやっと割り当てられ
た校庭で、ぐずついているチエたちに「顔を背けないで、球を
見なさい。グロブがあるんだから、受けた方が安全なんだ
ヨッ」と私は自分でボール一つ投げることもできないくせに
ドナリたてる。和平は？ と探せば、隅っこで一人でボール
をお手玉している。「女子とキャッチボールの練習すれば？」
と言ってフクレられたけど、ユミが「和平ちゃん、行くわよ
オ」と投げると、結構のって「アーラッ」とか拾っている。
男子が女子にノックを打ち分けて守備の練習をしているのは
ムラキンググループかな？

投手陣はシイ、マキ子、ヤスエにトツチン。シイはふだん
教科書とノートをかバンの奥深くしまいこんで、字を一切書
かないで有名だ。バカにされても頑としてサボリ続ける。か

れは今回速球の腕を見込まれてエースになった。日ごろから
豪快なマキ子も手堅いと評判がいい。オシャベリスズメのユ
ーリーが威勢よく声をかけて、女子の練習をまとめている。

本番ではあっさりわが最強チームが討ち取られ、くじ運の
強かったDチームだけが二回戦まで進んだ。サキ子の班日記
に「私は下手だからソフトボールは嫌いだった。毎朝一生懸
命練習したけど、本番になると、来た球はみんな男子に任せ
て突っ立っていた。三回裏で球が私目掛けて真っ直ぐ飛んで
来た。仕方ないと思って手を伸ばしたら、スポツとグロブ
にはまった。びっくりした。うれしくてうれしくてそれから
ハッスルして二回成功した」とある。またタキは「ワヘイが
驚く程カツヤクして、二人討ち取った。やはり毎朝練習に來
たから取れるようになったのだろう。オレたちは勝てると思
って油断してミスが目立った」。マキ子「みんなすごくまと
まって、気持ちよかった。ナツパはとても勇敢だった。男は
あななくっちゃ（??）。差し入れのアツアツの肉まんをみ
んなで半分ずつかじったっけ。

そして今度は英単語の特訓にシイとサーチャンがみんなか
ら追い回される番だ。これが根本的な解決だとは到底思えな
いけれど、今現在の中学生生活は二度と繰り返せないと思うと、
つい今日のシアワセを求めてアタフタと忙しがってしまう。

一人々々の心の中にはまだまだ届かない奥がある。



Weに なんでも 言おう なんでも 聞こう

◆We 六年目の企画を見て、読者の層を広げることができるような予感を覚えていたのです。We が生き残れるかどうかは、様々な問題意識をもって、日々忙しく生活している一人一人に、どれだけ幅広い視点から自分自身をみつめなおすきっかけを与えることができるか、と、商業新聞からは得られない、的確な資料、情報を提供しうるかということ。そして、どのページからも、様々に生きている「人間」の息吹きが感じられるか否かにかかっているのではないだろうか。

こうして抽象的に言うのはたやすいことで企画・編集は本当に大変なことだと思えます。けれども、誰に迎合するのでもない、編集者自身が今必要と感じるところ、その感性を大切にかかわり続けられるならば、そこでは必ず読者との緊張感が持続することでしょう。

うし、この読者との緊張感こそが、充実した誌面を生み出していくものと信じています。

十一月号、村田尚子さんの展覧会パートⅡ六年生の「平和」のイメージ、に感激しました。いい実践であり、また、いい報告でした。「平和」のイメージがふくらみ、考え直され子どもたちの文章も読んでいるうちに、なぜか涙が出そうになりました。一五一人全員感想文が読みたいたと思いました。

中三の三女は読み終わって、この壁掛けを見に行きたいけど、東京ではねえと残念がっています。家族にも、職場でも、そばにいる誰かれに「ちよっと読んでみて」とすすめた。誰もが何らかの感銘を受けて、平和ということばの前に立ちどまったように思えました。国際平和年の国連決議もきっちり読もうと思っています。

また十一月号20頁の情報は、新聞をみたとき、私も変だなと感じたまま放っていましたので、正確な情報をのせていただいで喜んでいました。「家庭科共修共学を考える会」の次の集まりのとき、コピーして読もうと思っています。

十二月号、まず表紙がいいですね。初めての人にちよっと手渡すとき、十二月号のよう

な強さがあると、私まで勇気づけられて、ひょいと手渡したい気になります。ポインセチアの線と、葉のうすいみどりが生命でしょうか。加藤さんの平和への強い思いがほとばしり出たのでしょうか。

磯部さんの中学校の実践記録、おわりの十行がきまっています。家庭科の先生の共修の前にされた気持が伝わってきます。新しい家庭科、共に模索し、創っていきましょう。私も具体的にどんな家庭科を創っていきたいのか自分自身に改めて問い直しています。

加納実紀代さんの現在を戦中と認識するという主張、はつとさせられました。

青木悦さんの文章は、前月号の村田尚子さんの六年生の「平和」のイメージと連続したところで伝わってくるものがあり、考えさせられました。
(長岡京・金森順子)

◆十二月、郷さんの巻頭言、わたしもわたしの一人分を考えたいと思いました。「一九八六―地球」を見すえた一年」を読んでもそう思い、暉峻さんを読んでもそう思い、加納さんを読み、村田さんを読んでもそう思いいます。それほど、ことはつきりしていると思います。世の中がそれとはちがう方向に

動いていることを考えます。

「日本の男達の知的水準」、Weならば、どうしてもいってみたいことでした。これは男の人が書いたから、遠慮して「男たちに対して」としたのでしょうが、相対的に女の人がそこにいます。婚姻に、どうかすると汚い言葉をかきせられて、そのことをよろこびとして発表していること、残念だなあと思えます。でも、そのことを、女の人から女の人に向けて批判的に言うのがなかなかむずかしいです。

それとちよつとちがいますが、専業主婦を優遇しようという法案が宙ぶらりんになっているように思いますが、それなど働く女の人からはなかなか言うのがむずかしいことだから、だれも何も言わないのだろうか、というようなことを考えました。収入がふえることなら、専業主婦とひとくくりになされているわたしが文句を言うべきことではないかもしれないが、よく考えないと、主婦というところへ押しこめようとする意図があるかもしれないし、外で収入を得て働く女の人たちに対してどうなのか、とわたしは思います。

主婦としての働きに収入があるのではなくて、その夫の収入のところで操作するという

在り方、そうして一方、国勢調査で主婦イコール無職、と押しつけられるくやしさ（子どもでさえ、学生という身分があるのに）。

織田が浜の絵はがきづくりをジャーナリズムがとりあげてくださるのに、主婦二人の手づくりだというところが、例外なく強調されそれによつてたくさん売れたということがあったと思いますが、わたしは主婦として絵はがきをつくつたのではないのです。詩をかく人間としてつくつた。で文句を言いたいのですが、ならば主婦ではないのかというと、たしかに主婦なので寂然としない気もちがのこります。話が少しずれてしまいました。

小林さんの季節のお弁当、毎回楽しく、つくろいきいきおいが文面からあふれていて、読むのが好きです。

（横浜・羽生楨子）

◆「いま中学校で」「教室の窓」「季節のお弁当」など、楽しみにしているものです。また十二月号、堀内静子さんの発言「日の丸・君が代はごめんだ」に、大きく共感しました。村田尚子さんの飾らない文章もあたたかくて、心に残りました。

（東京・福井晴江）

◆Weがとても充実してきたことを感じます。

Weの読者から、ベルリンまで手紙をもらったりました。

私はベルリンのクロイツブルクという、トルコ人や外国から来た人の子どもーそれも貧困なーがたくさんいる地区の小学校に、朝八時から終わりの一時まで毎日、一年生から六年生の授業をずっと通つて見ました。クラスの殆どはドイツ人ではありません。

しかし、そのいき届いた教育ークラス担任が市に申請すると、市の費用で家庭教師がおくれた子の家に行つて、個人教授をします。そして、いじめもなく、なんと子どもらしくいきいきとしているか――

その現実を見て、一生の忘れられない贈物もらいました。私も授業をしました。帰つたら、お話ししますね。（西ドイツ・暉峻淑子）

◆「女子差別撤廃条約と仲よくなろう」とか「もつと女子差別撤廃条約を知ろう」とかいうような内容の特集を組んでいただけないかなあ。たて軸に条約の成立までの様子などを、よこ軸に条約を契機にして変わった、り、成立したりした国籍と男女両姓や均等法のその後のたたかいのようすを。

（名古屋・宮崎世津子）

武芸者のたしなみ！

武田 秀夫



教室の授業を九時半に終えたあと焼酎のお湯わりをすすりながらゆっくり食事をし、さて後かたづけとなるともう十一時をまわっています。食器を洗い妻がそれをはじから拭きというようにして、最後の仕事はゴミの始末。すこし離れた公園わきのダストボックスまで捨てにいくだけです。このわずかの時間がたいへん好ましい。玄関を出ると晩秋の夜気がほてったからだを一時にひきしめ、私は深く息をしながら夜空を仰ぎ、それからおもむろに一歩をふみ出す。その瞬間、左右から曲者が打ちかかってくるようにすぐに対応できるように、私は心もち腰をおとし、身と心にある種の構えをとる。と、「武芸者のたしなみ！」ということばが胸にうかび、ほろ酔いの私にはやりと幸福な気持ちになります。「塚原卜伝」や「真田幸村」など、粗末な紙の講談本を古本屋から買ってきては読みふけた少年のころが一気によみがえってきます。

斬りかかる相手の太刀を囲炉裏にかかった鍋の蓋で泰然と防ぐ老剣士の一瞬の身のこなし。その立てた片方の膝、見事にすわった腰

のかまえ、そして鋭い眼光。ああ、懐しき「武芸者のたしなみ！」剣豪たちが技を競い心を磨きあったかつての世界に陶然となつて、ついに現実との境がつかなくなった少年時の私。そうした兄貴をもった弟は、いつも「拔けば玉散る氷のやいば」で「ズンデンバラリン」と斬りたおされ、「空気投げ」の術をくらって六畳のたたみに「ズッデンドウ」と投げられてばかり。おふくろに「床が抜ける！ おもてで遊びなさい」と叱られてようやくやむ騒ぎ。弟ばかりではありません。女の妹まで柳生新陰流の剣の相手を申しつけられ、新聞紙をまるめた「木刀」でポンポンと頭や胴を打たれたあげく、「籠手、面」の連続わざにあつて「もうやあめた」とペソをかく始末。ああ、武芸者の夢を追う横暴な兄貴をもった弟妹の、ほほえましい不幸よ。

刺客につけねらわれる維新の志士よろしく、左右に鋭く心眼を配しつつダストボックスまで一分の隙もみせず歩いていってゴミを捨ててしまうと、さすがにそうした稚氣は私を去り、あとは、三メートルほどの夜道をゆつくりともどります。一戸建てを買って引越したばかりのころはほっそりとした若木にすぎなかった公園のけやきも太くたくましい木となつて夜空をおおい、植込みの連翹の株も青白い街灯の下に黒々とうずくまっています。地を這うようなりすい霧が夜の十二時近くのあたりの景色をやわらかくつつみ、私は陶然と家にもどります。

妻は「なにもこんな夜中にゴミを捨てにいかなくてもいいのに」と言いますが、なんとかかんとかいってゴミを捨てに出るのはこうした秘かな愉しみが私にあるからなのです。「今夜は霧がかかっている感じがだよ」とか「明日は晴れそうだな、星が出てくる」とか、

ダストボックスからの帰りの印象だけしか口にしませんから、妻は無邪気にも私がそうしたものを味わいたがためにわざわざ毎晩定期便のようにゴミ袋をさげて出るのだらうくらいに軽く考えていて、ダストボックスまでの往きの私が秘かに愉しんでいる「剣豪気取り」には気づいていません。武者者たるもの、決して妻子にそうした意図をさとられてはならないのです。隠忍自重、時いたれば飄然と家を去り、大義のために一働きしてまた飄然と家にもどる。その寡黙、この美德こそ真の武者者と似而非武者者とを分つ絶対条件なのだ――。

ところで、講談本の読みすぎの結果、少年時より習性となった私のそうした構えは、首筋を敵にさらすことの恐怖となつていまでも私のふるまいの数々を規定しています。酒場の座敷にあがって呑むときも、私は必ず店内全体を見わたせる位置に壁を背にしてすわらないと落着きません。スリラー映画を観ていて私が最もはらはらどきどきするのは、主人公が暗い廊下などを不安に眼を光らせながらいく、それをカメラが背後からとらえるときです。カメラが凶器のようにつけねらうその背中、その後頭部。「おい、うしろに気をつけろ！」。映画館の闇の中で私は叫びそうになります。たとえばあのジェームズ・スチュアート。あの男の魅力は、その不安そうに動く目もさることながら、実は少年のようにほっそりとむき出しの後頭部から首筋あたりにかけてのなんともいえない痛々しさにある。先日、「裏窓」「めまい」をテレビでみながら、卒然、私はさとしたのです。ウソだと思ふなら、こんどジェームズ・スチュアートの後頭部をよくみてごらんさい。少年の頼りなげな後頭部を大人になつても失わなかつた男の、こちらの保護本能をくすぐるそうした

魅力、それを発見されるにちがいありません。

一方、ジェームズ・スチュアートとは似ても似つかぬ猪首をいやおうなくもつにいたつた私にしても、少年時の華奢な首の名残りはいまもどこかに生きつづけているらしく、「武者者のたしなみ！」などと酔つてひとりふざけていても、背後をおびやかす何者かのかげにおびえるところが相かわらず消えません。

私は青梅という土地が気に入っています。各地を転々としてここにたどりつき、どうやら人生をここで終えそうな予感がしますが、よく考えてみると、私は山を背にして天下を觀望（！）しうろろとした青梅の地勢的位相が気に入っているらしいのです。ここは東京の西のはずれ、うしろには奥多摩・秩父の山々がひかえ、首筋を背後からおそわれる心配がありません。山を背に安心してすわつていられます。だからこそ、と私はこのごろ考えています。後顧の憂いが無いのだから、お前もそろそろ立ちあがって、展けた前方に一步をふみだしてみたらどうだ、と。たかだか三十メートルほど先のダストボックスへだ。「武者者のたしなみ」を忘れず少し腰をおとしていけば、首筋を少しぐらい危険にさらすことも緊張感があつてわるくはないだろう。ただし、万一曲者に斬りかかられたとき、お前の刀は長い浪人生活のあいだに「抜けば錆散る赤鯛！」といった醜状をさらして返討ちにあらはまずは必定。なに、そのときはそのとき。西の山々をながめながら陶然と帰つてくればいい、切られた首だけになつて――。

少年時の講談本の耽讀、その影響はなかなかおそるべきものがあります。



吉 田 和 子

関東周辺で、最近差別事件が頻繁に起きている。私の友人の多くも東京在住者だが、一様に、東京では部落差別は実感できない、と言う。他の地域でも、東京のように混住化すれば差別はなくなる、と主張する部落分散論者にも何人か会った。徳川幕府三百年の歴史の中核、現在も権力機構が集中し、差別構造の頂点の象徴、皇居を基点として広がる東京で、本当に部落差別はなくなったのだろうか、そう思っていた矢先、関東における差別事象を知った。これは都内での例だが、隣人同士の土地境界争いの縫れから、相手が部落出身だとわかると、公然と「えた・ひにん出身者は……。」と差別文書を自宅前に張り出し、「新平民と口を聞いてやるだけでもありがたく思え」と差別暴言をくり返す。その上、通学途中の相手の子供を追いかけて「新平民の子」と大声をあげる等、悪質極まりない差別を七年間も執拗にくり返している。

と言う。この一例でも『東京に差別はない』という言葉の虚しさが立証できる。七年間も差別行為と暴言をくり返す人に対して、周辺住民は係わりを避け、無視するか、あるいは笑いながら見つめているだけだという。周辺住民の人権感覚の鈍さ、消極的ではあっても、差別加担に組みこまれている自身に疑いさえも持たない姿勢が、東京の差別をより深刻にしているように思えてならない。

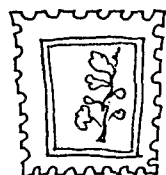
この連載も最終回になった。私の住む大阪の部落の出来事、それも身近な現実を通して考えた事を書いてきた。しかし、環境改善さえ手つかずの部落が関東以北やそれ以外の地方にも沢山ある。そうした所の現実を聞くと背筋が凍り、肌が粟立つ。最後に東京での差別事件を取り上げたのは、「東京に部落差別なんてないわよ」と言った友人の一言が、こだわりとしてあったからだ。東京にも部落差別はある。根深くある。見えないのではない。見ようとしなければ私には思えない。

この連載に登場した人の多くは、解放運動の活動家といった人ではない。ただ黙々と生きてきた人達だ。私は彼等のなにげない言葉の端からこぼれる人間としてのやさしさ、その熱と光に包まれ勇気を与えられてきた。荊冠は受難の象徴だがそこに輝く星は、ここに登場したような人達なのだと私は思う。

(日本キリスト教団部落解放センター活動委員)

〈10〉 高等教育の灯をかかえて

——キリスト教系女子高等教育——



津田英学塾や日本女子大学校が明治三十年代に創設されたことを知っている人でも、明治十年代の日本に既に女子のための高等教育機関が出現し、これに鹿鳴館時代には十指に余る学校が存在したことを知る人は少ない。これらの女子用高等教育機関の一つは、前々回でふれた東京高等師範女子部であるが、これは女教師養成という限定された目的をもつものであり、一般的な教養や専門教育のための官公立系女子高等教育機関の出現は大正期まで待たねばならなかった。したがって鹿鳴館時代に設置された他の女子用高等教育機関は、すべて私立のキリスト教系女子校に付設されたものであった。

最初のもものは、第二回で紹介したフエリス女学校に明治十五年に設けられた高等科で、同年第一回卒業生として島田かし子（後に「女学雑誌」主宰者巖本善治夫人となり、また「小公子」の訳者「若松賤子」としても有名）の

名が同校沿革史に記されているが、設立当初は明確な学科課程や規則が定められたのではなく、生徒の実力に応じて高等科生扱いがなされた。しかし同高等科は「米国女子大学流の教育」として評判であったと、同沿革史は記している。また卒業後直ちに母校の英語教師となった島田かし子の英語力は卓越し、外人教師と比べても遜色がなかったと言われ、さらに米国名門のヴァッサー女子大学の求めによって彼女が書いた英文の日本女性紹介記事は、同女子大学で名声を博し大きな反響を得たと、当時の「女学雑誌」が報告している。

明治十八年には神戸女学院に高等科、翌十九年に青山女学院に専門科、同二十年に立教女学校に高等科、同二十一年に同志社女学校に専門科（師範科・文学科・神学科）、同二十二年に東洋英和女学校、女子学院、活水女学校、明治女学校にそれぞれ高等科、同二十三年に広島女学院に、同二十四、五年頃福岡女学院にも高等科が設置された。神戸女学院高等科は年々充実されて明治二十七年にはミシヨナリーから正式に神戸カレッジの名称が許可されたし、また長崎の活水女学校高等科の学科課程は米国の代表的女子大学マウント・ホリヨークの学科課程に極めて類似した高度なものであった。

このように、官公立系女子教育が量・質共に低調であった明治中期に、人間の平等と女性の自覚を主張したキリスト教系女子教育は、高々と教育の灯をかかげたのであった。

詩

菜の花

羽生 楨子

庭の菜の花は満開です

雨で菜の花の黄は

緑色をおびた冷たい色

部屋のかもりガラスにその色がうつると

そんなしずかな冷たさはほかにはないと思います

その色の中に身を投げてしまいたい

時れると

光に黄色をふりこぼして

黄色というよりほとんど光の色

風に

上へ上へ空へ空へ光をゆりあげ

そんな華やかな明るさはほかにはないと思います

*

菜の花のいのち

午前 新しい黄色ではじまり

明るさで蜂たちの来る時間を迎え

そのときいちばん強いかがり

かがりであたりはむせるほど

蝶は空から落ちる

花のかがりは空に流れる

菜の花ははしゃいでいる

それがふつととまった真昼

菜の花は忙しがつている 花を実にしている

すごい実質 すごいエネルギー

茂れ茂れ

午後 仕事が終わったの？ とききたい菜の花の色

菜の花はほっとしている

でももうこの花は

輝く黄色がしんとした黄色になり

色があおざめ

どこまでもあおざめ

葉の黄緑より まだあおい菜の花の黄

その色で夜を呼んでいる

冷たくやわらかく菜の花は夜を呼びつづけ

そんなやさしさには

だれだって応じないではいられない

もう菜の花は黄色といわない

花は夜の色

夜の菜の花を庭において わたしは眠る

菜の花は いまはなまぐさくあおいかがりを

夜のやみに放ち

夜になまぐさいなんて 花は何するのか

わたしは知らないで

春の夜の夢

代カツ小林 ㊦㊦㊦ 当/弁/の/節/季

当弁オムライス凝って今

近頃、うちの子どもたち（中三と中二）、オムライスに凝ってます。おべんとうにそんなのおいしい？ と思うでしょう。へへへ、それが私の作り方ですとね、おべんとうにした時、ことに偉力を発揮する、なんて自慢タラタラも今回で最後ゆえ、おゆるしを。

とり肉はコマ切れでも、自分でこまかく切るのでも、いずれにせよ黄色のゴニョツとした脂肪は取っちゃいまして。皮は残して。一人分70g位かな。脂取ると50〜60gになっちゃいます。これを例によって、ゆでるのです。塩少々加えて、中まで。湯はあまり多いとうまみがぬけるので少なめでけっこう。これは前日にやつともいいですね。

さて、朝です。玉ねぎ、ピーマン（なくてもよい）など一センチ角にほしただけきざみます。フライパンか中華なべを熱して油を適当に入れ、炒めます。ゆでたとり肉も一緒に。塩少々としようもふります。

炒まったらいったん火をとめ、ここへケチャップをドボツと、全体を味つけするくらいの量を入れてしまいます。再び火をつけ、すべてが

アチチツとなるまでぎぎぎと炒めるのです。こげそうでいいとこげないのですが、やはり気をつけて。火が通ったらまた火をとめます。

ここへ、温いごはんを、使う量どん！ と入れ、木しやもじでせつせつせつと、まるで炒めるがごとく、火の消えたなべの中でまぜ合わせるのです。これぞ大事なポイント、炒めるがごとくであって、決して炒めないのです。炒めるとすると油も多く必要になり、味もくどくなります。あつあつ出来たて食べるならまだしもね。それに、炒めると、うまくやらないとネバリが出たりします。このやり方は、実はおべんとうに限らず、なかなかいいのです。味があつさりして、私はこっちのオムライスのほうが好き。ただし、必ず、温いごはん。ふかしたのでもジャーのでもいいから。おべんとう箱につめたらすぐフライパンを洗い、かわかして油を薄くぬり、塩少々入れた溶き卵をビヤーツと回して薄焼き卵を作り、ごはんをおおいかくし、包丁でバツの切りこみを入れて中チラリ。つけ合わせはブロッコリーの塩ゆで。他にはなんなりと。あればケチャップの小袋添えるといと楽し。



女たちの手で

政治のリフレッシュを

酒井 和子

赤かぶ屋でやっているリサイクルや思春期相談など様々な活動の一つに、「女・選挙の会」というのがある。これは、お金も地盤も何もないけど、選挙って面白そうだからやってみたい、でもどうすればいいのかわからないという女たちのためのインフォメーションセンターである。とはいっても実態は開店休業に近いのだが、最近あちこちから問い合わせがくるようになった。今年の統一地方選では、これまでになく多くの女たちが立候補するようである。政党の推せんで出た方がいいのだろうか、それとも無所属の方がいいのだろうか、という相談や、選挙をやるには最低限何が必要か、というのである。地域の中でもっと仲間を増やしたいという女たちが、選挙というお祭りに、お手伝いではなく主権者としてかわろうとしているのだ。女たちが政治へ目を向けてきた動機は、行革っていいんじゃないかと思っていたけど、学校給食がセンター化されたり、子供数が減ってきたから幼稚園を廃止するなんてとんでもない、絶対反対だからと議会を初めて傍聴してみたら不勉強な議員より自分の方がずっとマシだと思

って立候補することにした、という場合もある。四十歳近くになって再就職あるいは転職しようと思ったが、なかなか正職員にはなれない。遅くまで働いていると地域で活動しようと思っても時間がない。言いたいことも言えなくてストレスがたまるばかり、それを解決するには議員に転職するのも一つの方法だ、という女たちもいる。本当にそうだ。男女雇用機会均等法がスタートしたけど、ほとんどの女たちは男の半分の給料のパートか嘱託、派遣社員なのだから。私もずっと民間の中小企業で働いていたけれど、議員になって初めて、男女平等、年功序列なしの暮らせる給与を手にするようになった。主婦から議員になった女性には、自由時間はもととたっぷりあるし、やめれば又元の主婦にもどるだけ。何も失うものもないしこわいものもないから、誰にも気兼ねなく発言できるという。こんな女たちが増えてきたら、議会の権威主義を保とうとする男たちにはさぞかし脅威だろう。自分の家庭や職場と同じレベルに議会や議員がいると信じて疑わない女たちこそ、地方自治をリフレッシュする力を持っているのだ。

経済の目

生活サイドからみた経済

貿易摩擦⑨ 主食を投機に委ねてよいのか

福島 澄香

昨年九月全米精米業者協会(RMA)が日本のコメの輸入制限を不当とし、米通商代表部(USTR)に提訴した。①日本のコメは国際価格の10倍②輸入制限がなければコメの対日輸出は約17億ドルが見込めるなどを理由にコメの輸入制限撤廃を主張、だめなら17億ドルに見合う日本商品の国内販売規制措置を求めている(一応却下されたが...)。

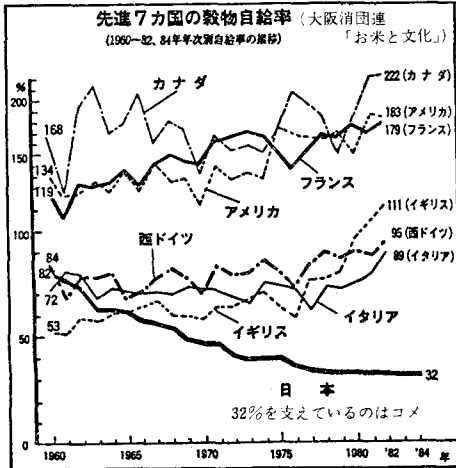
昨年五月の前川レポートは日米間の黒字解消のため「農業に市場メカニズムを活用し、内外価格差の著しい品目については輸入の拡大を図」る必要を強調している。米国の輸入食品を増すため有害な食品添加物13品目を許可し、「自動車など輸出のために国民の健康を犠牲にするのか」と消費者団体に非難されたが、更に日本の農業、食糧の安全保障までも犠牲にするのか? 十月、農村から大都市重視政策への転換に着手。十一月の参院予算委で「食糧を時代に適合するように変える」と首相答弁など前川レポートは着々と実行に移されている。

食糧制はコメが投機の対象にならず安定した価格で過不足なく需給することを目的としてきた。①1918年の米騒動は富山県に始まり50余日間、全国に波及し内閣を総辞職に追込んだが、これは相場師たちのコメ買占めで米価が暴騰、生活に困った庶民が起こした事件②1973年末の第一次石油ショック時、商社の市場操作により各地で石油製品、トイレットペーパー、洗剤、もち米などが品不足で価格が高騰しパニックになったことは、まだ記憶に新しい。テレビでRMAの責任者が「日本の商社から、もつとコメの自由化促進への圧力をかけてくれと言ってきた」というのを聞き、日本商社の露骨な動きに驚く。

日本のコメ消費量1100万^{クワ}。世界全体のコメ貿易量1200万^{クワ}中、日本人の口にあうジャポニカ系のコメ120万^{クワ}位。コメの自由化は投機の対象になり易く、とても安定供給とはいかない。安いタイ米はクズ米10%を含み、細長いコメで炊くとパサパサするもの。

米国のコメは9割が長粒種。米国内で売つ

ている日本の二世が開発したうまい短粒種国宝米は*510円もするし、長粒種で*300~400円、日本の徳用米の方が安い位という。日本のコメは米国の8.5倍といわれているが米国産の生産者米価は11.9ドル、それを4~5ドルのダンピング価格で輸出し、7ドルの差額は米政府が補助金を出し負担している。



い
ろ
んな
十
代
人

「言いわけ」

考えてみれば「人」っていつも言いわけをして暮らしているみたいね。私なんぞ年中無休で「えらいすんまへーん！」と言ってる様なもので。大人は冠頭句として「ゴメンナサイ」とか「スミマセン」をくつつけて言いわけ句を成立させているけど。じゃ子どもたちはどういう言いわけをしているかな？ よくよく耳をそばだてて聞いていると大人のような冠頭句は使わないよ。たいてい「だってー」、「だからさー」、「わざとじゃねーよー」と言う。大人と子どものこのフレーズが問題なのではないさあ。これから言いわけをしようにとしている一人の子どもに向かった時に、たいていの大人はこの「そんなでさー」と口を開く子どものフレーズにイラつく

♣ 鈴木みち子

わけよ。あぐくの果てに「ゴメンくらい言ったらどう？」と淋しい追いうちをかける。いつつ言うけど、大人は世の中を渡って来てるキャリアってのが誰にでもある。子どもにはない。あるとな、がケンカをすればどう考えてもある方が達者なんだわよ。そして思いついた大人は「更生させた」とか、「改めさせた」とかうんだわ。図々しいつたらない。子どもがもはや言いわけの出来ない所まで口達者に追いつめていってそれでも何か言いわけをしるとは大人であることのゴ、マン、さに他ならない！と私は思うわけ。そこまで追いつめられた子どもの考えつく言いわけは、暴力であつたり拒否であつたり自殺だつたりするわけよ。口は災いのものとよく言つたもんだわね。

「抗議型」から
「提案型」に

連載も今回で最後である。「なかなか好感」コマールを一つとりあげて、連載の締めくくりとしよう。

現在すでに第五回コンテストの集計中であるが、今回のコンテストで「なかなか好感」コマールシャルとして高い点数を集めたものの一つにシャルプのクツキング冷蔵庫のCMがある。

CMの内容は、妻が夫と子ども（男の子）の前で冷蔵庫と電子レンジが一体になったクツキング冷蔵庫の説明をしたあと、「だから夕飯の仕度おねがいね」と言つて出かけていく、というものである。

すでに指摘したように、歌手や女優が結婚したとたん専業主婦役をやらされ（例えば、松田

聖子、アグネス・チャン、竹下景子、高橋恵子等）、外出する女を描く場合でも、これこれの製品を使えば安心して家をあげられますよ、というCM（例えば、東芝電気釜・榊原郁恵、象印エア・ポット・小林千登勢など）が多いなかで、夫と子どもに食事の仕度を言い渡して女が一人で出かけるこのCMは、夫や子どもに家事における自立をうながし、女もどんどんやりたいうことをやる、という姿勢がはっきりと打ち出されている。

テレビをはじめとするマスメディアの影響力は想像以上に大きい。ひどいCMに対して「ひどい」と言う「抗議型」の運動だけでなく、「こう変えてみたら」という意見を添えたい。「好感」CMのモデルを提示するような「提案型」の運動をさらに続けてゆきたい。

♥ 吉田清彦

C
M
の
中
の
女
と
男

生きていくための教育

— 養護学校の

家庭科を見て —

半田 たつ子



家庭科行脚四校目は南国土佐へ。高知大附属養護学校を訪ねる。

あなたは十月号座談会の上丸洋一氏の言葉を覚えていますか？

同校の講師、舟橋久子さんの呼びかけで、養護学校の家庭科の先生方が手を結び「養家研通信」が生まれた。このことを載せた「泉」が上丸さんの目にとまり、朝日新聞へいまこそ家庭科「教室からの報告」の最終回に、「生きるわざ磨く」として紹介されたのだ。

上丸さんは、家庭科の男女共修は当然と、頭の中では理解していたが、この授業を見て、生活していく力、生活をつくっていく力とは、ああこういうことだったのか、その力をつけるのに男女の別はないと、ほんとに腹でわかった、了解した、と語ったのだ。

その時、「高知へ行く」と決意した。

ただ、私は障害を持つ子も持たない子も、共に学ぶのが理想だと考えていた。また舟橋さんが次々に送って下さる資料に、大根をかつらむきにしてリボン大根と呼び、その長さを測って生徒の進歩の証とする方法があり、少し疑問を抱いた。しかし、見せていただく

からには、先入感をすべて消そうと自分に言いかけた。

＊

六時半には家を出る子もいるとか。遠くからいそいそと登校してくる生徒たち。八時半ごろから校庭マラソン。先生方も声をからして声援するボール競技を楽しんだ後、授業が始まる。

高等部三年の家庭科の授業は、九時四十五分から一時まで、三時間ぶつづけの調理実習だ。舟橋さんが中一から担当してしっかりと力をつけてきた人たちを、高等部主事の山下侑子さんがバトンタッチ、舟橋流を受けつぐ。今日の献立は、ごはん、煮物、紅白なます、卵焼きだ。お米、八つ頭、大根、人参、すべて学校農園で汗を流して育てたもの。特にお米は、今日のために先生方が精米した新米で、全校生徒のトップを切って味わうのだと説明される。職場実習中の、病欠の人がいるので、生徒は男二人、女二人。

岡山から海を渡って参加されたお二人を初め、県内外の養護学校の先生方、高知大の先生など、見学者のほうをはるかに多いのだが生徒は落ちついて、着実に育った力を発揮する。

一人ひとりが自分の鍋を持ち、自分の食事を自分一人で作る。流し台、調理台、こころ台、個人の場所が決まっており、すべての調理道具に番号が打ってある。こころ台の下に大きい器具を、蓋つきの収納ケースに小道具と一人前の食器を入れる。

今日の実習の説明のあと、係を決め、必要な器具、食器類を確認してから、いっせいにリボン大根を作る。前回より長くなったかどうかを見るのだが、真剣なまなざしと集中力は、八つ頭の皮をむく時にも生かされており、この試みを納得することができた。

窓の外に水切り棚が作られていて、生徒たちは洗いのもの京都、

まめに利用している。野菜を切る順序、鍋に入れる順序、ガスに点火する手順、すべて理にかなう確実な作業だ。朝日新聞に大きな写真が載った吉本君は、要所要所で「できました」と報告する。山下先生、担任の山崎先生、私の食事をそれぞれ三人がひきうけており、市川君だけが一人分を作るので何をして早くできる。市川君は「ハイハイ」とつぶやきながら、皆より先にできる度に山下先生の袖をひっぱる。参観者から優しい笑みがこぼれる。

ご飯が炊けた。係は、蓋をとり水滴を払って、木杓子でご飯をほぐす。煮物にも味がしみ、卵焼きもこげずにでき上がった。山崎先生をお呼びして楽しい試食。そのあと、今朝の食事を、赤・黄・緑の三色の栄養素に分けて偏りがないかどうか発表しあう。それから後片付け。そのなんと徹底していること。ころろまでクレンザーでみがき上げ、ふきん、台ふき、ころろ台ふき、すべて石鹸でよく洗って、なれた様子が小物干しにピンと干す。

かつて、これほど行き届いた調理実習を見たことがない。専業主婦でも、ここまでいいねいに心をこめている人は珍しいだろう。後の研究会でも、全員が感嘆したのだが、私は考えこんでしまった。

*

高知大附属養護学校は、教育活動のすべてが「家庭科」といってもよさそう。一人の人間としての社会的自立を最終目標として、小学部から高等部まで一貫して、日常生活の自立、職業的自立を課題としている。宿泊学習・学校園・林間学校の他、時間割は、生活単元学習、日常生活指導を中心に、小学部には入浴・洗濯もある。教科としては、音楽・図工・体育。中学部では家庭・農耕・木工が、高等部になると、さらに縫工・生活実践が加わる。——そう。将来、

有利な地位につくための教育ではなく、人間の自立をめざす教育を考えたら、現在のカリキュラムは根底から覆されるはずなのだ。

生活的自立をめざす教育の中で、「食生活」は健康維持のために最優先されるべきととらえ、家庭科では中等部からずっと調理実習だけをしている。同校の教育から一般の学校を見る時、教えても教えずとも、生きる上でどうってことないことが、まことしやかに行われているのだなあ、と思う。例えば調理実習——四、五人で一つの台を囲むから、一人二人の活躍で料理はでき上がる。常時、雑用専用の人は、何を学んでいるのだろう。

正確なことは知らなくても、漠然とつかんでいれば何となく生きていける今の世。目前の中間試験・定期試験、少し先の入学試験のために知識を棒暗記する。いい成績なら優越感をくすぐられ、悪い成績なら落ち込む。それがいやだから勉強する——これでは、有利な地位の保障証を獲得した人、あと一息で獲得できるといふ人以外、どうして勉強が楽しくらう。

「誰が考えても生きていく上で必要なこと」でカリキュラムを組む。これを教育の出発点にしなければ。

*

新しい出会いと発見に恵まれた旅だった。養護学校で家庭科を教える人たちが、実践を交流し、悩みを語り合えたらどんなにいいだろう、と考えた舟橋久子さん。あなたの起こした行動が、この旅を生んだ。

ありがとう、舟橋さん。

(養護学校家庭科研究会の問い合わせ先
780 高知市塚ノ原128-150 舟橋久子氏)



◆『若いいのちの像』拝読いたしました。ほ

んとは、もつとあとで、と思っていたのですが、読みはじめたらひきこまれて、素晴らしい御本と思いました。私の思いと一致するところも、教えられるところも多々ございました。沢山の人が読んでくれるといいな、と思いました。ありがとうございました。

(川崎・山田太一)

◆「あごら札幌」11月30日発行のものに『若いいのちの像』を読んで感じたことを幾分おさえて書いてみました。

なぜ幾分おさえるのか? 「自分中心」の感情に左右されているから、今は幾分おさえなければならぬのではないか、と思っています。身近に適切な例もあったのですが、自分中心と自分中心のぶつかりあうもので、もうひどいものです。

でも、本当に児玉さんがとても身近に感じられて、読み易いわりにずしりと重い本でした。『人間って不思議』を読んだ時と同じように、重いのに先が明るい、といった読後感がありました。「あごら札幌」に書いた文の

末尾を「どなたか、この本の読書会と一緒に始めませんか。本を購入したい方も、高橋までご連絡下さい」と結びました。

(札幌・高橋芳恵)

◆『若いいのちの像』を読んで、まず感じたこと「ああ好いなあ、なんて好いんだろう。大人と子供でなく、先生と生徒でなく、人間と人間がじかに向きあっている。ときにはそっと傍から見守っている。ときには離れて、じっと相手のところとつながろうとしている。

自分を相手に押しつけようとしぬ大きなそうした人間関係の中で培われてゆく若いひとたちのころの充実と成長こそ、これからの新しい世紀に生きる姿勢の核となるものだろう、と思います。

日本の戦後の40年、そして50年、半世紀が経ったとき、21世紀を生きる人たちに卒直にすべてのひとが共に生き得る世代をつくり出してほしいと願わずにはいられません。この本を読んで、その可能性を信じていることができ、その喜びを与えて下さったことを、ほんと

にありがたく存じます。(東京・宮下喜代)

◆「花日記」第一集を自費出版してから、もう十年が過ぎました。

本らしくない本なのに、皆々様より温いお手紙をたくさんいただき、大感激したことを懐しく思い出しております。そして主人が亡くなりまして三年目に第二集を自費出版し、この時も多くの方々より励ましのお便りをいただき、皆様の温いお心が身にしました。

そして五年、花と鳥と虫を友として過ごしました日々をまとめた、第三集ともいうべき「花日記」日本のカントリー・ダイアリー」を朝日新聞社の御好意により出版することになりました。どうぞ旧に倍する御支援のほどよろしくお願い申し上げます。

(東京・大室君子)

(Weの表紙裏を二年間、美しく彩って下さった大室君子さんの「花日記」は、やさしくかぐわしく、あなたの心をうるおすことでしょう。トゲトゲしい今の世に人々が喪失した世界が、ここに息づいています。定価一七〇〇円です。

(半田)

泉

情報の頁

◆パンフレット◆ 「共生関係の回復と創造

—水俣大学を創る—

・水俣の地に私立「水俣大学」を設立するため水俣大学を創る会が12月5日発足した。「自然を人間の征服の対象と考えるのではなく、人間と自然との〈共生〉の関係を回復すること、そのことを土台として、人間と人間、人間集団と人間集団とのあいだにも〈共生〉の関係を創造すること、このことこそ二十一世紀の課題であります。私たちは大学設立によって、学問、教育の領域で、日本および人類の未来の課題と取り組みたいと願っています。」

・90年開学をめざし、同大学の構想を紹介、設立資金の寄付を訴えている。

・B5判・48頁

・連絡先 水俣大学を創る会 〒113東京都文京区本郷2-4-3 パークサイド山口504 ☎03-818-7748

◆パンフレット◆ 「男も女も育児時間を—」

(第三集) 男も女も育児時間を—連絡会

・男も女も、仕事と家事・育児を、無理なく両立させたいという、切実な、そして当然な願いから、80年に出発した「育時連」。家事・育児の心配のない「男」を基準とした労働観そのものを変えない限り、本当の男女平等は難しいと考える。

・内容「育児時間の取得例」「育児時間についてQ&A」「経験レポート」「いろいろな立場から」

・一冊300円(送料200円・五冊以上送料無料)

・発行 男も女も育児時間を—連絡会

・〒165中野区江古田4-17-14(増野方)

・同パンフ発行記念会として「トーク、ナウ、男も女も育児時間を」を1月31日(土)pm1時

半～5時、千代田区富士見区民会館和室で開催。ゲスト・毛利子来、岡崎まさる他

・◆集会◆ 「みんなで集まろう教育を考える

大田集会—家庭から地域から学校から—

超教審in大田

・日時 2月1日(日)am9時～pm4時半
・所 大田区生活センター(国電蒲田駅東口下車3分)

・内容 全体集会のあと分科会(教員組合に何を期待するか、塾と学校、人の権利、おとなのくらし・子どものくらし、など)

・参加費 500円(高校生以下無料)

・連絡先 北村小夜(☎03-731-2961)、

高井実夫(☎03-738-6307)、大田教組(☎03-737-1241)

◆長編記録映画◆ 「授業としての入学試験」

自由の森学園・授業をつくる—

・86年2月の2日間、自由の森学園の入学試験が行われた。その時の出会いを記録したもの。16ミリカラー2時間

・制作 グループ現代、太郎次郎社

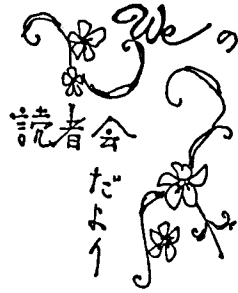
・上映会と講演 1月24日(土)四谷公会堂(地下鉄新宿御苑前駅下車)

・1月25日(日)千駄ヶ谷区民会館(国電・原宿駅竹下口下車)〈講師〉遠藤豊

講演pm2時、映画上映pm2時半

・問合せ先 グループ現代 〒160新宿区新宿

1-12-3藤田ビル



〈We 大阪の会〉

◆十月二十六日(日) 豊中の福祉会館にて。

参加者八名。初参加は安東さん。土木関係の仕事をしていらっしゃる方で、次回のWeの会の提案者になっていただくことになりました。テーマは未定ですが、どういう話が聞けるか、今から楽しみです。いろんな分野でがんばっていらっしゃる方々と、情報交換し合えるようになってきたことを、とてもうれしく思います。しかし、参加者はあまり増えず、少し残念なので、一度大阪市内で会場を捜し、土曜日に会を持ってみたいかどうかということになりました。次回は二月に予定しています。

今回は(御主人ではない)おつれあいの(ご病氣(肺に膿がたまり、それを取るために入院中))にも拘らず、参加してくださった飯田さんのお話を聞きました。

「ふじふみ子」さんの人形展に付き添って、作家の佐多稲子さん達と、チエコやブルガリアの国々をまわって来られた報告会でした。興味深い話ばかりでしたが、特に印象に残ったのは、訪問された国は、古い建物をそっくり大切に残しているということ。国民は、新しい建物を建てるより、費用が三倍かかって、修復に賛成するという。また、ソフィアの市電の話。運転手は女性が多く、質素な切符は約六円で、どこまでも行けるのにほとんどの人は歩くという事。切符を調べる人がいなくて、不正乗車する人もいないそうですが、「いてもよいではないか」。聞くと、そう答が返ってくるという話等々……。

次の日、聞いた話を教室の子供たちにしました。子供たちは、目を輝かせ、聞いてくれます。参加者は少なかったけれど、この話は、何人かの子供たちの中に確実に残る。それでいいじゃないか、そうも思いました。どうぞ飯田さんのおつれあいの病氣が、早くよくなりますように……。

(北川好美)

〈We 田無の会〉

◆十一月二十日(木)「田無の会」では前回

の半田さんによる講演を受けて、「臨教審」についても一度考えてみました。

岩崎、姫野、西内のいつものメンバーに加えて、うれしいことに三人の新メンバーが参加。講演の成果のひとつとして所帯を二倍にすることができました。

新メンバーの西山さんは、男の子を三人育てながら働いている方、そのたいへんさを少しも感じさせないふくやかな顔立ちと涼しげな瞳の印象的な女性です。インフルエンザ予防接種の是非をめぐって学校の在り方に疑問を持ち、前回の講演にも見えたそうです。

武田さんは、中二の男の子と小三の女の子を育てていて、今まさに学校教育の問題に向き合っている方、淡々と話される学校の現実にも、まだ子どもが幼い私達は、ため息の出ることしきり。

柏倉さんは、男の子と女の子の幼児二人を連れて参加。私が先日、T・Vで見た企業の「QC運動」(Quality Control:品質管理)の恐しさについて話すと、御自分が企業で働いていた時の話をして下さいました。どんなに巧妙なQCであっても、やはり人間らしさを疎外するものはいつか化けの皮がはがれるという内容に、ホッとさせられました。

「臨教審」の話から、では私達には何ができるのだろうかということになり、以前『We』でもとりあげましたが「PTA」の問題が上がりました。また、岩崎、姫野さんの第一子がそれぞれ来年小学校へ入学するとのことであつて、さて「PTA」は今どうなっているんだらうということになりました。そこで、今回は経験者でもある武田さんのお話を中心に「PTA」について考えてみることにしました。

次回「We田無の会」―「PTA」について

一月二十二日(木) 10:00―12:00 田無中央公民館

追伸…この後私は、十一月三十日(日)「We埼玉の会」にも虎三(八ヶ月)をかかえておじやしました。そこで一言、田無の会がいろいろなものが入った野菜、サラダの味だとすると、埼玉の会は年齢層も少し上がり、話される内容もグツと身近でかつ深く、お茶づけの味でした。そして出されたキムチのおいしかったこと!「Weの会」行脚が癖になりそうな楽しい雰囲気でした。

(西内みなみ)

(We埼玉の会)

◆十一月三十日(日) あいにくの木枯しの寒い一日でしたが、窓から見える秩父の山並み

が美しい、自然いっぱい飯能・天野さん宅での楽しいひとときでした。まずはお宅拝見、アメリカ式の生活様式で合理的な住まい方をしているらしい様子をつくまなく見せていただいたあと、天野さん手作りのチリ、ピン、キムチ、せんまいなどお国の料理に加え、洋菓子あり和菓子ありのまさに国際食豊かな会合でした。

今回は三歳と八ヶ月の二人のお子様を育てながら、大学院でご研究中の西内みなみさんがニューフェイスとして登壇。教育心理学を専攻する一方、今は家庭科の教師をめざして勉強中。四月から就職希望ということで、西内さんの中で沸き上がっている「教えることへの関心」「教えるということとは?」ということから話題は学校教育の問題に発展してきました。

教師のひと言が子供の後々まで影響(良い意味でも悪い意味でも)することがあるのでは

。担任はどれだけ生徒の実態を把握しているだろうか

。学校に何かを期待しないで現状のまま受け入れて自分なりの対応をしていく

。担任の思いが生徒に思うようには伝わらな

いはがゆき

。世の中全体に人権意識が低く学校教育にもその影響が現れている

などなど意見多数。

また指紋押捺についての意見交換もあり、天野さんが日本に帰化したきっかけや友人達の立場などが紹介され、人権を守るための署名用紙なども回覧されるうちに、あつという間に日が暮れ、最後に今年の出来事と来年の抱負を発表し合いキムチをお土産にいただいて、今年最後の読書会は閉会となりました。

次回は一月十八日(日)午後一時半より岩場宅で

〈千葉でWe読者会を開きます〉

・日時 一月二十四日(土) pm 2時〜8時

・所 市川市役所市民談話室 0473-34-1111

・内線641 (国電本八幡駅北口下車徒歩一分)

・連絡先 横山れいこ T 272 市川市大津三

一 18-15 土屋庄 33 0473-76-4388

〈宮崎春美さんからの呼びかけ〉

◆長野のWeの読者の皆さん、読書会をしませんか、ご連絡をお待ちします。

連絡先 T 392 須坂市高橋町一〇一六-六

ハイツミヤザキ二〇五 0262-46-4388

地域にWeの読者会を作りましょう。(編集部)

十字路

■北海道 報告書の刷り直し(北海道11/21)

アイヌ施策の資料とするため、道が七年ぶりに実施、今月五日に発表された「ウタリ生活実態調査報告書」が、数字や表現に二十四カ所の誤りがあるとして、刷り直されるハメになった。訂正の中で特に指摘されたのは、今回の調査で初めて設けられた「ウタリとしての差別体験」を問う項目。調査表では「ひどい差別を経験したことがある」となっていたものを、報告書では「ひどい」を削除し「差別を受けたことがあった」と変えて、回答の百分率を示し、当初の設問とは違う調査結果になっている。このほか、随所に調査票の質問を簡略にした表現や数字の誤りがあった。道は急ぎ「正誤表」を作ったが、知事の私的諮問機関であるウタリ問題懇話会で、ウタリ協会側委員より「正誤表といちいち照らし合わせるのは面倒。将来保存される資料として問題がある」等の意見が出され、刷り直しとなった。

■宮城 仙台を福祉の街に (河北新報10/5)

仙台市が昨年制定した建物、公共駐車場な

どの福祉環境整備指針を民間の立場で実践し、お年寄りや身障者が安心して住める街づくりを進めようと、仙台商工会議所など民間の二十七団体は六日、「仙台市福祉の街づくり推進協議会」を設立する。建物の出入り口のスロープや車いす用エスカレーター、トイレ、水飲み場、床の誘導表示などの細かい設置基準を設け、県百貨店協会、県医師会、県銀行協会、各商店街のほか、建築、設計業者の団体が協力体制を組み、福祉設備普及やPRに独自の取り組みを行う方針。(加藤弘子) 11/24

■東京 結婚に関する日米の比較調査(毎日

日本性教育協会・日本青少年研究所がアメリカ・コロンビア大学のL・デビッツ教授と共同で行った結婚に関する調査によると(二)三十歳代の日本男女各三百人、アメリカ男女二百人を対象)、既婚者に関する調査で「夫婦の共同行動」についてはアメリカの方が、言語によるコミュニケーションも、旅行など実際の行動も活発であるのに対し、日本の場

合「週一、二回以上子育てについて話し合う」人が半数を超えていて、共同行動では一番多かった。また男女の役割分担では、日本で七三%の人が収入獲得を「もっぱら夫の役割」ととらえているのに対し、アメリカは「もっぱら夫」と答える夫は一五%、妻は二九%と少なく、男性の四七%が「妻にもっとお金を稼いでほしい」と答えている。これに対し日本男性の切実な要求は「気分のムラをなくすように努力してほしい」の四四%だった。

(福井晴江)

■神奈川 差別意識をなくそう(朝日9/14)

在日韓国・朝鮮人に対する日本人の差別意識を解消することを狙いとした高校生向けの歴史副読本「わたしたちと朝鮮」が県立高校教職員組合から出版された。中心となった県川崎高の三浦泰一教諭は、自校で行なった高校生意識調査で、「日本に朝鮮人がなぜ多くいるのか」を知らない生徒や、「朝鮮人と聞いて、こわいという印象を持つ」生徒が半数近くを占めるなどがわかった。そこで、日朝関係史を詳しく、教科書ではこれまで触れなかった話や検証も多く、朝鮮人の日本居住の増えた理由なども日中戦争、第二次大戦などからめて平易に書かれている。(山口里子)

■福井 子供の体がおかしい (福井11/15/24)

「最近の子供はぞうきが絞れない。ふき掃除をさせると廊下はベタベタ。それにはしの持ち方もめちやくちや」。こんな話をよく聞く。福井大の戎(えびす)利光助教授がまとめた『子供の健康学』の研究をもとに、「もやしっ子のカルテ」として八回の連載で、県内の子供の実態を報告している。「退化する手」「骨折」「へん平足背中ぐにや」等。そんな中で、多くの学校がマラソン、はだし教育、姿勢体操等、子供の健全な発育・発達を願う取組んでいる事例や、「なるべく戸外で太陽にあたって元気に遊ぶ」よう指導し、ノーテレビデーやファミコンの時間制限等、家庭と協力しながらの取り組みを紹介している。(山崎京子)

■新潟 ユニークな教育実践で受賞 (新潟日報11/22)

創造性に富んだ教育の実践に顕著な業績をあげた学校に贈られる時事通信社の教育奨励賞受賞校に、新潟市立白新中学校(江口健一校長)が選ばれた。同校では、クラス全体で単元学習を終えた後、生徒が各自で①補充②習熟③深化のどれかのコースを選び、学習を

深めるという内容だ(数学、英語、音楽で導入)。また放課後学校裁量の時間に「面白く学べるように」と「白新ゼミナール」という時間を設け、バズルやゲームを使った数学、英語学習や、道徳の時間や学校行事の時間を有効に使って「生き方」の指導として、高校訪問をしたり、地域の人たちから職業の話を聞いたりと一年生からきめ細かな指導の実践が評価されたもの。(山口久子)

■長野 スタートラインの性教育 (信濃毎日11/17)

上田市で開かれた県教育研究会の学校保健教育分科会で、学校現場の性教育の難しさや課題が相次いで報告、指摘された。「子供たちの現状に危機感を抱き、性教育の必要性を痛感している」という点ではすべての意見が一致したものの、いざ実践という段階では個々の教師や学校が試行錯誤を始めたばかり。養護教諭のなかから、「教頭先生に性教育の授業をさせてほしいと申し出たら、その授業は担任がやるものだと言われてしまった」との声に、助言者の小諸市野岸小の坂口せつ子養護教諭は、「子供たちの危機を知っている養護教諭が、今以上にもっと勉強を重ね、ことあるごとに性教育の必要性を訴え、

担任と話し合いながら、まず授業実践をできる範囲で始めてみるしかない」と強調した。

(三島久枝)

「性教育を男女共学の家庭科で」実践している県下の家庭科授業を同紙は同シリーズ(いのち)を学ぶ・生と性の中で紹介している。上水内北部高校では「生と性」を共学の授業に最もふさわしいと位置付け、三年生を対象に週二時間ずつ、独自の教材を選びカリキュラムを組んでいる。担当の中村法子教諭は「特に性教育という意識はないんです。性を家庭生活や、ヒトの成長の一コマとして見、学びたい」と。(岩崎多鶴)

■愛知 治療用ピルで副作用死(毎日11/14)

経口避妊薬(ピル)と同成分の治療用の女性ホルモン剤を、避妊用に飲み続けていた女性が、じん障害などを伴う血液の難病にかかり、死亡したことが名古屋の医師グループによって明らかにされた。ピルより含有ホルモンの多い治療用剤は、副作用の発生率が高いと心配されていたが、死者が確認されたのは国内で初めて。医療現場における「治療用ピル」乱用の実態と、これに対応できぬ薬事行政の遅れが問題になりそうだ。

(岡本のりこ)

ア・ン・テ・ナ

◆学区制・9月入学は一臨教審◆

臨教審第1部会は「審議経過の概要（その4）」の部会案について審議した結果、臨教審発足以来焦点となっていた公立小・中学校の通学区区域制の自由化問題については、「各教育委員会が地域の实情に応じて、制度を適切に運用すべき」と制度の弾力的運用で対処することで一致した。

（読売，12・3）

「臨教審が取り組む最大の課題」と位置付けられている9月入学制問題について、同問題を担当している「入学時期に関する委員会」は、9月入学制導入に力点を置いて審議を進めてきたが「概要」では賛否両論を併記するにとどめることになった。文部省が完全に移行が完了するまでの所要経費を試算した結果、18,049億円かかると答えが出て、大蔵、文部、自治の3省が反対を表明したため。

（同，12・15）

◆登校拒否 中学校では10年前の3.6倍◆

'86年度学校現場では、いじめに関する相談は前年度の3倍を超え、登校拒否児も全国の公立小・中学校で約32,000人にのぼり過去最高になったことが文部省の実態調査でわかった。特に中学生の登校拒否は10年前の3.62倍の27,926人で、生徒1000人につき4.7人の割合になる。小学校でも10年前の1.44倍の4,072人。態様別では①不安を中心とした情緒的混乱で登校しない（62%）②ずる休み（11%）③転校、入学時の不適応など（9%）。一方沈静化しつつあった校内暴力も減少率が鈍ってきた。

（朝日，読売，12・10）

◆外国人登録が減少 在日韓国・朝鮮人◆

在日韓国・朝鮮人で外国人登録をする人の数が減少傾向を示し始めたことが、法務省のまとめでわかった。韓国・朝鮮籍の登

録者数は、朝鮮民主主義人民共和国への大量帰還の影響で1961年に567,452人まで落ち込んだがそれ以降は増え続けていた。変化が現れたのは昨年末で、女子差別撤廃条約批准の成果として、国際結婚で生まれた子に父系主義で認めていた国籍を、父母両系主義に改めた国籍法改正がきっかけとみられる。

'84年末の687,135人から1年間に3800人減った。法務省は「減少傾向は今後もひき続き、在日韓国・朝鮮人の日本社会への同化が進むことにつながる」とみている。

（朝日，12・5）

◆指紋採取の道具排除を◆

兵庫県警と神奈川県警が指紋押捺拒否者の被疑者指紋を専用の道具を使い強制的に採取した問題で、社会党の小沢克介代議士が、12月17日衆議院法務委員会で「指紋採取に道具を使用するのは人権侵害だ」と追及、連藤法相は「過剰的な道具はできるだけ排除していくべきだ」と述べた。なお同委会で警察庁幹部は「20道府県警で金属製の指紋採取具を購入して使用している」と述べた。

（朝日，12・17）

◆国家秘密法促進一議決は論議不足◆

国家秘密法（スパイ防止法）制定を求める「世論」として促進派の最大のよりどころになっている地方議会での制定促進議決は、その大半が法案の固まるずっと以前に、町村部を中心に十分な論議をしないで進められ、しかも、国際勝共連合が最初から地方議会への働きかけに大きな役割を果たしていた実態が明らかになった。促進議決をした自治体は10月末で、28県145市区1,146町407村にのぼり、議決率は52%に達するという。しかし、人口の多い市部での議決率は22%にすぎない。都道府県レベルでは、東京、神奈川、千葉、大阪、京都、兵庫、

愛知、北海道など大都市圏が議決をしていない。だから、議決率52%が「国民の多数の支持」とはいえない。勝共連合は'68年、統一教会の文鮮明教主を創始者として設立。同法制定をはじめ、防衛力増強、有事立法、改憲などを掲げている。(朝日、11・25)

◆門戸開放アピール 保父さん110人◆

「採用試験を受けられない」「養成校に入れない」一。全国男性保育者連絡会は女性10人を含む120人が参加して、11月24日交流集会を開き、「男性差別」の実態調査結果を報告、改善を訴えるアピールを採択した。①すべての自治体の採用試験に男性が受験できること②多くの養成校で男性が受験できること③「保母」の名称を改め男女とも「保育者」とする一。(朝日、11・25)

◆女性研究・家庭生活は二者択一？◆

京大大学院卒業生のうち700人に結婚や研究について聞いたところ、184人から回答があった。結婚しているのは68%で、同年代女性の84%に比べて低い。結婚している人の13%が「仕事をあきらめ」育児と研究は「両立させていない」が23%。そのうえ19%の人は「研究のために子供を産まない決心をした」としている。未婚の人の69%は「結婚しても研究は続ける」が、「研究のため結婚はしない」と「結婚の意志なし」が20%にのぼった。また定職のないオーバードクターの経験者は半数にのぼり、平均3年以上を非常勤講師やアルバイトで生活している——女性研究者の深刻な現象が浮かび上がった。(朝日、12・10)

◆女性の主張認める新判断◆

退職勧奨年齢や昇給率など賃金面で男性に比べて不利な扱いを受けた、とする鳥取県の女性元教諭や、日本鉄鋼連盟の女性職員が「女性差別は、法の下での平等を保障した憲法や労働基準法に反する」などと訴えていた二つの訴訟で、鳥取地裁と東京地裁は12月4日、女性側の主張を基本的に受け入れ、「性による差別は違法不当」とする新判断を相次いで示した。「男女雇用機会均等法」は4月からスタートしたが、司法レベルで、その精神をくみとった判断を示したものであり、今後の雇用関係のあり方

に与える影響は大きいとみられる。

(朝日、12・4)

◆夫婦間でも婦女暴行◆

夫の暴力にたまりかねて実家に帰った妻を友人と連れ戻す途中、乱暴したとして婦女暴行罪に問われた夫に対する「レイプ裁判」の判決が12月17日、鳥取地裁で言い渡された。相瑞一雄裁判長は「夫婦間でも婦女暴行罪が成立する」との判断を示し、夫とその友人に有罪の判決を下した。夫婦間に「婦女暴行罪は成立しない」とする通説を覆すわが国初の司法判断となった。

(朝日、12・17)

◆電算機のプロ「モラル低い」◆

コンピューター犯罪や事故防止策の法制化をすすめている警察庁が、実務経験数年という社会人1,154人、学生394人を対象にアンケート調査を行った。それによると、15.5%の人が権限を与えられていないコンピューターシステムに「侵入し、操作できる」とし、25%は通信回線で流されるデータを「傍受できる」とし、7.7%は「解読もできる」と回答。自分がした不正について、「他人のファイルの無断閲覧」37.1%「他人のIDやパスワードを使った」27.9%、「個人データの改ざん」0.7%、「他人のフロッピーディスクを消去」0.9%。自分がやってみたいのは、コンピューターの目的外使用、他人ファイルの無断閲覧で、それぞれ3割。こうした行為を「別に構わない」とする者が5%以上あり、「場合によっては許される」を加えると70%になる。警察庁は「あまりにモラルの低さが目立つ」と当惑。12月4日に開く安全対策研究会に評価の検討を諮る。(朝日、12・3)

◆ワースト1はひょうきん族◆

日本PTA全国協議会はテレビ番組についての調査結果を発表した。「好ましい」番組は、①まんが日本昔ばなし②わくわく動物ランド③中学生日記④なるほどザ・ワールド⑤愛少女ポリアンナ物語。「好ましくない」番組は、①オレたちひょうきん族②タやけキャンキャン③夏・体験物語④加トちゃんケンちゃんごきげんテレビ⑤スケバン刑事の順だった。(朝日、12・13)



〈表紙のことば—加藤由美子〉

空と、地上の草木を描いたこの一年、締めくくりはロゼットにしました。根に養分をいっばいためた、なずな・たんぽぽ・おにのげし・はるじょおんたち、もうすぐだよ。もうすぐ春がやって来るよ。まためぐり来る新しい季節。

★Weバックナンバーのご案内★

- (vol.1) 〈vol.2〉 (品切れ)
 (vol.3) 4月号 PTAって何
 6月号 地域に生きる
 7月号 少年・少女たち
 8・9月号 “遊ぶ”ということ
 11月号 “病む”ということ
 84年増 自分らしさをこそ
 2・3月号 “育てる”ということ
 (vol.4) 4月号 性をどう語る
 5月号 結婚の風景
 6月号 家族、その人間関係
 7月号 離婚と子どもたち
 8・9月号 法律と私たち
 85年夏増 働き続けるために
 10月号 いま、熱く女の時代
 11月号 みのりの秋に
 12月号 人間と土を生かす
 85年冬増 自分らしさをこそⅡ
 1月号 くらしの文化を探る
 2・3月号 水はいのちの泉
 (vol.5) 4月号 幼い日—大人は忘れてしまった
 5月号 子ども—大人の勝手な思い込み
 6月号 “いじめ”—その根っこには何が？
 7月号 性—小・中・高校生は何を思う？
 86年夏増 こどもたちへ—大人になる旅
 8・9月号 親—いま、学校に何ができる？
 10月号 家庭科—いま新しい地平に立つ
 11月号 家庭科—どう変える、どう変わる
 12月号 平和—今年を顧みる
 86年冬増 自分らしさをこそⅢ
 1月号 女性—世界を変え得るか

がそのまま脳裏に焼きついています。

(青木)

こう。

(中野)

ぐに継続手続きを！(馬場)

悩んでいる」です。(半田)

◆『若いいのちの像』の出版が新聞で紹介され、大きな反響をよびました。それに応えて催された「We秋のつどい」——一冊の本の出版がきっかけで百人近くの方々が集い、重いテーマを語り合いました。「生きていけるじゃないか」まだまだ私の内に生きつづけていたこのテーマ。舞台をかざった、加藤由美子さんが書いて下さったタイトル文字がそのまま脳裏に焼きついています。

◆近年は年を迎えるより、送るほうに心が動かされます。一年を次第に短かく感じるの、物心がついてから現在までの年数を分母として知覚するから、つまり、十歳の子にとつての一年は、全生涯の1/10だが、四十歳の人には1/40になつてしまふからと教えられました。短かくはあつてもこの一年、たくさん新しい経験ができました。この経験が私の成熟につながっています。

◆毎月、力のこもった原稿をお送り下さった連載執筆者の方々、ありがとうございます。連載執筆紹介の「ひと」を担当して二年。それぞれの歴史を負つてその方が今ある、そんなことを痛切に感じさせるものでした。あ

りがとう。遠方でお訪ねできなかつた方々、申し訳ありませんでした。来年度は青木さんにバトンタッチします。◆同封のはがきです。◆たけしとフライデー、どちらに非が？ 喧しい論議の中で思うこと。おもしろいことが最優先し、時流に乗って上手に泳ぐ人を「神」と奉る今の世相。真摯で誠実な表現手段を潰していった視聴者・観客・読者：は免罪されるのか？ 自分の都合だけをふりかざし他人の都合を視野に入れない！成熟から遠い人が濶歩するいまに、あなたは責任なしと言えるのか？ ◆6年目のWeをよろしく。No.1は「先生は

新しい家庭科—

Vol. 5 No. 12 1987年 1月20日発行
 ¥530 (年間購読料・増刊号含 ¥6700)
 編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

旭川	京栄堂書店	つみ書房、西萩書店、結く新宿	丸山書店、岡崎書房、ナガオ	西宮	イカロス書房
札幌	北東京堂書店	紀伊國屋書店、模索舎、風書房、伊野屋書店、図南	カオ正文堂、豊川堂、ちくさ正文堂、兼松書店	尼崎	宣文堂、塚新西武B.C
島根	矢野書店、タイヤ書店	書店く渋谷「チーすん」がさく「篤節」宏精堂、中村書店、稲田書店、大和書店	江崎	明電	姫路九善
苫小牧	熊谷書店	く世田谷「やまべ」書店、江崎書店、桜文堂「北」愛京堂	豊田	石野	浅野八代書店
伊達	新生堂	く大田「三州堂、藤乃屋書店」	岡崎	原山	学友書房
函館	神田書店	く荒川「昌栄堂「板橋」裕弘堂、アスカ書店「江東」古田書籍部、ブックロード「品川」雄文堂「吉祥寺」ウニタ書房「三鷹」第九書房、たべもの村「武蔵野」いがらし書店「調布」神代書店「小金井」かごや書店、緑町大洋堂「府中」国府書店会、一二三書房「国分寺」吉野書店「国立」増田書店、富士見台店「立川」オリオン書房、泰明堂、石井書店「小平」和中書店、明文堂書店「清瀬」マルオカ書店、飯田書店「町田」久美堂「八王子」小沢書店「秋川」増進堂書店	瀬戸	岡米	伏見屋
青森	成田本店	横濱	瀬戸	井	池田成章堂
盛岡	東山堂、みみず書房	川崎	瀬戸	米	金森書店
花巻	誠山房	横浜	瀬戸	鳥	福島かねつき堂
水戸	松田書店	横浜	瀬戸	出	今井MC本店
仙台	こどもの本の店	横浜	瀬戸	津	富士書房
ブーの家、八重洲書店、萩書房、高山書店、千忠書店		横浜	瀬戸	和	武田書店
古川	高山書店	横浜	瀬戸	野	金山文具店
秋田	ホビット館	横浜	瀬戸	松	大学前岡山書店、ブックス文化の友
横手	加賀屋書店	横浜	瀬戸	島	やまびこ書店、いづみ書店、紀伊國屋書店、ニシヤ書店
酒田	金木商事	横浜	瀬戸	原	草間書店
山形	八文字屋	横浜	瀬戸	道	花本書店、啓文社
	高陽堂書店	横浜	瀬戸	岡田	岡田書店
	ほんない	横浜	瀬戸	寺	タカハシ書店
鶴岡	阿部久書店	横浜	瀬戸	松	みやたけ書店
福島	岩瀬書店、西沢書店	横浜	瀬戸	島	キング堂書店
郡山	松文堂「うばる」書店	横浜	瀬戸	徳	雄徳堂徳野書店
津若	川島朝日堂	横浜	瀬戸	土佐	ブックスエミール
前	アリス「近」書店、換手堂	横浜	瀬戸	山田	依光書店
沖	島村書店	横浜	瀬戸	北九州	北九州書店、白石書店、黒崎ひとつりわB.C
宇都	杉山書店	横浜	瀬戸	福岡	金文堂、横文館、金進堂
水	ツルヤB.C	横浜	瀬戸	二日	丸山スコレ店
土浦	白石書店	横浜	瀬戸	市	みやはら書店
浦川	岩瀬書店、須原屋	横浜	瀬戸	大牟田	金善堂
	新井書店	横浜	瀬戸	筑後川	吉田書店
	ブックスサトウ	横浜	瀬戸	大井町	山口書店
越谷	日野屋書店	横浜	瀬戸	唐津	尾崎堂書店
東松	比企文化社	横浜	瀬戸	佐賀	まつら書店
和光	山屋	横浜	瀬戸	長崎	金華堂
狭山	楓書房	横浜	瀬戸	世保	好文堂、童話館
運宮	マスダ書店	横浜	瀬戸	熊本	金明堂
	阿里書房	横浜	瀬戸	延岡	教育文化用品KK、三章文庫
	ペンギン書房	横浜	瀬戸	宮崎	池田書店
飯間	安藤芳文堂	横浜	瀬戸		大山成文館、岩印書店、川畑書店
新座	ヤマドウ書店	横浜	瀬戸	大分	開書堂、今村書店
鴻巣	みやかわ南口店	横浜	瀬戸	志布志	スズキ書店
船橋	鴻文堂	横浜	瀬戸	鹿児島	加世田書店
	前原かっぱ、西武B.C、はつらつ書房	横浜	瀬戸	大学生協	
松戸	元山書店	横浜	瀬戸	常広畜産大学、東北大学、岩手大学、福島大学、新潟大学、群馬大学、宇都宮大学、茨城大学、埼玉大学、芝浦工業大学、日本女子大学、東京大学、東京家政大学、成蹊大学、横浜国立大学、山梨大学、愛知教育大学、信州大学、金沢大学、和歌山大学、大阪市立大学、立命館大学、宮崎大学、高知大学、香川大学、鳴門教育大学	
田沼	大和屋書店	横浜	瀬戸		
鎌谷	岡田書店	横浜	瀬戸		
佐原	多田屋	横浜	瀬戸		
市川	大杉書店、千里堂	横浜	瀬戸		
浦安	安藤書店	横浜	瀬戸		
君津	杉浦書店	横浜	瀬戸		
東葛飾郡	ブックスさかざい	横浜	瀬戸		
東京	京「千代田」ビビ、日成堂、書肆アセス、三省堂本店、書泉グランデ、東京堂、八重洲ブックセンター「豊島」池袋書店、紀文堂書店「杉並」木風舎、新愛書店、プラサード書店、た	横浜	瀬戸		

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由でご指定のうえ、ご注文下さい。